

む

無縁寺心澄 (むえんじ・しんちよう/1905～1945 年)

千葉市生れ。本名・藤井茂樹。川端画学校で日本画を学ぶ。1927年東京のザンボア図案社に勤務しながら水彩画を学ぶ。28年帝展初入選。白日会・日本水彩画会等でも活躍するが、32年頃より中央画壇と縁を切り専ら千葉市を中心に活動が続ける。1945年没、40歳。水彩画家

向井久万 (むかい・くま/1908～1987 年)

大阪生れ。1926年大阪府立岸和田中学校卒、29年京都高等工芸学校図案科卒。29年丸紅に勤務し、34年の退勤まで図案を担当。36年西山翠嶂に入門、画塾青甲社に学ぶ。39年第新文展に入選し、40年毎日新聞社主催紀元 2600 年奉祝日本画展で佳作。41、43年新文展で特選。48年創造美術に参加、創立会員。24 年「娘達」などを出品する。51年創造美術が新制作派協会と合流して新制作協会日本画部となつて以後は同会に出品する。74年新制作協会日本画部が同協会を離脱し創画会を結成して以後、会員。近年は、仏画に、多くの秀作を生んだ。東京で没、78歳。日本画家

向井修二 (むかい・しゅうじ/1940 年～)

神戸市生れ。大阪美術学校で学ぶ。1959年西宮市美術協会で元永定正と出会い、59年具体美術展に出品、61年会員(解散まで在籍)。63年グタイピナコテカで個展。65～67年にサンフランシスコ美術館で開催され、全米を巡回した「日本の新しい絵画と彫刻」展に出品。洋画家、具体、洋画

向井潤吉 (むかい・じゅんきち/1901～1995 年)

京都市生れ。弟は彫刻家向井良吉。1916年京都市美術工芸学校中退、関西美術院に学ぶ。20年上京、川端画学校に学ぶ。二科会展に入選。27～30年渡欧、午前中はルーヴル美術館で模写、午後は自由制作、夜はアカデミー・ド・ラ・ショミエールで素描。30年二科展で樗牛賞。36年二科会会員。戦争画を描く。40年昭和洋画奨励賞。45年行動美術協会創立会員。86年世田谷美術館で回顧展。93年世田谷美術館の分館として向井潤吉アトリエ館が開館する。東京で没、93歳。洋画家

向井良吉 (むかい・りょうきち/1918～2010 年)

京都生れ。洋画家・向井潤吉の弟。東京美術学校

(現東京芸大)卒1951年行動美術協会会員。61年高村光太郎賞、日本国際美術展優秀賞。81年芸術選奨。81年武蔵野美大教授。84年中原悌二郎賞。白銅、アルミニウムを素材として制作、国際展にも出品。戦後の抽象彫刻を代表するひとり。46年マネキン製作会社の七彩工芸(現・七彩)を創業して社長、77年会長。2010年没、92歳。彫刻家

向井隆豊 (むかい・りゅうほう/1950 年～)

兵庫県生れ。1969年土佐高等学校卒、76年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。アーティスト・ユニオン参加。80年独立美術協会会友。84年独立展高島賞。86年独立展独立賞。87年独立美術協会会員。93年海を描く絵画展金賞。2000年安井収蔵賞。洋画家

武者小路実篤 (むしやのこうじ・さねあつ/1885～1976 年)

東京生れ。学習院高等科卒。1906年東京帝国大学入学、07年中退。1910年志賀直哉らと「白樺」創刊。西洋美術の紹介。18年宮崎県児湯郡に「新しき村」を建設。23年画作を始める。29年日本橋・丸善で絵画個展。32年国画家会会員。51年文化勲章。52年日本芸術院会員。東京で没、90歳。小説家・詩人・劇作家・画家・版画

宗像逸郎 (むとう・いつろう/1902～1988 年)

広島県生れ。林重義に師事。1932～40年独立展に出品。33年新文展で特選。34年新時代洋画展を結成。42年国展に出品、43年国画会奨学賞、F夫人賞、同会会友、59年国画会会員。写実的描写。宝塚市で没、85歳。洋画家

武藤完一 (むとう・かんいち/1892～1982 年) ※

岐阜市生れ。1915年川端画学校洋画科で藤島武二に師事し、25年大分県師範学校図画教師。25年国画会に版画作品を発表、エッチングは31～32年頃から西田武雄と上山二郎の指導によって始めた。31年日本版画協会展入選、40年紀元 2600 年奉祝美術展入選。37年大分県美術協会創設に尽力、幹事。39年日本版画協会会員。40年日本エッチング作家協会創立、会員。50年大分市文化賞、53年大分合同新聞社文化賞、大分大学教授。1982年没、90歳。版画家、美教

武藤山治（むとう・さんじ/1867～1934年）

岐阜県生れ。明治・大正・昭和前期の経営者、労務管理思想家、言論人、衆議院議員（3期）。『博聞雑誌』を創刊した後、三井財閥に聘され、日本の紡績王。34年間「鐘紡」の経営に携わり、「経営家族主義」と「温情主義」を提唱・実践して日本的経営論を考案。水墨画や書道にも知悉。鎌倉で没、67歳。**水墨画、書**

武藤直（むとう・ただし？/1880～1944年）

熊本市生れ。15歳のころから近藤樵仙について絵を学んだ。1903年済々黌を卒業し上京、東京美術学校西洋画科に入学。卒業後は熊本に帰り、鹿本中学校の図画教師。26年同校を退職し、九州女学院の創立とともに同院につとめた。鹿本中学校時代の教え子に大森商二、大津逸次らがいる。1944年没、64歳。**洋画家、美教**

武藤辰平（むとう・たっぺい/1894～1965年）

佐賀市生れ。佐賀中学校で森三美に洋画の手ほどきを受けた。1913年佐賀美術協会設立参加。16年光風会展出品。1920年東京美術学校西洋画科卒。30～34年渡仏、サロン・ドートンヌ入選。渡欧作品展を佐賀市公会堂で開催した。1965年没、71歳。2009年「武藤辰平—フランスの風—」展（文化庁「地域文化芸術振興プラン推進事業」）佐賀県立美術館で開催。**洋画家**

武藤弘之（むとう・ひろゆき/1912～1977年）

埼玉県生れ。埼玉師範学校卒後、1931年岡田三郎助に師事、同8年白日会展入選。40年渡鮮し京城に在住、42年朝鮮総督府美術展で総督府買上げ、43年円光会会員。46年引揚げ後挿絵界で活躍。61年新構造社会員、70年三村賞、73年岡田賞、76年東京都知事賞。71年坂戸美術協会をおこし会長。埼玉県美術教育連盟副連盟長。入間地区美術教育研究会会長。1977年没、64歳。**洋画家、挿絵、美教**

武藤六郎（むとう・ろくろう/1907～1995年）

岐阜県生れ。1934年東京美術学校日本画科卒。31年日本版画協会展に入選。32年小野忠重らと「新版画集団」を結成。35年「武藤六郎小笠原風景版画展」を神田・東京堂画廊で開催。39年再興日本美術院展に日本画を出品。49年再興日本美術院展に再び出品。49年小野らの「造形版画展」に誘われ出品。52年に版画集『偶像』を刊行。61年日本板画院の会員。72年頃までに中部女子短期大学に勤務。91年に『武藤六郎 版画集』（私家版）を刊行した。岐阜市

で没、85歳。**版画家、日本画**

宗像逸郎（むなかた・いつろう/1902～1988年）

広島県生れ。林重義に師事、1932年独立展入選し、以後40年まで同展に出品。40年紀元2600年祝奉展に出品。43年新文展で特選。42年～国画会展に出品、43年国画奨学賞、F夫人賞、同年会友、59年会員。対象に即した忠実な写実的描写、古雅な趣のあるモチーフを好んで選び、静物画を多く描いた。兵庫県で没、85歳。**洋画家**

棟方志功（むなかた・しこう/1903～1975年）

青森市生れ。川上澄生の版画に感激。1924年上京。28年帝展に入選。30年文化学院で美術教師。32年日本版画協会会員。35年国画会会友。柳宗悦らを知る。38年新文展、版画ではじめて特選。42年日本板画院を結成、ヴェネツィア・ビエンナーレで版画部門大賞。55年サンパウロ・ビエンナーレで版画部門最高賞。56年ヴェネツィア・ビエンナーレで国際版画大賞。文化功労賞。70年文化勲章。東京で没、72歳。**版画家、洋画**

棟方寅雄（むなかた・とらお/1902～1992年）

青森県生れ。弘前中学校→東京聖学院神学校。大阪住友銀行、新聞記者などの職に就く。1921年劉生に師事。その後、東京聖学院神学校に学び、27年林重義、中川一政に師事。29年東京城西学園中学教諭。春陽、二科、日展、中央美術、国際美術の各展に入選。55年二科分裂にともない一陽会創立に参加、同会審査員。著書『劉生と私』青森県文化賞 青森県褒賞。1992年没、90歳。**洋画家、美術教育**

棟方末華（むなかた・まっか/1913～1995年）※

青森市生れ。1931年青森市夜間中学校卒、39～74年府中刑務所事務官。41年新文展初入選。国画会、白日会、日本版画協会展にも出品。52年日本板画院創立会員。65年日本浮世絵協会理事。74年日本板画院会長。府中市文化財専門委員。青森県より褒賞。86年東京都美術文化功労者。東京で没、82歳。**版画家**

村石米齋（むらいし・べいさい/1949年～）

福岡県生れ。福岡教育大学特設書道科卒。九州大学文学部美学美術史研究室の研究生を経て、県立高等学校で書道教諭。1993年パリと東京にて個展。94～08年大徳寺興臨院襖絵の制作。2001年 ロンドンで開催の JAPAN FESTA 2001 に出展。06年 NHK ハイビジョン特集「天才画家の肖像「雪舟 画聖

と呼ばれた男』』に出演、「秋冬山水図(冬景図)」の実物大模写を行った。08年 NHK 教育テレビジョン『新日曜美術館 王羲之「蘭亭序」なぜ書の最高峰といわれるのか』に出演、同書の臨書を行った。**水墨画家、書道家**

村井辰夫 (むらい・たつお/1904～1998 年)

富山県生れ。1928年東京美校彫刻科卒。高村光雲、関野聖雲に師事。31年帝展入選。33年 創立会員8名で「九元社」を結成。46年富山県美術展創設に参画し、富山県美術展審査員。北陸美術会創設に参加、北陸美術展審査員。55年日本山林美術協会会員。51年「創型会」を創立同人。1998年没、93歳。**彫刻家、版画**

村井正誠 (むらい・まさなり/1905～1999 年)

大垣市生れ。1928年文化学院大学美術科卒。28～32年渡仏。37年自由美術家協会創立。38年文化学院の講師。50年モダンアート協会を創立。54年武蔵野美術大学教授。62年日本美術展で最優秀賞。73年東京国際版画ビエンナーレで文部大臣賞。73年神奈川県立美術館で個展。東京で没、93歳。(出典わ眼)**洋画家、美教、版画**

村岡応東 (むらおか・おうとう/1873～1946 年)

松本楓湖の門人。1873 年、東京に生まれる。桜塘と号し、後に応東と号す。緑巽舎、自適とも号す。山水画及び花鳥画を得意としており、異画会や鳥合会で活躍した。鳥合会には1903年 11 月の第 6 回から参加している。**日本画家**

村岡三郎 (むらおか・さぶろう/1928～2013 年)

大阪生れ。大阪市立美術研究所に学ぶ。1955年朝日秀作美術展出品。65年現代日本彫刻展で K 氏賞。81年滋賀大教授、京都精華大教授。1990年ベネチア・ビエンナーレに出品。99年毎日芸術賞。鉄や鉛などを持ちいた金属彫刻などにとりくんだ。2013年没、85歳。作品に「1954 年 7 月」「アイアンブック」、シリーズ「熔断」など。**彫刻家**

村岡平蔵 (むらおか・へいぞう/1912～1995 年)

佐賀県生れ。1937年東京美術学校油画科卒。中村研一に師事。36、37年文展に入選、47年日展で特選。48年光風会会員、49年光風特賞。72年日展で内閣総理大臣賞、日展参与。明るい裸婦像を描いた。東京で没、83歳。**洋画家**

村尾 栄 (むらお・さかえ/1909～1945 年) ※

岡山市生れ。1927年吉備商業学校を卒業後、上京して牧野虎雄に師事。37年多摩帝国美術学校卒。旺玄社会員となり活躍。43年応召され外地に赴く。1945年に戦地で没、37歳。**洋画家**

村上華岳 (むらかみ・かがく/1888～1939 年)

大阪生れ。京都絵専卒。文展に入選、1916年特選、文展の理想主義に対する不満から、18年土田麦僊・小野竹喬・榊原紫峰らと国画創作協会を結成。のち健康を害し、芦屋・神戸に居を移して、画壇から離れた作画生活を送り、仏教や六甲の山を題材に宗教的・瞑想的な雰囲気を含めた精神性の高い絵画世界を形象した。1939年没、51歳。**日本画家、版画**

村上貞雄 (むらかみ・さだお/1901?～没年不詳)

1901年生まれか。1930年京都市立絵画専門学校選科卒、研究科に進む。石崎光瑤に学び、28年中央美術展、帝展に入選。34年の大礼記念京都美術館美術展に日本画を出品。版画は、32年関西創作版画展に木版画、33年京都創作版画会展に木版画を出品。**版画家、日本画**

村上三郎 (むらかみ・さぶろう/1925～1996年)

神戸市生れ。1943年関西学院大学入学、51年大学院修了。在学中に伊藤継郎に師事。49～54年新制作派展に出品、52年頃、新制作派協会内の先鋭分子とともに「0(ゼロ)会」を結成。また、52～94年芦屋市展に出品した。53年白髪一雄と二人展。55年具体美術協会会員、72年まで同会展に出品。ハトロン紙の壁を破るパフォーマンス。90年神戸松蔭女子短期大学教授。西宮市で没、70歳。**洋画家、造形作家、美教、具体、パフォーマンス**

村上 隆 (むらかみ・たかし/1962年～)

東京都生れ。1986年東京芸術大学美術学部日本画科専攻卒。93年同大学大学院美術研究科博士後期課程修了。94年ロックフェラー財団の奨学金NY留学。2000年以降「スーパーフラット」東京、ロス、NY、パリの美術館開催。アーティスト集団カイカイキキ代表。アートイベントGEISAI主宰。**洋画家、立体**

村上貞助 (むらかみ・ていすけ/1780～1846 年)

岡山県生れ。村上島之允の養子。島之允没後の文化7年から文政4年にかけて蝦夷地に在勤。幕府の同心の身分で、間宮林蔵とは同い年。掛け軸「蝦夷弾琴図」「アイヌ狩猟の図」。1846年没、66歳。**江戸時代の絵師**

村上鉄太郎（むらかみ・てつたろう/1899～1973年）※

東京生れ。太平洋美術学校に学ぶ、中沢弘光に師事し、白日会展に出品、1929年白日会展で白日賞、32年会員、64年中沢賞、のち委員。日展に出品し、51、52、53、55、57年入選、67年日展委嘱。日本水彩画会会員。1973年没、73歳。洋画家、水彩画

村上友晴（むらかみ・ともはる/1938年～）

福島県生れ。1961年東京藝術大学日本画科卒、専攻科に入学、中退。64年グッゲンハイム国際賞展に招待出品。油彩、木炭、アクリルなどを時間をかけて塗り重ねる独自の手法で絵画の制作。64年「グッゲンハイム国際賞展」グッゲンハイム美術館(NY)、81年「村上友晴・庄司達」ロサンゼルス現代美術研究所、81年「第16回サンパウロ・ビエンナーレ」、91年「韻律:コンテクストにおけるアイコンと抽象」The New Museum of Contemporary Art(NY)、95、96年「現代美術への視点 絵画、唯一なるもの」東京国立近代美術館・京都国立近代美術館、2004年「モノクローム絵画の魅力 桑山忠明・村上友晴を中心に」千葉市美術館、2010年「静けさのなかから:桑山忠明/村上友晴」名古屋市美術館グループ展参加。洋画家

村上肥出夫（むらかみ・ひでお/1933～2018年）

岐阜県生れ。独学。1961年彫刻家本郷新に見出され、兜屋画廊を紹介される。63年渡仏、64年渡米、72年渡仏。71年川端康成から個展の評論を得る。79年岐阜県下呂温泉近くに転居。2004、14年大川美術館、梅野記念絵画館で個展。2018年没、84歳。(出典 わ眼)洋画家

村上炳人（むらかみ・へいじん/1916～1997年）

富山県生れ。富山県立工芸学校卒。上京し、平櫛田中に師事。1937年再興日本美術院展入選。52年法隆寺金堂再建修理工事に参加。石井鶴三らとともに雲斗雲肘木の復元作業を行う。59年二紀会に参加する。61年大阪・四天王寺金堂御本尊 救世観音菩薩を制作する。64年大阪・四天王寺に八角大燈籠を制作。84年二紀展で文部大臣賞受賞。93年京都府文化賞功労賞。1997年没、81歳。彫刻家

村上 豊（むらかみ・ゆたか/1936年～）

静岡県生れ。静岡県立三島南高等学校卒。デザイン会社、三島市役所職員を経て、1960年司馬遼太郎の週刊サンケイの連載小説「風の武士」で挿絵デビュー。多くの小説家の週刊誌・新聞の連載の挿絵や、絵本の原画・書籍の装幀を多く手掛ける。62年

「小説現代」の創刊号から表紙の挿絵を担当。82年「かつぱどつくり」他で小学館絵画賞、84年絵本にっぽん賞、98年菊池寛賞、2007年 赤い鳥さし絵賞。

挿絵画家、装填

村上善男（むらかみ・よしお/1933～2006年）

盛岡市生れ。1954年岩手大学学芸学部卒。54年岩手県花巻市立湯本中学校教諭。岡本太郎に師事。1953年二科展入選、55年二科展出品作「ヴァグース Q」が岡本太郎の目にとり、二科九室に展示。60年シェル美術賞展佳作。82年弘前大学教育学部教授。詩人としての執筆活動。著書に『松本竣介とその友人たち』（新潮社、1987年）、『萬鉄五郎を辿って』（創風社、1997年）、『東北という劇空間』（創風社、2004年）。盛岡市で没、73歳。美教、洋画家、詩人、著作

村木 明（むらき・あきら/1929～2017年）※

岐阜県生れ。旧制名古屋外国語専門学校フランス語科、早稲田大学政経学部経済学科、中央大学文学部フランス文学科卒。紀伊国屋書店洋書部勤務のほかを経て、日本美術評論家連盟会員および国際美術評論家連盟会員。現在、美術評論のほか、各種美術展覧会の企画・監修(監修ならびに編集図録100冊)などに携わる(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)。2017年没、88歳。美術評論家

村木与四郎（むらき・よしろう/1924～2009年）

東京生れ。1944年千葉大学工学部建築科卒。東宝撮影所の美術助手として入社、主に松山崇の助手として参加。51年村木忍(旧姓は長岡)と結婚、54年美術監督。55～93年黒澤明監督作品(「デルス・ウザーラ」を除く)には欠かせない人物となる。第9代日本映画・テレビ美術監督協会理事長。99年勲四等旭日小綬章。東京で没、85歳。映画テレビ美術監督

村越 伸（むらこし・のぶる/1922～2005年）※

横浜市生れ。父は商船の機関長。横浜の本町尋常高小卒業後、母の知己を頼り14歳で古物商の芝・本山幽篁堂に丁稚奉公に入り、主人の本山豊実のもと古美術の基礎を身につける。また本山の知人だった吉田幸三郎の知遇を得、その義弟である速水御舟や、村上華岳、横山大観らの作品に惹かれ、日本画を中心とした新画商の道を志す。1948年に銀座で画商として再出発。51年旧友の山本孝、志水楠男とともに東京画廊を拠点として営業、サム・フランシス、フンデルト・ワッサー等、現代美術をも扱う。56年銀座8丁目の

並木通りに村越画廊を開設。59 年横山操、加山又造、石本正の三作家による日本画のグループ展轟会(後に平山郁夫が参加)をスタートさせ、74年まで16回開催し、美術界に新風を吹き込んだ。71 年日本画商相互会の会長(82年再選)、83年東京美術商協同組合理事長に就任。78年には評論家吉村貞司の提案により、多摩美術大学で横山操、加山又造の教えを受けた小泉智英、中野嘉之、松下宣廉、米谷清和によるグループ野火を発足させ、88年まで毎年開催した。90年藍綬褒章を受章。92年パリのギメ美術館に対する尽力を評価され、フランス政府からシュバリエ勲章を授与される。95年勲四等瑞宝章受章。著書に自叙伝『眼・一筋』(実業之日本社、1986 年)がある。東京で没、83歳。元村越画廊社長

村瀬雅夫 (むらせ・まさお/1939～2013 年)

東京生れ。千葉県立第一高等学校卒。横山操、石崎昭三に師事して日本画を学ぶ63年東京大学文学部東洋史学科卒。読売新聞社に入社。本社文化部で美術担当記者。85年から読売新聞夕刊に連載「美の工房」(全 50 回)を担当。在職中から無所属の日本画家として、銀座・飯田画廊、ニューヨーク・日本クラブギャラリー、東京セントラル画廊などで生涯18回の個展開催。明治大学講師、福井県立美術館館長、渋谷区立松濤美術館館長を歴任。著書に『野のアトリエ』(桃源家、1989 年)、『美の工房—絵画制作現場からの報告』(日貿出版社、1988 年)、『横山操』(芸術新聞社、1992 年)、『「芭蕉翁月一夜十五句」のミステリー 『おくのほそ道』最終路の謎』(日貿出版社、2011 年)、『庶民の画家南風』(南風記念館、1977 年)、編著書に『川端龍子 現代日本の美術 13』(集英社、1976 年)、『川端龍子 現代日本の美術 4』解説(集英社、1977 年)、『現代日本画全集 第14 巻 奥田元宋』(集英社、1983 年)、『20 世紀日本の美術 アート・ギャラリー・ジャパン 5 平山郁夫/前田青邨』(龍梯三と責任編集、集英社、1986 年)がある。2013年没、74歳。美術評論家、日本画家、美術館長

村田勝四郎 (むらた・かつしろう/1901～1989 年) ※

大阪生れ。1925年東京美術学校彫刻科塑像部卒。北村西望教室に学んだ。同科研究科に入り朝倉文夫の指導を受ける。25年帝展入選。26年帝展特選、27年帝展特選。27年朝倉彫塑塾に参加し、出品。28年同塾の帝展不出品に連座。29年安藤照らと朝倉塾を退会し塊人社を結成。帝展に復帰。336年塊人社が主線協会と合同して主線美術協会となるに際し同展に出品。39年同会が解散、彫刻部のみで塊人社を興す。49年新制作派協会に会員、同展に出品を続

けた。58年福岡・RKB毎日放送内に「牧神の午后」を制作して以降モニュメントやレリーフも手がけ、70年東京霞が関ビル前庭にモニュメント「よろこび」を制作。73年日本橋三越で初の個展「村田勝四郎彫刻展—野鳥と少年—」を開催。85年渋谷区立松濤美術館で個展。東京で没、87歳。彫刻家

村田實史雄 (むらた・きしお/1910～1992 年)

名古屋生れ。1925年太平洋画会研究所に通う。38年二科展で九室会会員、40年二科展で特待。46年行動美術協会結成に参加、会員。64年メキシコにアトリエ、シケイロスと親交、65年メキシコ大学客員教授、72、88年メキシコ国立近代美術館で個展。91年岐阜県美術館、名古屋市美術館で個展。92年没、82歳。洋画家、美教

村田慶之輔 (むらた・けいのすけ/1930～2015 年)

1930年生れ。56年早稲田大学第一文化学部卒。59年神奈川県教育委員会職員。64年神奈川県立博物館準備室学芸員。69年文化庁文化部芸術課専門職員。74年文化庁文化部文化普及課国立国際美術館設立準備室主幹。77年国立国際美術館開館学芸課長。91年定年退官。同美術館在職中、福井県立美術館運営委員会、西宮市大谷記念美術館運営委員会、愛知県美術館協議会、和歌山県立近代美術館協議会の委員。また高知国際版画トリエンナーレ、安井賞、現代日本美術展、吉原治良賞の審査員。教育面では、愛知県立芸術大学、静岡大学等で非常勤講師。92年高岡市美術館準備室長。99年川崎市岡本太郎美術館館長。2012年軽井沢ニューアートミュージアムの名誉館長。美術を語り、批評しつづけた美術館人であった。2015年没、84歳。(引用 東文研)美術評論家、美術館長

村田香谷 (むらた・こうこく/1831～1912 年)

福岡県生れ。文人画家村田東圃の子。貫名海屋(ぬきな・かいおく)に師事。長崎で鉄翁祖門(てつとう・そもん)にまなび、清国(中国)にも3度わたった。晩年は大阪にすむ。高橋草坪(そうへい)の「集古名公画式」を補訂・刊行。1912年没、82歳。幕末～明治時代の画家、日本画家

村田宏治 (むらた・こうじ/1905～1976 年)

茨城県生れ。茨城師範学校卒。熊岡絵画道場に洋画を学ぶ。1938年新文展で入選。東光会展に出品を続ける、63年東光会会員、75年東光会委員。69年渡欧。帰国後銀座、銀彩堂画廊で個展。76年没、70歳。洋画家

村田省蔵（むらた・しょうぞう/1929～2018 年）※

金沢市生れ。1951年金沢美術工芸専門学校洋画科卒。上京、小糸源太郎に師事。59年光風会展で会友賞。68年日展で菊華賞。98年改組日展で内閣総理大臣賞。2006年日展で恩賜賞、日本藝術院賞、理事、日本藝術院会員。2000年金沢学院大学美術文化学部教授。2018年没、89歳。洋画家、美教

村田丹下（むらた・たんげ/1896～1982 年）

岩手県生れ。1914年黒田清輝、和田英作、満谷国四郎に師事。24年朝鮮取材旅行。28年北斗会に出品。30年台湾で個展。36年日伯関係に尽くしブラジル政府より勲章。38年リオデジャネイロ風景画展を白木屋で開催。46年日本美術界中央委員会兼一関支部長。岩手県で没、85歳。洋画家

邨田丹陵（むらた・たんりょう/1872～1940 年）

東京生れ。吉沢素山、川辺御楯に師事。丹陵の弟子には、アメリカで有名になった画家小圃千浦（カリフォルニア大学バークレー校名誉教授・瑞宝章者）がいる。小圃千浦の書に師（丹陵）の教えが記述されている一冊の本があり、丹陵の驚くべき描写力を示す土佐派の心と筆の真髓が書きとめられている。歴史画家として有名である。日本美術院・特別賛助員。作品に「大政奉還の図」（所蔵：聖徳記念絵画館）、「富士巻狩図（ふじのまきかりず）」（所蔵：金刀比羅宮書院）がある。1940年没、68歳。絵師、日本画家、版画

村田徳次郎（むらた・とくじろう/1899～1973 年）

大阪生れ。京都市立美術工芸学校卒。日本美術院で塑造をまなび、1932年「K 氏像」などで日本美術院賞。38年院同人。石井鶴三に私淑した。52年より東京芸大講師。1973年没、74歳。彫刻家

村田良策（むらた・りょうさく/1895～1970 年）

栃木県生れ。1919年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。35年迄、法政大学、東洋大学の教授をつとめた。33～40年文部省社会教育局嘱託講師。43年東京美術大学教授、49年東京美術学校校長兼新制東京芸術大学美術学部長。52年神奈川県立鎌倉近代美術館初代館長。62年東京芸術大学名誉教授となり定年退官。66～69年神奈川県立博物館初代館長。67年文化勲章選考委員。68年美学美術教育に尽くし、美術館の運営指導、美術界の発展に寄与した功績で勲三等旭日中授章。鎌倉市で没、74歳。美術史家、美術館長

村田林蔵（むらた・りんぞう/1954 年～ ）

岩手県生れ。1978年東京藝術大学美術学部日本画科卒。93年再興院展、日本美術院院友。97年奈良県明日香村橘寺に天井画奉献。99年芝・増上寺に天井画奉献。「増上寺天井絵展」出品。2009年「村田林蔵日本画展」（日本橋・高島屋）開催。11年平泉世界遺産登録記念「村田林蔵日本画展」（盛岡・川徳）。12年平泉・中尊寺に日本画「金色堂散華心象図」50号を奉納。15年再興院展に「ひととき」入選、日本美術院特待。日本画家

村松乙彦（むらまつ・おとひこ/1912～1983 年）

愛知県生れ。昭和時代の日本画家。日本美術学校卒。児玉希望に師事。1941年新文展入選。戦後は日展に出品、24、26 年特選。1983年没、71歳、卒。日本画家

村山槐多（むらやま・かいた/1896～1919 年）

岡崎市生れ。1914年京都府立第一中学校卒。上京、14年日本美術院の研究生。14年二科展入選。15、17年日本美術院展で院賞。18年日本美術院試作展で奨励賞。19年日本美術院試作展で美術院賞乙賞。スペイン風邪で没、22歳。洋画家、版画

村山 徑（むらやま・けい/1917～1987 年）

新潟県生れ。尾竹国観に師事し、川端学校卒業。戦後は児玉希望に師事。新文展に入選、1950年日月社の結成会員（伊東深水、児玉希望など）。日展に一貫して出品。新日展では特選・白寿賞を2回、菊花賞を受賞、改組日展では内閣総理大臣賞、日本芸術院賞、恩賜賞受賞。日展理事。風景画、山岳を主題にした作品が多い。神奈川県で没、70歳。日本画家

村山 密（むらやま・しずか/1918～2013 年）

潮来市生れ。1933年川端画学校夜間部に学ぶ。36年春陽会研究所に学ぶ。40年岡鹿之助に出会い、師事。52年春陽会会員。54～55渡仏、岡鹿之助、藤田嗣治と親交、一時帰国。57年日本橋三越において個展。59年仏定住、81年仏国籍、62年ド・ゴール大統領賞、70年サロン・ドートンヌ会員、後同審査員。91年にはヴェルメイユ勲章（パリ名誉市民賞）、95年フランス芸術院よりグラン・ド・メダイユ・ドール（栄誉大賞）、97年にはレジオン・ド・ヌール勲章（シュヴァリエ）。パリで没、94歳。洋画家

村山知義（むらやま・ともよし/1901～1977 年）

東京生れ。1921年東京帝国大学哲学科入学。21年ベルリンに留学。同地で前衛芸術に触れ、独学で画家に転向。カンデンスキー、シャガールなどに傾倒。ロシア構成主義に影響を受ける。23年帰国後「意

識的構成主義」を主張し、柳瀬正夢らとダダイズム的集団「MAVO」を結成。24年雑誌「MAVO」を創刊。大正の前衛美術を牽引。24年築地小劇場の舞台装置を担当。演劇の道に進む。24年三科造型美術協会に参加。戦後は東京芸術座を設立。劇団演出家となる。東京で没、76歳。洋画家、版画

村山陽一（むらやま・よういち/1926～1961年）

函館市生れ。旭川中学を卒業後、20歳くらいの時に北海道アンデパンダン展に参加。1952年絵画グループ「土芽会」を主宰。昭和28年鍵谷幸信、小林日出男らと詩論や芸術論を語り合う「タビラコ会」を結成。54年造型集団展を開催。個展、読売アンデパンダン展、現展に出品。1961年没、34歳。洋画家

室井東志生（むろい・としお/1935～2012年）

福島県生れ。1958年橋本明治に師事する。60年新日展入選し、以後毎年入選。57年法隆寺金堂壁画再現模写で橋本明治班に加わり11号壁の普賢菩薩像模写に従事。69年日展で特選・白寿賞、78年特選。83年日展会員。85年には院展の高橋常雄、大矢紀、日展の中路融人とともに異歩騎会を結成。95年日展会員賞。99年日展評議員。2004年改組日展で内閣総理大臣賞を受賞。12年日展理事。2012年没、77歳。日本画家

室越健美（むろこし・たけみ/1947年～）

群馬県生れ。1979年東京藝術大学油画科大学院修了。88年個展（ニューヨーク、ハンプリーギャラリー）。93年タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞。2006年個展（日本橋三越）14年INNOCENT～抽象の彼方～（日本橋・大阪高島屋）。無所属、多摩美術大学教授。洋画家

め

米良道博（めら・どうはく/1903～1983年）

和歌山県生れ。1923年和歌山師範学校卒。27年信濃橋洋画研究所で小出檜重や鍋井克之に師事。29年二科展入選、39年二科展で特待、41年二科会会友48年二科会会員。55年同志と一陽会を結成、会員。60年全関西美術展の審査員。大阪で没、79歳。洋画家

面屋庄三（めんや・しょうぞう/1910～1994年）※

京都生れ。1929年京都市立美術工芸学校彫刻科卒。人形を先代の12世面屋庄次郎に、彫刻を藤川勇造に学ぶ。伝統的京人形を制作し、53年に三ツ折人形で国の無形文化財保持者。58年よりあまがっ会人形展を毎年開催。63年からは荘人会人形展も開催し、京人形の普及に努めた。70年に13世面屋を襲名。また、彫刻家として新制作協会展に出品し、51年新作家賞、52年同賞を受賞、53年同会会員。彫刻は婦人像を中心に人体を主要なモチーフとし、表面のマ

ティエール等に人形との共通点が見いだせる。京都市文化功労者、国際芸術文化賞。『京人形あれこれ』などの著書もある。三ツ折人形のほか、御所雛、相込人形等も得意とした。京都五條大橋西詰の「牛若弁慶像」を制作したことで知られる。京都で没、83歳。京人形師、彫刻家

も

毛利武彦（もうり・たけひこ/1920～2010年）

東京生れ。1935年川崎小虎に師事。42年東京美術学校日本画科卒。森村宜永に大和絵を学ぶ。49年山本丘人に師事。55年新制作協会日本画部新作家賞。61年新制作協会日本画部新作家賞。62年新制作協会日本画部新作家賞。64年新制作協会日本画部（現創画会）会員。武蔵野美術大学名誉教授。2010年没、89歳。日本画家、美教

毛利教武（もうり・のりたけ/1884～1963年）

東京生れ。松本正春に彫刻の初歩を学び、1899年高村光雲に師事、1903年東京美術学校彫刻科卒。03、04年東京彫刻工会に出品、銀賞牌。07年東京勸業博覧会で2等賞及び協賛賞。07年文展で3等賞、米原雲海の「神来」と共に、僅か2名の受賞者の1人。12年フューザン会展にただ一人の彫刻家として参加出品。31年帝展無鑑査、41年文展審査員。戦後は出品依頼者として日展に発表した。長男に武彦（新制作・日本画）、次男に武士郎（無所属・彫刻）、三男に建築デザイナー。東京で没、77歳。彫刻家

毛利武士郎（もうり・ぶしろう/1923～2004年）

東京生れ。毛利教武の次男。1943年東京美術学校彫刻科塑像部卒。43年応召、中国、沖縄に配属。46年復員。54年《シーラカンズ》で注目される。60年にはカーネギー・インターナショナルに出品するが、しだいに美術界から遠ざかる。83年大作《哭 Mr.阿の誕生》は、20年ぶりの発表と話題になった。2004年没、81歳。彫刻家

茂木 幹（もぎ・かん/1904～1996年）

前橋市生れ。1929年根室に赴き、歯科医院を開業。本業の傍ら絵を描き続けた。1931年画会「麗土社」を結成、（根室）グループ展を開催。39年文展に入選。40年国画会展覧会入選、以後連続入選。70年インド・ネパール取材旅行。78年「どろの木を育む人」を結成（中沢茂・中田義法・茂木幹）。94年詩画集・袖珍本「群馬の繭」を発刊。根室市で没、92歳。2002年根室市総合文化会館多目的ホールで茂木幹作品展。茂木幹記念「慟哭の森美術館」（チヌカルコロ・ミウジウム）が根室市に開館。洋画家

太田たけを (もくた・たけを/1910～1987 年)

兵庫県生れ。小泉勝爾に日本画を学ぶ。1927年日本美術院に通う。30年洋画に転向、のちに須田国太郎に師事する。35年独立展に入選、47年独立賞、49年独立美術協会会員。63年上京。日本国際美術展、現代日本美術展に出品。東京で没、77歳。88年練馬区立美術館で遺作特別陳列。洋画家、立体

茂田井武 (もたい・たけし/1908～1956 年)

東京生れ。1926年旧制赤坂中学校卒。太平洋画会研究所、川端画学校、本郷絵画研究所に学ぶ。30～33年パリに渡り、独学で絵を描く。35年博文館の雑誌『新青年』挿絵。37年「新挿絵」の会に参加。41年絵本『ナニナニ繪本』を出す。日本童画会作品展にも47～51年出品。50～55年明治製菓宣伝部の嘱託となり広告画。54年保育雑誌『キンダーブック』で小学館児童文化賞。56年『セロ弾きのゴーシュ』絵本化のための挿絵を描く。1956年没、48歳。絵本、童画

望月菊磨 (もちづき・きくま/1945年～)

福岡県生れ。1971年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、72年同校研究生修了。75年ジャパン・アート・フェスティバル(東京・メルボルン・ウェリントン・ブリスベン)、現代日本美術展で佳作賞(東京都美術館・京都市美術館)。82年日本国際美術展で佳作賞(東京都美術館・京都市美術館)。2002年東日本彫刻39の造形美で優秀賞(東京ステーションギャラリー)。07年 現代日本彫刻展山口県立美術館賞(山口県宇部市)。造形作家、エア・アート。彫刻家、造形

望月玉溪 (もちづき・ぎよくけい/1874～1938年)

京都生。父は日本画家望月玉泉。名は重信・重蔵、別号に玉禪。父玉泉に絵を学ぶ。絵画共進会二等褒状受賞。日本美術協会会員・日本画会会員・京都美術協会終身会員。1938年没、64歳。日本画家

望月定夫 (もちづき・さだお/1913～1994年)

甲府市生れ。兄に日本画家望月春江。東京美術学校日本画科卒、中村岳陵に師事。1942年新文展入選、53年日展特選、白寿賞、朝倉賞。62年特選。日展、日本画院展、日本美術家協会展を中心に活動し、橙色と黒など色彩の強い対比や、花が群生する画面構成を用いた花鳥画を制作した。日本画家

望月省三 (もちづき・しょうぞう/1891～1954年)

栃木県生れ。1907年日本水彩画会研究所に学ぶ。

13年日本水彩画会の創立発起人。14年文展に入選。18年光風会展で今村奨励賞。双台社会員。32年日本水彩画会常務。36年改組帝展に招待出品。37年新文展無鑑査出品。54年東京で没、63歳。水彩画家

望月省三 II (もちづき・しょうぞう/1891～1954年)

栃木県生れ。1907年日本水彩画会研究所に学ぶ11年第9回太平洋画会展に出品。8回展にも出品。13年日本水彩画会創立に参加。14年第8回文展に初入選。以後、9、12回展に出品。18年第6回光風会展で今村奨励賞。19年第1回帝展に出品、以後、5、8、10 回展に出品。54年5月27日没、享年63歳。(佐)水彩画家

望月 桂 (もちづき・かつら/1887～1975 年)

長野県生れ。1910年東京美術学校西洋画科選科修了。旧制野沢中学で美術教師。東京で印刷所を経営。17年平民美術協会を設立。平民美術宣言、民衆美術運動を展開。19～21年大杉栄と共に美術団体・黒耀会を主宰。28年読売新聞社に入社。犀川凡太郎の筆名で漫画を描く。33年に同社を離れてフリーに。新愛知等四社連盟で議会漫画を描いたほか、平凡社でも百科辞典の挿絵などを執筆。38～39年小野佐世男らと爆笑社で漫画雑誌『バクショー』を主宰。45年故郷の信州で農民運動、社会漫画などを描いた。46年東筑摩農民組合連合会で組合長。55年松本松南高等学校の美術講師。1975年没、83歳。洋画家、アナキストの画家、デザイナー、漫画家、美術

望月春江 (もちづき・しゅんこう/1893～1979 年)

山梨県生れ。東京美術学校卒。結城素明に学ぶ。1928、29年帝展特選。38年川崎小虎、穴山勝堂らと日本画院を結成。花鳥画を得意とし、58年日展で芸術院賞。東京女高師教授、日展評議員。1979年没、85歳。日本画家、美術

牧 谿 (もつげい/生没年不詳)

蜀(四川省)の人。元時代初頭の至元年間(1264-94)年に没した。南宋時代の高僧である無準師範の法系で、南宋の首都である臨安(浙江省杭州市)西湖湖畔の寺院に住した。浙江地方に生涯の大半を過ごしたが、賈似道(1213-75)を批判して一時追われた。画は殷濟川なる人物に学んだようである。室町幕府の名品目録ともいえる『御物御画目録』に全体の約 4 割を占める 100 幅以上の牧谿作品が記載。その追隨者は多く、日本の水墨画に多大な影響を与えた人物と

いえる。遺品や伝称作品の殆どは日本に伝わる。**中国・南宋時代の画僧**

基俊太郎 (もとい・しゅんたろう/1924～2005 年)

鹿児島県生れ。1950年東京美術学校彫刻科卒。教授の石井鶴三、助教授の笹村草家人の感化を受ける。49年院展入選。50年石井鶴三教室にイサム・ノグチを迎えた折、基の「杉山殿勇像」を見て「私もこういうのが作りたいけれど私には出来ません。これはジャコメッティですね」と推奨。50年院展入選し、日本美術院院友。57年石井鶴三を中心とする法隆寺金堂雲斗雲肘木の復元事業に携わる。53年東京芸術大学彫刻科石井教室の助手となる。55年院展で日本美術院同人。58年礫山美術館開館のために笹村草家人とともに助力。桂離宮の庭園を精緻に調べ、独自の住空間理論を得た基は60年芸大講師を辞し渡米、61年ハーバード大学大学院造園科で特別講義「空間の概念と形式について」を行う。渡米中に日本美術院彫塑部の解散を知る。帰国後、造形の本質を見つめ、美術運動や団体に拘ることなく独自の空間論からなる彫刻、建築、テラコッタ、鉄による造形等、幅広い制作活動を展開していく。また造形論や故郷奄美大島の環境と自然について明晰な評論を残した。84年には礫山美術館の顧問となり、晩年には同館の収蔵庫や絵画展示棟等の建設に尽力した。2005年没、81歳。**彫刻家、礫山美術館顧問**

本江邦夫 (もとえ・くにお/1948～2019 年)

愛媛県生れ。1976年東京大学大学院修了。東京国立近代美術館勤務。98年多摩美術大学教授。2004年芸術選奨新人賞。多摩美術大学美術館館長、美術愛住館館長。元府中市美術館館長。2019年没、70歳。**美術史家**

泉二勝磨 (もとじ・かつま/1905～1944 年)

東京生れ。文展無鑑査、二科会々員。1929年東京美術学校卒、31～39年フランスに留学。その間フランス汽船「ノルマンディー」の装飾に師デュナン氏と共に従事し、ギリシャ、エトリュスク、仏中世の絵画彫刻を主に研究。39年二科展に「花売娘」等出品、40年二科展に「朔雲童児」出品、16年二科に「東郷大将バルチック艦隊を睨む」を出品して注目され、同年二科会員。文展無鑑査。多摩帝国美術学校に彫刻図案を講じた。1944年没、40歳。**彫刻家、美術**

元永定正 (もとなが・さだまさ/1922～2011 年)

三重県生れ。1950年頃西宮美術協会主催の芦屋市展に出品。53、67年同展でホルベイン賞。53～7

1年具体美術協会に入会。57年大阪阪急百貨店で個展。60年NYのマーサ・ジャクソン画廊と一年契約。61年トリノの国際美学研究センターと10年契約。61年東京画廊で個展。64、66年現代日本美術展で優秀賞。66～67年渡米。70年から絵本の制作。91、2009年三重県立美術館で個展。11年没、89歳。**洋画家、具体、版画、絵本**

元村 平 (もとむら・たいら/1937 年～)

熊本県生れ。武蔵野美術大学を卒業後、1973年パリに移住。渡仏して30年、平和な風景が広がる郊外に求める。『古い村の家並み』『教会』『城』『運河』など、昔からある美しいフランスの佇まいを、ナイーブな感性で受け止めて描くことにより、優しさと静けさに包まれた郷愁を呼び起こす独特の世界が生まれている。**洋画家**

本山白雲 (もとやま・はくうん/1871～1952 年)

高知県生れ。高村光雲に師事。1894年東京美術学校第1期生として彫刻科卒。光雲の助手として、上野の「西郷隆盛像」、皇居前広場の「楠正成像」等を作り、又国会議事堂の傍に建立の「伊藤博文像」、高知城内の「山内一豊像」をはじめ名士の銅像を数多く制作。晩年は余り大作を手がけず、戦時中スクラップされたものも多いが故郷土佐には「坂本龍馬像」等多く残っている。東京で没、80歳。**彫刻家**

百瀬 渥 (ももせ・あつし/1901～1965年)

長野県生れ。1924年東京美術学校図画師範科卒。大分県立三重高等女学校に図画教師。長野県木曾中学校と木曾高等女学校を兼任、36～41年伊那中学校、41年松本女子師範学校、42年松本第二高等女学校の図画教師を勤め、43年長野師範学校女子部の教授。50年信州大学教育学部(松本分校)の教授。**美術教育、版画**

百瀬智宏 (ももせ・ともひろ/1957 年～)

愛知県生れ。1984年多摩美術大学大学院修了。97年昭和会展昭和会賞。98年前田寛治大賞展市民賞。全国百貨店等にて個展多数開催。清涼感溢れる写実の旗手として人気。**洋画家**

百瀬 寿 (ももせ・ひさし/1944 年～)

札幌市生れ。北海道教育大学旭川分校卒、1968年岩手大学教育学部専攻科修了。77年世界版画展・エディション買上賞(サンフランシスコ近代美術館)。87年ハラ・アニュアル(原美術館)。92年横浜美術館グランドギャラリーに15点依頼制作。94～97年椿会

展(資生堂ギャラリー)。96年高知国際版画トリエンナーレ・大賞。2007年東京ミッドタウンでパブリックアートワークが話題。版画家

百瀬 浩 (ももせ・ひろし/1923～1988年)

長野県生れ。1955年武蔵野美術学校本科西洋画科卒。山口薫に師事。蒼騎会委員。1988年没、65歳。洋画家

森内敬子 (もりうち・けいこ/1943年～)

大阪生れ。1962年吉原治良に師事。64年大阪樟蔭女子大学中退、渡米、NYを拠点に活動。アド・ラインハート、イサム・ノグチ、マン・レイと交流。ハプニング、ネオ・ダダ、アンフォルメル、キッシュなど様々なイズムを同時代的に体感した作品を制作。斉藤義重、金光松美と交流。68年具体美術協会に参加、グタイピナコテカにて床いっばいに縫いぐるみ作品を並べた。83年西独にてパーソナルコンピューター登場後の人間の意識エネルギーについて学ぶ。90年代はクロスとスパイラルの記号を画面にペインティング、時代の変遷とシンクロし、インスタレーション、彫刻、版画、陶芸、壁画、環境空間デザイン、舞踏とのコラボレーションなど横断的に活動。現代美術作家、インスタ、彫刻、版画、陶芸、壁画

森 英 (もり・えい/1907～1976年)

香川県生れ。1932年東京美術学校西洋画科卒。32年二科展に出品。正宗得三郎に師事。46年二紀会創立に参加、47年二紀展に招待出品、同人、48年二紀会委員、のち理事。56年渡欧。61～63年壁画研究の為渡欧。アメリカ、メキシコに滞在帰国後66年にかけて世界最大の壁画画作。東京で没。68歳。洋画家、壁画

森岡柳蔵 (もりおか・りゅうざう/1878～1961年)

鳥取県生れ。20歳の頃に上京、黒田清輝の主宰する天真道場(のちに白馬会研究所と改称)に学ぶ。1903年東京美術学校西洋画科選科卒。清国北京大学に2年間勤務。11年京都の染織家・龍村平蔵の工房で一年間図案制作。22年から3年間渡仏留学、前田寛治や藤田嗣治らと交遊、研鑽を積み、サロン展出品した。1961年没、84歳。洋画家

森川 昭 (もりかわ・あきら/1927～1979年)※

東京都生れ。東京美術学校彫刻科中退。1926年自由美術協会展に出品、入選、28年会員、39年退会。無所属。彫刻家

森川 鏐 (もりかわ・えい?/1912～1960年)※

1912年生れ。53年春陽会会員。1960年没、48歳。平塚市美術館が作品所蔵。洋画家

森川松之助 (もりかわ・まつのすけ/1874～1918年)

東京美術学校西洋画科選科卒。1903～07年群馬県立佐野中学校に勤務。07年文展に出品。12年～17年群馬県立富岡中学校に勤務。31年上京。1918年没、44歳。洋画家、美教

森 寛斎 (もり・かんさい/1814～1894年)

山口県生れ。森徹山に師事する。1838年円山派復興のため京に上った。85年京都御所造営に加わり、常御殿西御椽座敷の杉戸に描く。上洛、80～83年京都府画学校に勤務。81年内国勧業博覧会に出品、三等妙技賞受賞。90年帝室技芸員拝命。写実主義を標榜し、山水画を得意とする気韻あふれる独自の画風を確立。山元春挙など後進の育成にも力を注ぎ、円山派最後の巨匠として明治の京都画壇に大きな足跡を残した。1894年没、80歳。幕末、明治時代、京都で活躍した絵師、日本画家、美教

森 琴石 (もり・きんせき/1843～1921年)

兵庫県生れ。1850年鼎金城に南画を学ぶ。漢籍を妻鹿友樵、高木退蔵に学ぶ。78年高橋由一から油絵の手ほどきを受けたという。由一と親交があり銅版画家で知られる松田緑山とは、何らかの接触があったと推測される。82年第一回内国絵画共進会で褒状。84年浪華画学校の支那画教員。89年浪華学画会を結成、85年大阪府立博物館で大阪絵画共進会を開催。86年宮内庁の御洋画家。75～89年にかけて多くの銅版画を手掛けている。現在確認されているだけで60点から70点以上、特に地図は25点以上と多い。1921年没、78歳。南画家、洋画家、版画家

森口多里 (もりぐち・たり/1892～1984年)

岩手県生れ。1914年早稲田大学文学部英文学科卒。22年早稲田大学建築学科講師。23～28年早大留学生で滞仏。パリ大学で聴講、とくにフランス中世美術における建築、彫刻、工芸を研究。帰国後は早大建築学科で工芸史を講じる。新聞、雑誌等に著述活動を精力的に展開、戦前の著作に「ゴシック彫刻」(39年)、「近代美術」(40年)、「明治大正の洋画」(41年)、「美術文化」(41年)、「中村彝」(41年)、「続ゴシック彫刻」(41年)、「民俗と芸術」(42年)、「美術五十年史」(43年)。20年岩手県黒沢尻町に疎開し、以後民俗学の研究を本格的に開始。48年岩手県立美術工芸学校初代校長。51年盛岡短期大学教授を兼任し美術工芸科長。58年岩手大学教授。戦後の著作に「美術八十年史」(54年)、「西洋美術史」(56年)、「民俗の四季」(63年)。岩手県文化財専門委員、日本ユネスコ国内委員。岩手日報文化賞、河北文化賞。盛岡市で没、91歳。86年第一法規出版『森口多里論

集』刊行。(引用 東文研) **美術史家、美術評論家、著**

森 桂一 (もり・けいいち/1904～1988年)

岐阜県生れ。1928年東京美術学校図画師範科卒。日展委嘱。光風会会員。千葉大学名誉教授、75～81年千葉明德短期大学名誉学長。千葉で没、83歳。**美教、洋画家**

森 敬子 (もり・けいこ/1947年～)

兵庫県生れ。1970～99年まで二科展出品、同千葉支部所属、二科会 藤井二郎氏 同 天野三郎氏師事。93年銀座ブランタン、94年池袋三越、2001、02、03、04、05年ギャラリー汲美、03年柏わたくし美術館で個展開催。07、08、10、12年新潟絵屋で個展。08年ギャラリーゴトウで個展。アビアント、ギャラリーf分の1で個展。**洋画家**

森 馨之助 (もり・けいのすけ/1898～1956年)

愛知県生れ。1917年愛知県立第五中学校卒、本郷洋画研究所に学ぶ。大澤鉦一郎、鶴城繁、藤井外喜雄、山田睦三郎、宮脇晴らと愛美社を結成。19年愛美社油絵素描展覧会(第1回愛美社展)。～21年第3回展出品。21年名古屋市立工業学校図案科助教諭。帝展入選。22年川端画学校入学。～23年中退。24年静岡市内で代用教員。48年一宮市立葉栗小学校助教諭。53～56年一宮市立葉栗小学校教諭。1956年没、58歳。2007年岸田劉生と愛美社の画家たち(刈谷市美術館)に作品展示。**洋画家、美教**

森崎伯霊 (もりさき・はくれい/1899～1992年)

兵庫県生れ。独学。1943年院展に入選。姫路市展市長賞や兵庫県文化賞、神戸新聞平和賞。院展で特待。絵を添えた俳画を数多く制作した、地域民俗研究団体「常民学舎」俳画に焦点を当てた作品集「四季俳画」出版。1992年没、93歳。2007年あさご芸術の森美術館・淀井敏夫記念館(兵庫県)で森崎伯霊展開催。**日本画家**

森下慶三 (もりした・けいぞう/1944～2003年)

福岡県生れ。奨学金を得、イタリアに渡り、ミラノの国立ブレラ美術専門学校彫刻科でマリノ・マリーニに学ぶ。在学中にサン・フェレーデ賞展受賞、スタジオ・マルコーニで個展。絵画作品も傑出。若くしてイタリア美術界に認められた。以来、ミラノに三十年余暮らす。1979年日本で初めて個展を開いた。ミラノで没、59歳。**彫刻家、洋画**

森嶋忠夫 (もりしま・ただお/1908～1972年)

和歌山県生れ。1929年京都高等工芸学校卒。29～35年大阪高島屋入社。34年帝展入選、36年新文展鑑査展入選。日展、東光展、槐樹社展に出品、白鳩高等文化学院、関西美術学院の創立に参画、大阪芸術大学教授。60年新世紀展でエトアール賞、会員。1972年没、63歳。**洋画家、美教**

森嶋包光 (もりしま・ほうこう/1906～1977年)

奈良県生れ。信濃橋洋画研究所に学ぶ。行動美術協会会員。創造美術会会員。1977年没、71歳。**洋画家**

森 守明 (もり・しゅめい/1892～1951年)

京都生れ。1923年京都市立絵画専門学校別科卒。西山翠嶂に師事し、画塾青甲社に学ぶ。22年帝展入選。27、30年帝展で特選。画塾青甲社で活動のほか、26年市立美術工芸学校、40年からは市立絵画専門学校指導にあたる。堂本印象は義弟。木版画制作。京都で没、59歳。**日本画家、版画**

守住勇魚 (もりずみ・いさな/1854～1927年)

徳島県生れ。1875年上京、国沢新九郎の彰技堂に学ぶ。76年工部美術学校でフォンタネージに師事。78年工部美術学校退学、十一会を結成。94年京都市工芸品展覧会審査委員。79年大阪専門学校(のちの第三高等学校)の画学教員。～96年第三高等学校助教授依願免官。95～1917年同志社の画学教員。04年京都高等工芸学校雇となる。川島織物の錦綴の下絵を描いた。27年没、73歳。**洋画家、美教**

森清治郎 (もり・せいじろう/1921～2004年)

愛知県生れ。1939年東京美術学校図画師範科入学。47年紅土会に入会。50年日展入選。光風会展で52年ブルーヴ賞、53年南賞、54年光風特賞を受賞。57年渡欧。2004年没、82歳。(出典 わ眼) **洋画家**

森 狙仙 (もり・そせん/1747～1821年)

名は守象。狙仙は号で、初め祖仙。大坂を中心に活躍。狩野派を学び、円山応挙の影響を受け、写実的画風を確立。動物画、特に猿の図を多く描いた。1821年没、74歳。**江戸後期の絵師**

森田英二 (もりた・えいじ/1941～2006年)

徳島県生れ。1955年徳島県立川島高等学校卒。大阪に就職、勤務の傍ら絵具を購入。のち上京。62年個展開催。64年独立展に初入選。以後たびたび出品。会友となるが、病気のため出品できずに昭和55年会友を削除される。昭和57年ふたたび会友となり以後出品。66年喫茶店木村屋で個展開催。洲之内徹が偶然同店を訪れ、作品を購入。69年渡欧。帰国後の71年頃、精神病院に入院。73、74年洲之内徹の現代画廊で個展開催。東京で没、65歳。(田村) **洋画家**

森谷南人子 (もりたに・なんじんし/1889～1981年)

岡山県生れ。京都市立絵画専門学校(現京都市立芸大)卒。竹内栖鳳の指導をうけ、国画創作協会に参加。1920年広島県尾道に住み帝展、新文展に出品し

た。1981年没、91歳。作品に「秋の日」「秋郊」など。
日本画家、版画

森田りえ子（もりた・りえこ/1955年～）

兵庫県生れ。1980年京都市立芸術大学日本画専攻科修了。86年川端龍子大賞展大賞。2006年京都御所迎賓館に作品制作。07年金閣寺本堂で杉戸絵と客殿天井画制作。09年真澄寺別院流響院・襖絵制作。13年京都市立芸術大学客員教授。16年京都美術文化賞。**日本画家、美教**

森田亀之助（もりた・かめのすけ/1883～1966年）

東京生れ。1896年東京美術学校西洋画科卒。岩村透に西洋美術史と英語を、神田国民英学会などで英語を学び、卒後母校助手となり英語を担当、1915年から美術史も担当、17年助教授。25～27年欧州留学、29年再渡欧、欧州古写本絵飾を調査、29年教授。44年退職。46年金沢美術工芸専門学校創立、校長、55年同美術工芸大学長。09年から雑誌「美術新報」編集に参加、海外美術界消息、外国美術家評伝、研究評論を執筆。著書に「芸術家と美術運動」。金沢市で没、83歳。**美術史家 金沢美術工芸大学学長、美教**

森 堯之（もり・たかゆき/1915～1944年）

徳島県生れ。1934年帝国美術学校本科西洋画科に入学。浅原清隆らとグループ「表現」を結成。37年独立美術協会展に入選、シュルレアリスム。3回連続で入選。25年美術文化協会の結成に参加。名取洋之助の日本工房に写真家として入社。43年応召。ビルマで戦病死、29歳。**洋画家**

森田訓司（もりた・くんじ/1939～1987年）

広島県生れ。絵は独学。泰明画廊がバックに付き、渡欧し、フランス・グランシヨミエールに学ぶ。個展で発表。安井賞展出品、独立展出品、ル・サロン・カンヌ国際展出品。1987年没、47歳。**洋画家**

森田曠平（もりた・こうへい/1916～1994年）

京都生れ。関西学院で洋画を学ぶ。1940年小林柯白に師事。43年院展入選。安田靫彦の門下となる。59年日本美術院大観賞。院展同人。68年日本美術院賞。73年内閣総理大臣賞。76年頃より絵巻作品の制作を試みる。歴史や古典に主題を求め、舞妓、大原女など独自の画風の作品を発表した。川崎市で没、78歳。**日本画家**

森田沙伊（もりた・さい/1898～1993年）

北海道生れ。旧制東海中学校卒。1923年東京美

術学校日本画科卒、帝展、文展に出品、39年文展特選。40年より法隆寺壁画模写に従事。戦後は日展に出品、58年同評議員、59年日本芸術院賞、69年日展理事。75年日本芸術院会員。76年勲三等瑞宝章。1993年没、95歳。**日本画家、版画**

森田 茂（もりた・しげる/1907～2009年）

茨城県生れ。1925年茨城県師範学校本科第二部卒。高等小学校教員。31年熊岡洋画研究所入所。38年東光会会員。新文展特選。56年日展審査員、東光会委員、62年日展評議員、66年新日展文部大臣賞、70年日本芸術院賞、71年日展理事、75年日展監事、77日展常務理事。76年日本芸術院会員。77年勲三等瑞宝章、日展常務理事、80年東光会初代理事長。82年日展顧問。93年文化勲章、茨城県名誉県民。2009年没、101歳。**洋画家**

森 大造（もり・たいぞう/1900～1988年）

滋賀県生れ。1927年東京美術学校彫刻科卒。31年帝展入選し、木彫、第15回帝展特選。「若き建男」（昭和11年文展招待展）、「海東之正気」（セメント、第4回新文展）。新文展発足とともに無鑑査。50年日展に出品。51年創型会を創立し同展に制作発表。54年仏教美術協会を組織。木彫を主とし、後半期は仏教的題材を多く手がけた。東京で没、88歳。**彫刻家・版画**

森谷南人子（もりたに・なんじんし/1889～1981年）

岡山県生れ。1905年京都市立美術工芸学校絵画科卒、京都市立絵画専門学校本科卒。日本画のほか油彩画や創作版画に取り組み、木版画制作。同人誌『光芒』の主催展覧会出品し、同誌の表紙も手がける。18年国画創作協会設立後は、毎回出品し、のちに国展会友。28年国展解散後、新樹社や帝展、日本南画院展で活躍。その後も在住した尾道周辺の風景を叙情性豊かに描き続けた。戦後は中央画壇との交流を断ち、瀬戸内の田園風景をテーマに作品を描き続けた。1981年没、92歳。**日本画、版画、洋**

森田恒友（もりた・つねとも/1881～1933年）

埼玉県生れ。不同舎に通う。1906年東京美術学校西洋画科卒、研究科に進むが07年中退。美術文藝雑誌「方寸」創刊。「パンの会」結成。14～15年渡欧。15～17年二科会会員。16～20年日本美術院同人。22年春陽会創立会員。29年帝国美術大学主任教授。33年没、51歳。（出典 わ眼）**洋画家、美教、水彩、版画**

森田信夫 (もりた・のぶお/1921～1996 年)

京都生れ。1947年東京美術学校油画科卒。49年二科展で特賞。62年二科会会員。62～66年女子美術大学、桑沢学園で講師を務める。64～78年東京造形大学絵画科主任教授。96年没、75歳。(出典わ眼) **洋画家、美術教育**

森田 勝 (もりた・まさる/1904～1944 年)

出生地不明。1911年上京、藤嶺中学校卒。原精一、鳥海青児と交遊。萬鉄五郎、小林徳三郎に師事。東京美術学校西洋画科中退。28年春陽会展入選。29～35年渡仏、サロン・ドートンヌに出品。35年春陽会賞、37年昭和賞、39年春陽会会員。長野県で没、41歳。 **洋画家**

森田元子 (もりた・もとこ/1903～1969 年)

東京生れ。1922年岡田三郎助に入門。24年女子美術学校洋画科高等科卒。24～26年渡欧、シャルル・ゲランに師事。37、38年新文展で特選。42年光風会会員に推挙。46年日展で岡田賞。48年女子美術専門学校教授。日展評議員、光風会理事。東京で没、66歳。 **洋画家、美教**

森田緑雲 (もりた・りよくん/1852～1913 年)

愛知県生れ。1876年渡辺小華に学び、華椿系南画を受け継ぎ、小華没後、晩翠、衣洲らとともに三河における小華門を盛り上げた。84年内国絵画共進会には、原田圭岳、長尾華陽、深井清華、稲田耕山、鈴木拳山らとともに出品。84年三ツ相栄昌寺観音堂天井画作成に大河内晩翠、植田衣洲らと小華一門が参加。90年内国勸業博覧会で褒状、91年日本青年絵画共進会で一等。1913年没、61歳。 **南画家**

森藤山風 (もりとお・さんふう/1943 年～)

広島県生れ。2010～14年、あきる野市の小机邸(都指定有形文化財)で個展。2012 年、日本橋・ギャラリー砂翁&トモスで個展。枝香庵で個展。 **洋画家、水彩画家**

守 洞春 (もり・どうしゅん/1909～1985 年)

岐阜県生れ。商店などにつとめながら版画、書道を独学。1941年文展入選。61年日展特選。東光会に属し、東洋的・日本的なものを追求した。1985年没、75歳。 **洋画家、版画、書**

森 俊光 (もり・としみつ/1946～1988年)

名古屋生れ。大阪市立大学中退。1972年大阪で児童画教室。73年二紀会で佳作賞。村松画廊で

個展。77年日本橋真木画廊で個展。85年春秋画廊で個展。1988年没、42歳。 **洋画家**

森 通 (もり・とおる/1926～2001 年)

大連生れ。1946年坂本繁二郎に師事。62年独立展独立賞・30 周年記念賞。63年独立美術協会会員。67～69年メキシコ、アメリカ、渡仏。メキシコ巡遊で陶板壁画造。72年北アフリカ・ヨーロッパへの旅をきっかけに、“砂漠シリーズ”制作。2001年没、75歳。11年唐津市近代図書館で没後10年森通展開催。 **洋画家**

森 寅雄 (もり・とらお/1902～1976年)

東京生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒。46年一水会会員。日本水彩画会会員。1976年没74歳。 **洋画家、水彩画家**

森野円象 (もりの・えんしょう/1903～1989 年)

神奈川県生れ。内藤伸に師事。1925年帝展入選、33、34年特選。32年年日本木彫会会員。戦後は日展に出品、63年文部大臣賞。スポーツを題材とした作品が多い。1989年に没、85歳。 **彫刻家**

森野眞弓 (もりの・まゆみ/1941 年～)

東京生れ。1968年早稲田大学大学院修士課程修了。70年シュル美術賞展・佳作賞。74年国際グラフィック展・買上賞。78年日本現代版画大賞展・大賞。79年グレンヘン国際色彩版画トリエンナーレ・最高賞(第11 回も)、バルパライノ国際美術展・版画ドローイング部門大賞。82年文化庁芸術家在外研修員(NY、スペイン)。89年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ・招待出品、優秀美術作品として文化庁買上。90年ソウル国際版画ビエンナーレ・招待出品。 **版画家**

森 白甫 (もり・はくほ/1898～1980 年)

東京生れ。父は日本画家森白畝。1916年荒木十畝の画塾「読画会」に入門、花鳥画を学ぶ。23年平和記念東京博覧会に入選。31、33年帝展で特選。戦後は日展に出品。57年日展出品で日本芸術院賞。78年日本芸術院会員。また多摩美術大学で長く教鞭をとり、『日本画の技法』(1947 年)などの著作がある。1980年没、82歳。 **日本画家、美教**

森 秀男 (もり・ひでお/1928～1983 年)

主体美術協会会員。横浜で没、55歳。 **洋画家**

森 秀雄 (もり・ひでお/1935～2012 年)

三重県生れ。父は伊勢型紙の彫り師。1959年東京

藝術大学絵画科油画専攻卒。写真を画面に写し取り、エアブラシで着色する技法研究。62年モダンアート協会展奨励賞、新人賞。67年一陽展出品、67年一陽賞、68年会友、69年会員、2006年一陽会代表。74年日本国際美術展招待出品、優秀賞。80年安井賞特別賞。84年池田20世紀美術館で「森秀雄 青の世界」展を開催。87年東郷青児美術館大賞。2005年東京芸術劇場で「森秀雄、偽りの青空」開催。2012年没、77歳。洋画家

森 兵五 (もり・ひょうご/1924～1989 年)

横浜市生れ。1946年多摩美術学校専科卒。41年独立展入選、55年独立賞、60年同会会員、十数年間にわたり協会事務局。71年南ヨーロッパに渡りルネサンス期、およびそれ以前の美術を研究したのに続き、72年もスペインのマドリッド大学内に滞在してエル・グレコの研究を行なう。76年NYを、77年パリを訪れる。48年横浜美術協会会員、59～62年横浜美術協会会長。横浜の美術振興に寄与し、独立美術協会にあっては十数年間にわたり協会事務局となつて会の活動を支えた。横浜で没、65歳。美術研究、洋画家

森 三美 (もり・みよし/1872～1913 年)

福岡県生れ。京都府立画学校に学び、小山三造に学ぶ。1894久留米市高等小学校図画教師。青木繁、坂本繁二郎らを育てる。久留米子高等女学校、福岡県立東筑中学校、佐賀県立中学校経論。1913年没、41歳。洋画家、美教

森村泰昌 (もりむら・やすまさ/1951 年～)

大阪生れ。京都市立芸術大学美術学部卒。1985年セルフ・ポートレート写真を発表、「美術史シリーズ」で脚光。88年ヴェネツィア・ビエンナーレでアペルト部門に選抜。「女優」「サイコボグ」、「フェルメール」「フリーダ・カーロ」シリーズ。96年「美に至る病ー女優になった私」横浜美術館、98年「空装美術館/絵画になった私」東京都現代美術館、01～02年「女優 M の物語」川崎市民ミュージアム、07年「森村泰昌ー美の教室、静聴せよ」横浜美術館で企画展開催。現代美術家

森本健二 (もりもと・けんじ/1913～1970 年)

奈良県生れ。奈良師範学校卒。1941年東京美術学校図案師範科卒。47年二紀会創立参加、鍋井克之に師事。52年二紀会展で受賞、53年年二紀会同人、55年二紀会委員。抽象派の作家。大阪教育大学教

授。57年文部省より美術教育指導者として沖縄に派遣。70年没、56歳。洋画家、美教

森本香谷 (もりもと・こうこく/1867～1937 年)

松江市生れ。1886年に松江師範学校卒。1903年長野県立飯山中学校の教諭。08年太平洋画会展出品。09年日本水彩画研究所長野支部会員、10年自宅に日本水彩画会研究所飯山支部を設立。12年松江高等女学校に赴任。13年日本水彩画会に組織変更されると同会に所属し、16年会員。13年松江において絵画研究グループワカバ会を結成し、夏期講習会に石井柏亭、第2回には丸山晚霞を迎えて水彩画の講習を行なった。大正末には松江洋画研究所の開設と運営に尽力し、島根の美術振興に貢献。1937年没、70歳。水彩画家

森本茂雄 (もりもと・しげお/1886～1932 年)

東京生れ。1900年国立印刷局に入局し、デザインや原版彫刻を担当、工芸官(専門職)、22年高等技術者。三宅克己に師事した後、白馬会洋画研究所に学ぶ。白馬会展(9、10、12 回展)、東京勸業博覧会、文展(2～4 回、7 回展)、日本水彩画会展(会員として1～5、8、10、15 回展)、光風会展(1～7 回展)にそれぞれ出品し入選。1932年没、46歳。水彩画家

森本草介 (もりもと・そうすけ/1937～2015 年)

朝鮮生れ。1964年東京藝術大学油画専攻科修了、同学美術学部助手。65年国画賞、66年会友、68年会友最高賞、69年会員。同年、東京藝術大学の同世代のグループ十騎会結成に参加。95年『森本草介画集』(求龍堂)が刊行。2012年『光の方へ 森本草介』(求龍堂)刊行。2015年没、78歳。洋画家

森本 猛 (もりもと・たけし/1956 年～)

愛媛県宇和島市出身。武蔵野美術大学卒。1991熊本に移り住む 1997 北の大地展。2002 ビエンナーレ熊本 2007 第16回英展 別府アジアビエンナーレほかグループ展、公募展入賞多数(現)熊本市在住、無所属。個展; 銀座汲美、ギャラリーKANI(東京)、ギャラリーゴトウ(銀座)、ギャラリート、ギャラリーマチス(阿蘇)、ギャラリーリーブアート。洋画家

森本秀樹 (もりもと・ひでき/1951 年～)

愛媛県生れ。武蔵野美術短期大学油絵専攻科卒。1980年日仏現代展出品。イタリア美術展出品。90年上野の森美術館大賞展93年佳作賞。91年昭和会展出品。ギャラリー汲美で個展。2001年小田急百貨店新宿店で個展。07年東御市立梅野記念絵画館で個展。08、11、14、20年個展(名古屋画廊) 洋画家

森本木羊子（もりもと・もくようし/1898～1992 年）

熊本市生れ。1919年大阪貿易学校英語科卒、上京。浜村蔵六、野川鼎象に篆刻を、増原宗一に日本画を学ぶ。24年貿易商に勤務。セイロン島コロボ勤務。35年大阪高島屋に入社。美術部、呉服部勤務。民芸運動に傾注。53年高島屋退職。木版画を始める。日本工芸館で棟方と合同版画展。湊川神社拝殿の天上画「白馬」、「天馬」を献納。「みんなげい」で河井武一と「押出版画と陶芸展」を開催。「堂島日本工芸館」「たくみ」「中宮画廊」個展開催。東大寺二月堂、修二会の紙手を寄進。日本版画院に所属。1992年没、94歳。 **版画、日本画家、仏画**

守屋多々志（もりや・ただし/1912～2003 年）

岐阜県生れ。東京美術学校卒。前田青邨に学ぶ。1931年院展入選、77年文部大臣賞、85年内閣総理大臣賞。96年文化功労者。2001年文化勲章。歴史画で知られ、法隆寺金堂、高松塚古墳の壁画の再現・模写。愛知県立芸大教授。2003年没、91歳。 **日本画家、美教**

守谷史男（もりや・ふみお/1938 年～ ）

愛媛県生れ。1957年愛媛県立新居浜工業高等学校卒。62～2000年行動美術展に出品。行動美術協会会員。75年O.I.F.S.海外派遣文化交流員、3ヶ月渡米。75年 GE 展（-2000 年）。88年日本国際美術展。89年エンバ賞美術展（-1995 年）。91年 '91ABC&PI 展（-1994 年）。91年 茨木市立中央図書館壁画制作。96年茨木市立障害福祉センター壁画制作。2001年大阪トリエンナーレ 2001。05年大阪国際アートフェスティバル。大阪芸術大学教授。 **洋画家、壁画、美教**

森山朝光（もりやま・ちようこう/1897～1962 年）

水戸市生れ。1912年立志上京し山崎朝雲に師事。24年日本美術協会展で銅賞首席。27年、第 8 回帝展へ「垂乳根」を出品、初入選以来毎年入選、帝展から文展へ、戦後の日展へと終始師朝雲から修得した日本伝統木彫の刀技を生かした穏健な木彫作品を出品した。57年日展会員。木彫界の中堅作家。水戸市で没、65歳。 **彫刻家**

森山 肇（もりやま・はじめ/1887～1965 年）

東京生れ。1910 年第 13 回白馬会展に出品。13 年東京美術学校西洋画科本科卒。第7回文展に初入選。13 年第 3 回光風会展で今村奨励賞。15 年第 9 回文展に出品。19年第7回光風会展で今村奨励賞。20 年第 8 回光風会展で今村奨励賞。21 年第 9 回光風会展で会員。22 年平和記念東京博覧会に出品。38 年第 25 回光風会展で評議員。55 年第 41 回光風会展で退会。65 年 12 月 27 日没、享年 78 歳。（佐） **洋画家**

森山安英（もりやま・やすひで/1936 年～ ）

北九州市生れ。1968 年前衛美術グループ〈九州派〉の影響を受け、自らも地元作家たちとともに〈集団蜘蛛〉を結成。3 人のメンバーに少数精鋭化、既存の美術団体や権威のみならず、同時代の前衛運動すらも標的とし、あらゆる芸術表現を否定する過激なハプニングを繰り返した。その後 15 年の長い沈黙の時期を経て、88年から突如として銀一色の絵画作品を発表し始めます。「アルミナ頌」「光ノ表面シテノ銀色」などのシリーズは、筆で描くのではなく、絵具を流し込むことで画面を覆っていく独特の手法により、「描く」という行為自体を問い直しています。2001年以降にはたびたび「普通の絵を描きたい」と口にし、色やかたちといった絵画的要素や社会的なテーマを積極的に取り戻し、近年は具象画も手がけるようになりました。2018年北九州市立美術館で森山安英 解体と再生展開催。 **洋画家、ハプニング**

森 有材（もり・ゆうざい/1906～1946 年）

和歌山県生れ。1932年独立展入選。37年独立展で協会賞。38年独立美術協会会友。46年没、40歳。 **洋画家**

森 幸夫（もり・ゆきお/1950 年～ ）

埼玉県生れ。創形美術学校造形科卒。古川弘に師事。陶芸を熊谷焼の渡辺鏗に師事。90～99年東急日本橋店でガラス絵個展開催。2000年より京橋金井画廊で個展開催。2011年梅野記念絵画館で個展開催。 **洋画家**

森由太郎（もり・ゆたろう/1926～1969 年）※

福井県生れ。1955年一陽会創立会員。二科会で活躍。教職で後進を指導。福井の重要な前衛美術運動である「北荘画会」に関わる。1969年没、43歳。 **洋画家、美教**

森 芳雄（もり・よしお/1908～1997 年）

東京生れ。1926年慶應義塾普通部修了。本郷絵画研究所、28年「一九三〇年協会」洋画研究所に通う。中山巍に師事。31～34年パリに遊学。32年サロン・ドートンヌに入選。36年独立美術協会展でD賞。39年自由美術協会会員。62～81年武蔵野美術大学教授。64年主体美術協会結成に参加。81年渋谷区立松濤美術館で個展。97年没、88歳。（出典 わ眼） **洋画家、美教**

森 由太郎（もり・よしたろう/1901～1969年）

福井県生れ。鈴木新太郎に師事。二科展に出品。
一陽会創立会員。1969年没、68歳。洋画家

森 義利 (もり・よしとし/1898～1992 年)

東京生れ。1915年山川秀峰に入門。秀峰の父に文様、染色の指導を受ける。21年中村不折の指導する太平洋画会研究所に学ぶ。23年川端画学校に学ぶ。25年文様、染色の仕事で独立。38年柳宗悦の講義に感銘、師事。39年芹沢銈介らと染色研究団「萌黄会」を結成。染色の経験をいかし、合羽摺の版画家としても活躍。46年日本美術及工芸交易新興展で三等賞。56～62年国画家工芸部会員。56～65年日本版画院会員。85年銀座・松坂屋で回顧展。ライデン国立民族学博物館で回顧展。日本の祭りや風俗を主題としながら、「紅型」に近い型紙による染色版と伝統的な合羽版の併用による革新的な技法を用いて、独自の版画世界を築いた。東京で没、93歳。版画家、文様

森 緑翠 (もり・りよくすい/1917～1999 年)

東京生れ。1930年中村岳陵に師事し、画塾・蒼野社に入門。35年院展試作展に入選。37年新文展に入選。42年野島青茲の紹介で一采社の同人。第6回新文展で特選。戦後も日展に出品。59年新日展で特選。61年我妻碧宇、中村正義とともに中村岳陵の蒼野社を退き、日展からも離脱。我妻碧宇らと無所属クラブ・白土会を結成し、以後出品を重ねる。79年名古屋造形芸術短期大学顧問。92愛知県文化功労者。94年個展(豊橋市美術博物館)。98年地域文化功労者(文化庁)。1999年没、82歳。日本画家、美教

森脇清秀 (もりわき・きよひで/1914～1975年)

姫路市生れ。二科会展、日本水彩画会展に入選。大潮会会員。1975年没、60歳。洋画家

森脇 忠 (もりわき・ただし/1888～1949 年)

島根県生れ。1912年光風会展で今村奨励賞。14年東京美術学校西洋画科卒。15年文展で三等賞、20、22年帝展で特選。のち無鑑査。25年光風会会員。華畝洋画会に属し、又、三高、京都高等工芸学校の講師。京都で没、61歳。洋画家、美教

森脇正人 (もりわき・まさと/1950 年～)

愛知県生れ。1975年多摩美術大学日本画科卒、小学校教師、第7回日展入選。79年奥田元宋に師事。89年日展で特選。石田財団奨励賞。94年日展会員。98年日本橋高島屋にて個展開催。99、2000年と中国へ取材旅行。2001年回顧展「詩情と造形の世界

森脇正人展」(文化フォーラム春日井)を開催。07年日展評議員。練馬区立美術館では08年「コレクション特集展示 森脇正人展 一生きる」を開催。日本画家、美教

両角 修 (もろずみ・おさむ/1948 年～)

長野県生れ。1972年多摩美術大学卒。74年同大学院修了。72年日本版画協会展新人賞、同年版画グランプリ展グランプリ。76年ジャパン・アート・フェスティバル優秀賞。クラコウ国際版画ビエンナーレ、マイアミ国際版画ビエンナーレ出品。抽象的な形態による堅牢な画面空間を構築した。版画家

門田秀雄 (もんでん・ひでお/1937 年～)

東京生れ。1981年美術誌『構造』を創刊、『斑』など批評誌を自家出版し、論評。美術評論活動をてがけ、以後、個展を中心に作品の発表も続けています。プロレタリア美術作家にも光を当てている。著書に「須田国太郎論」、門田秀雄氏による瀧口修造試論「批評も思想ぬきで成り立つ」。洋画家、評論家

や

八木幾朗 (やぎ・いくろう/1955 年～)

静岡県生れ。多摩美術大学大学院日本画科卒。創画展出品、1982、84、85年春季展賞、86年創画会賞。92～95年 文化庁在外研修員にて仏滞在。97年個展(大壁画 墨、日本橋高島屋・横浜・大阪)個展・ジャポニズム。京都造形芸術大学教授。日展同人。日本画家、美教

八木一夫 (やぎ・かずお/1918～1979 年)

京都市生れ。1931年京都市立美術工芸学校彫刻科入学。37年同校同科卒。商工省陶磁器試験所付属伝習生。46年より陶芸に専念。71年京都市立芸術大学美術学部陶芸科教授。73年日本陶磁協会賞金賞受賞。78年新宿伊勢丹「還暦記念八木一夫展」開催。79年没、60歳。彫刻家、陶芸家、美教

八木彩霞 (やぎ・さいか/1886～1969 年)

松山市生れ。愛媛県師範学校を卒業後、県内で教壇に立ち、1917年横浜に転出。ドイツ人画家リデルスタインに師事。25年渡仏、留学、ソルボンヌ大学、グランシヨミール美術院に学ぶ、サロン入選三回。帰国後は無所属。旧久松邸(現、愛媛県立美術館分館)の壁画制作。1969年没、84歳。洋画家、壁画

八木 正 (やぎ・ただし/1956～1983 年)

京都生れ。陶芸家八木一夫と織物作家高木敏子の二男。75年京都市立日吉ヶ丘高校普通科卒。79年京都市立芸術大学美術学部彫刻科卒。同大美術専攻科、81年同科を修了。78年京都府彫刻展に出品。翌年より毎年個展を開く。木彫作品を制作したが、のちに生地 of 板をつなぎあわせた立体へと移行し、やがて着色した板と生地 of 板を並列させたり、板の表面に凹凸をもたせたりするようになった京都芸術短期大学、インターナショナル・デザイン学校で講師。83年東京伊奈ギャラリー、京都芸術短期大学ギャラリー楽で遺作展が開かれた。1983年没、26歳。彫刻家、美術教

柳生不二雄（やぎゅう・ふじお/1925～2005 年）

東京生れ。1948年学習院高等科文科卒。50 年慶応義塾大学法学部卒。51年日本で最初の公立近代美術館、神奈川県立近代美術館に勤務、副館長の土方らと開館に尽力し、59年まで在職。63～70年まで日本橋で開廊していた秋山画廊の運営に中川杏子と携わり、当時画廊で扱われることの稀だった彫刻(立体造形)、とりわけ抽象彫刻を主体とした展覧会を企画、土谷武、若林奮、堀内正和、江口週、最上寿之といった作家を取り上げた。74～85年まで神奈川県立県民ホールでギャラリー課長として勤務。持ち前のバランス感覚を発揮し、絵画や版画、彫刻の領域で活躍する中堅から大家クラスの個展を集めて行う「現代作家シリーズ」や、県在住の版画家を母体に無審査、無償制度の「神奈川県版画アンデパンダン展」、工芸の中でも美術的な傾向の強い工芸家と地元の工芸家による作品展にギャラリー側の企画を組み合わせる「日本現代工芸美術展」を三本柱に展覧会を開催。特に彫刻に関しては開館 5 周年記念「現代彫刻の歩み」展を企画、彫刻の県民ホール・ギャラリーという美術界の評判を印象づけた。秦野、小田原、平塚で県市共催の野外彫刻展の運営。審査。83～93年まで美術雑誌『三彩』に「彫刻のあるまちづくり」を連載、全国を歩き野外彫刻の試みを伝えた。85 年から87年まで横浜市民文化室、87年から財団法人横浜美術振興財団に勤務。86～2005年まで『神奈川県新聞』の「美術展評」を担当。97年に発足した屋外彫刻調査保存研究会に参加し、04年まで初代会長を務めて研究会の方向性を作り上げた。著書に『ルネ・ラリック』（PARCO 出版 1983年）がある。2005年没、80歳。彫刻美術評論家

矢口佳那（やぐち・かな/1982 年～ ）

北海道生れ。2002年武蔵野美術大学造形学部油絵学科入学。06年武蔵野美術大学卒業制作優秀賞、

同年卒。07年ギャラリー山口（京橋）で個展開催。世界堂大賞展でぺんてる賞。08年個展「展示風景を見る」（中和ギャラリー／銀座）、09年「曇りの日」（art&bar entkukui エンククイ／恵比寿）、新宿眼科画廊（新宿）で個展開催。洋画家

矢口 洋（やぐち・ひろし/1916～1991 年）

宇都宮市生れ。1936年栃木県師範学校本科卒。44年東京美術学校師範科卒。寺内萬治郎に師事し、48年光風会展入選、53年会友、56年岡田賞、会員。48年日展入選、56年岡田賞、会友。50年宇都宮大学教育学部美術科助教授、68年教授。52～54年文部省フランス留学生及び在外研究員として滞仏。72～75年宇都宮大学付属小学校校長、78年日本教育大学協会第2美術部門委員長、大学美術教育学会理事長。88年宇都宮上野百貨店で自選展。宇都宮市で没、74歳。洋画家、美術教

八木なぎさ（やぎ・なぎさ/1961 年～ ）

横浜市生れ。1985年女子美術大学芸術学部洋画専攻（油絵）卒。87年多摩美術大学美術研究科（版画）修了。87年日本版画協会賞、中華民国版画ビエンナーレ（中華民国）出品。91年具象版画展、グランプリ受賞。97年クラコウ国際版画ビエンナーレ（ポーランド）。女子美術大学准教授。版画家、美術教

八木伸子（やぎ・のぶこ/1925～2012 年）

札幌市生れ。1944年北海道庁立札幌高等女学校専攻科卒。46年札幌洋画研究所で学ぶ。48年全道美術協会展奨励賞、49年知事賞、53年会員。48年春陽会初出品、73年会員。60年女流画家協会会員賞（バウ賞）、同会委員。94年春陽会北海道研究会事務局長。96年紺綬褒章。2012年没、87歳。洋画家

矢崎千代二（やざき・ちよじ/1872～1947 年）

横須賀市生れ。曾山幸彦、堀江正章、黒田清輝に学ぶ。1900年東京美術学校西洋画科卒。03～09年渡米欧。16～26年米欧、インド、南洋諸島を歴訪。30～34年南米、中国、ジャバに取材。38年満州各地歴訪、41年北京に移住。北京で没。75歳。（出典 わ眼）パステル画家、洋画家

矢崎虎夫（やざき・とらお/1904～1988 年）

長野県生れ。1923年諏訪中学校卒。31年東京美術学校彫刻科卒。平櫛田中に師事。1929年日本美術院展入選、34年日本美術院展で試作賞。53年院展で白寿賞、54、59年院展で奨励賞。64年渡仏、ザッキンに師事。66年日府展で文部大臣賞。73年長

野市野外彫刻賞80、82、84年高村光太郎大賞展で優秀賞。東京で没、84歳。彫刻家

矢崎博信（やざき・ひろのぶ/1914～1944 年）

長野県生れ。諏訪中学校絵画部で洋画を学び、1933年帝国美術学校入学。在学中に小山田二郎らと「L'anima(アニマ)」、浅原清隆らと「動向」を結成。ともに日本のシュルレアリスムを標榜した先駆的なグループだった。38年に帰郷後は、小中学校の教員を務めながら、シュルレアリスムの視点から俳諧と絵画の融合を試みるなど制作を続けていたが、1944年中部太平洋トラック島沖で没、29歳。洋画家

矢崎牧廣（やざき・まきひろ/1905～1983 年）

長野県生れ。1924年上京、林武に師事。「一九三〇年協会」展、二科展入選、独立美術協会展第1回展～出品、43年独立美術協会賞、51年会員。戦後、「信州美術展」の開催に尽力、諏訪美術館設立のため講習会を行う。郷土の美術振興に貢献。49年県展審査員。1983年没、77歳。85年茅野市美術館で遺作展。洋画家

矢島堅土（やじま・けんど/1895～1973 年）

広島県生れ。川端画学校洋画科に入学、本郷洋画美術学校で学ぶ。1920年帝展で入選。29、30、31年帝展で特選。40年創元会創立会員。戦後は日展に出品、活躍。73年没、79歳。洋画家

八島正明（やしま・まさあき/1936 年～ ）

三重県生れ。59年三重大学学芸学部卒。65年美術文化展で美術文化賞、会員。67、70、74年シュル美術賞展で佳作賞。74年安井賞展で安井賞。77年現代日本美術展、78年日本国際美術展。96年小磯良平大賞展で佳作賞。2005年伊勢現代美術館で個展。洋画家

安井収蔵（やすい・しゅうぞう/1926～2017 年）

毎日新聞の美術担当記者を経て、山形県酒田市美術館長、茨城県筑西市しもだて美術館長、日動画廊顧問などを歴任した。「絵話諸縁」、「色いろ調-美術記者のコラム」2017年没、90歳。ジャーナリスト・美術評論家

安井曾太郎（やすい・そうたろう/1888～1955 年）

京都府生れ。1904年聖護院洋画研究所に入所。浅井忠、鹿子木孟郎らに師事。07～14年渡仏。15年二科展に出品、会員推挙。36年一水会創立会員。44年梅原龍三郎と共に東京美術学校教授。52年文

化勲章。神奈川県湯河原で没、67歳。（出典 わ眼）
洋画家、美術教育

安田周三郎（やすだ・しゅうざぶろう/1906～1981 年）

東京生れ。安田財閥を引き継いだ安田善三郎の4男。東京美術学校卒。彫刻の道に進む。日展の審査員、評議員を歴任。横浜国立大学で教授。東京国立近代美術館に、『ルドンの幻想』(1956 第2回日展作品、『蹲る』(1971 第3回改組日展作品:S59 文化庁管理換)、『異形B』(1976 第8回改組日展:S54 購入)の作品が所蔵。'69(S44)横浜市のシルク博物館開館10周年に『絹と乙女』像が設置。横浜市の神奈川県立青少年センターに『フォークダンスをする少年少女像』、大和市役所玄関脇に『求心』など、主に神奈川県内で多くの作品が建之されている。1981年没、75歳。彫刻家

安田田驥（やすだ・でんき/1784～1827 年）

仙台市生れ。須賀川派の洋風画家。姓は安田、名は驥、字は日千。別号に東嶽、臺方菴などがある。元仙台的浪士。仙台で仙台藩絵師・東東洋に学び、須賀川に移住したのちは亜欧堂田善に師事した。また谷文晁、白雲にも学んでいる。1827年(文政10年)没、44歳。江戸後期洋風画家、銅版画家

安田鞞彦（やすだ・ゆきひこ/1884～1978 年）

東京生。名は新三郎。岡倉天心・小堀鞞音に師事する。紅児会を結成、また日本美術院の再興に参加し、新日本画の開拓に尽くす。大和絵を基礎に、歴史に題材を求めた高雅で洗練された画風を示した。良寛風の能書家としても知られる。芸術院会員。文化勲章受章。1978年没、94歳。日本画家

安田老山（やすだ・ろうざん/1830～1883 年）

岐阜県生れ。長崎で鉄翁(てつとう)祖門にまなび、1864年清(中国)にわたり、胡公寿に師事。73年帰国、東京にすむ。奥原晴湖と文人画の覇をきそった。明1883年没、54歳。作品に「楓橋秋水図」「山水ノ図十二種」。幕末-明治時代の画家

安永敬明（やすなが・けいめい/1937 年～ ）

松山市生れ。1960年早稲田大学卒。元コスモ石油常務取締役。元コスモ総合研究所社長。絵画を篠崎輝夫、佐野ぬいに師事。政経文化画人展、五彩会等に出品。Galerie412(1999 年、2002 年)、銀座大黒屋ギャラリー(2007 年)等で個展。政経文化画人展で会長賞ほか受賞多数。洋画家

安永良徳（やすなが・よしのり/1902～1970 年）

横浜市生れ。1919福岡県立中学修猷館を卒え、27年東京美術学校彫刻科卒。31年構造社会員、36年文展無鑑査。昭和16年～22年迄応召を受け、戦後、日展に出品し屢々審査員、評議員。福岡美術協会理事長、福岡ユネスコ協会常務理事。主要作「青春乱舞」（九州大学教養部）、「裸婦」（福岡県立文化会館前）「愛と美」（小倉市歯科医大前）福岡県で没、68歳。彫刻家

矢代幸雄（やしろ・ゆきお/1890～1975 年）

横浜市生れ。東京帝国大学英文科卒業。東京美術学校教授として西洋美術史を担当、1921～25年欧米に留学。ハーバード大学講師、イギリス諸大学派遣教授、帝国美術院幹事、同付属美術研究所所長、文化財保護委員、大和文華館館長などを歴任。62年日本芸術院会員、70年文化功労者。主著は、ロンドンで出版された『サンドロ・ボティチェリ』 Sandro Botticelli (1925) , 『日本美術の特質』(43) , 『東洋美術論考』。神奈川県で没、84歳。美術史家、美術評論家

安田誠道（やすだ・せいどう/1916～1983年）

1916年生れ。国画会研究所に学ぶ。国画会会友。渋谷洋画人体研究所主宰。1983年没、66歳。85年安田誠道画集(非売品)発刊。洋画家、美教

保田善作（やすだ・ぜんさく/1897～1992 年）

大分県生れ。1911年宮崎県立尋常高等小学校高等科卒。24年帝展入選。その後も帝展、新文展に出品。30年聖徳太子奉讃美術展に出品。その他、春台美術展、第一美術協会展に出品、戦後は日展委員をつとめた。1992年没、95歳。洋画家

安田田騏（やすだ・でんき/1784～1827 年）

石垣島生れ。喜友名安信に師事した。師と同門の黒島孫正とともに宮良殿内の板戸絵を作成した。江戸時代絵師

安田 稔（やすだ・ねん/1881～1965 年）

長岡市生れ。小山正太郎に不同舎に入り、1903年東京美術学校西洋画科入学、同校中退。07年渡独、留学して11年ミュンヘン美術大学卒。さらに英仏で二年間研究し、在欧7年ののちに帰国した。滞欧中にロンドンのアート・ソサエティに出品して受賞。第8回文展「お茶どき」、第9回文展「樹蔭のまどゐ」、第10回文展「肖像」、第11回文展「盛夏」を出品した。太平

洋画会会員。聖徳記念絵画館の壁画「樺太国境画之図」を制作。1965年没、84歳。洋画家、壁画

安田 稔（やすだ・みのる/1881～1965 年）

長岡市生れ。1902年不同舎に入門。03～06年東京美術学校中退。太平洋画会展に入選。07年に渡独、11年ミュンヘン美術大学卒。英仏に遊学し、滞英中で石橋和訓を知り、交遊は帰国後も続いた。14年の第8回文展にヨーロッパから出品、東京大正博覧会に出品。15年帰国その後も文展、帝展に入選。21年日本大学芸術学部教授。26年宮内省より勅任の待遇(宮廷画家)。29年太平洋画会展に出品入選。32年明治神宮聖徳記念絵画館に「樺太国境画之図」を依頼制作。37年新文展に入選、以後入選、海洋美術展に入選。39年聖戦美術展に入選。1965年没、84歳。洋画家

安田老山（やすだ・ろうざん/1830～1883 年）

岐阜県生れ。長崎で鉄翁(てつとう)祖門にまなび、1864年清(中国)にわたり、胡公寿に師事。73年帰国、東京にすむ。奥原晴湖と文人画の覇をきそった。1883年没、54歳。作品に「楓橋秋水図」「山水ノ図十二種」。幕末-明治時代の画家

保田龍門（やすだ・りゅうもん/1891～1965 年）

和歌山県生れ。1917年東京美術学校西洋画科卒。15年在学中二科展入選し、17年文展特選。在学中から彫刻もはじめ、卒業後は日本美術院に絵と彫刻を出品し、20年日本美術院同人。20年渡米し、紐育でレンブラントの模写。21～23年渡仏し、パリのグラン・ショミエールでブールデルの指導を受け、ジョルジオーネ、クールベ等を模写し、22年ローマでティツィアーノ等を模写。23年帰国し郷里に住んで院展に出品したが10年後、大阪に出て制作。和歌山大学教授として、大阪市立美術研究所で後進の指導。1965年没、73歳。彫刻家、洋画家、美教

安元亮祐（やすもと・りょうすけ/1954 年～ ）

兵庫県生れ。1972年東京教育大付属聾学校美術専攻科に進んだ。72年光風会展入選、以後毎年出品。75年筑波大学付属聾学校中退。日展に6回入選。88年安田火災美術財団奨励賞。89年セントラル美術館油絵大賞展・佳作賞。92年安井賞展出品。第27回昭和会展で昭和会賞。不忍画廊で個展。2006年Bunkamura Gallery で個展。洋画家、版画、水彩、ペン画、オブジェ

矢田一嘯（やだ・いっしょう/1858～1913 年）

横浜市生れ。アメリカでパノラマの描法を研究。1890年東京上野のパノラマ館開設に際し白河戦争の大場面をえがく。94年から福岡市に定住。油絵の「蒙古軍襲来絵図」や銅像台座の日蓮法難図原画を制作。博多人形の品質向上にも貢献した。福岡市で没、54歳。洋画家

矢内清六（やない・せいろく/1935 年～ ）

福島市生れ。吉井忠、久藤直江に師事。無所属で個展中心に活動。1983～87年現代画廊（銀座）、91年彩林堂画廊、2010年～フォルム画廊（銀座）、マสด画廊（豊前市）で個展。洋画家

矢内原伊作（やないはら・いさく/1918～1989 年）

愛媛県生れ。元東京大学学長の矢内原忠雄の長男。1941年京都帝国大学文学部哲学科卒。戦後、47年宇佐見英治らと『同時代』を創刊。54～56年C・N・R・S（フランス国立科学研究所）の招聘、渡仏。ジャコメッティと交遊し、その作品のモデル。ミロ、ザッキン、シャガールなど美術作家たちを知る。学習院大学、大阪大学、同志社大学などで教鞭をとり、同45年より法政大学教授。サルトル、カミュの実存主義哲学を紹介。西欧の作家たちとの交遊と独自の視点にもとづく芸術評論。著書に「ジャコメッティとともに」「芸術家との対話」「抵抗詩人アラゴン」「京都の庭」「宝生寺」「サルトル」「矢内原伊作の本」、訳書；ジャコメッティ著『私の現実』、カミュ著『ジプソスの神話』、アラン著『芸術について』。東京で没、71歳。（引用 東文研評論家

築川剛一（やながわ・ごういち/1902～1986 年）

函館市生れ。1928年東京美術学校を首席で卒、26年帝展入選。34年帝展に出品特選、無鑑査。少年倶楽部、児童雑誌や絵本などの挿絵画家。37年江戸川乱歩が少年倶楽部に連載した小説「少年探偵団」の挿絵。彫刻家としても、函館市の高田屋嘉兵衛像や長崎市グラバー園の三浦環（蝶々夫人）像などの作品を制作した。また、日本出版美術家連盟の設立にも加わった。73年児童文化功労賞。東京で没、84歳。挿絵画家、彫刻家

柳 光観（やなぎ・こうかん/1912～1992 年）

沖縄県生れ。1932年京都熊野美術学校で日本画、大和絵を学ぶ、美人画と仏画を得意とした。初期の沖展に出品。挿絵の分野でも山里永吉や石川文一らと組んで仕事をした。知る人ぞ知る作家。1992年没、80歳。日本画家、挿絵

柳沢紀子（やなぎさわ・のりこ/1940 年～ ）

浜松市生れ。1963年サロン・ド・プランタン賞（東京芸術大学）。64年日本版画協会賞。65年東京藝術大学大学院油画研究科卒。71～75年NY在住。84年詩画集「海へ」刊行。91年静岡県文化奨励賞。92年文化庁特別派遣芸術家在外研修員（ロンドン）。97年個展（ブルガリア・ナショナルギャラリー）。98年個展（イスラエル・ティコティン美術館）。2001年山口源大賞。03～11年武蔵野美術大学造形学部油画学科版画研究室教授。版画家、美教

柳田 昭（やなぎだ・あきら/1948～2012 年）

茨城県生れ。1980年水彩連盟展発出品（以後毎回出品）。96年第40回安井賞展安井賞。日動画廊・銀座、札幌時計台ギャラリーで個展。2012年柳田昭絵画展～故郷賛歌（筑西市しもだて美術館）。2012年没、64歳。洋画家、水彩

柳田 補（やなぎだ・たすく/1948 年～ ）

愛媛県生れ。1966年愛媛県立松山南高等学校デザイン科卒。79年愛媛（伊予十三佛霊場、理正院金堂）天井画制作。86～89年渡仏、サロン・ドートンヌ入選。88年ル・サロン入選。89年愛媛県立美術館分館にて水彩画展。90年愛媛県立美術館分館にて油彩画展。春陽画廊、中宮画廊、御堂筋アートサロン、心斎橋そごう（大阪）美術画廊、奈良そごう美術画廊、徳島そごう美術画廊、瀧川画廊（大阪）、いよてつ高島屋（愛媛）にて個展。洋画家

柳 幸典（やなぎ・ゆきのり/1959 年～ ）

福岡県生れ。1985年武蔵野美術大学大学院造形研究科修了。90年米国のイェール大学大学院美術学部彫刻科修了。90年に《ザ・ワールド・フラッグ・アント・ファーム》のシリーズで高い評価。93年ベニス・ビエンナーレ、アベルト賞。2005～15年広島市立大学準教授。現代美術家、彫刻家、立体

柳 敬助（やなぎ・けいすけ/1881～1923 年）

千葉県生れ。本姓山田。1895 年県立千葉中学校在学中に堀江正章に絵を学ぶ。1902 年第 7 回白馬会展に出品。03 年東京美術学校西洋画科選科退学。しばらく白馬会研究所に通う。渡米。04 年セントルイス万国博覧会関係で働きながら絵の勉強。05 年ナショナル・アカデミーの夜学に入り、その後、アート・ステューデント・リーグに入る。09年ヨーロッパを經由して帰国。10年白馬会会員。第4回文展で褒状。14年二科会創立会員となるが、後、文展、帝展に出品する。

23年5月16日没、享年42、43歳。同年9月三越呉服店で追悼展覧会開催されるも関東大震災に遭い、出品作の大半が焼失。(佐) **洋画家**

柳沢俊男 (やなぎさわ・としお/1948年～)

宮城県生れ。1973年宮城教育大学卒。1973～78年東京造形大学、武蔵野美術学園に学ぶ。(以降は彫刻)1987年二紀展で安田火災美術財団奨励賞、87年二紀展でU氏賞、92年二紀会彫刻会員、96年会員優賞。(以降は絵画)92年「21世紀の旗手・日本の絵画」出品。 **彫刻家、洋画**

柳沢淑郎 (やなぎさわ・としろう/1923～2006年)

群馬県生れ。1950年東京美術学校卒。51年白日会展で白日賞。58年日展特選。78年現代の裸婦展で大賞。81年松山三越で個展。83年白日会展で内閣総理大臣賞、白日会常任委員。2002年日展で内閣総理大臣賞。85、89年日展審査員、03年日展参与。2006年没、83歳。 **洋画家**

柳原義達 (やなぎはら・よししたつ/1910～2004年)

神戸市生れ。1936年東京美術学校彫刻科卒。文展入選。国展で受賞。39年新制作派協会彫刻部創立。52～57年滞欧。56年高村光太郎賞、74年中原悌二郎賞大賞。70年日大芸術学部教授。96年文化功労者。2004年没、94歳。(出典 わ眼) **彫刻家、美術教**

柳 宗悦 (やなぎ・むねよし/1889～1961年)

東京生れ。学習院高等科時代に白樺の創刊参加。東大文学部で心理学を専攻。B.リーチに触発されてW.ブレイクを研究、神秘主義思想にも打ち込む。一方、李朝陶磁を知り、日本の朝鮮政策を批判、ソウルに朝鮮民族博物館を開設。日本の生活雑器に無名の工人の生み出す美を見だし、1926年浜田庄司、河井寛次郎らと「民芸」という言葉を創出、民芸運動を起こす。31年雑誌《工芸》を創刊、木食(もくじき)上人の彫刻や各地民窯の雑器、李朝陶磁の研究紹介。36年東京駒場に日本民芸館を設立し、館長。《柳宗悦全集》22巻(25冊)がある。思想家、民芸運動の創始者。東京で没、72歳。 **民芸運動家・美学者**

柳 幸典 (やなぎ・ゆきのり/1959年～)

福岡県生れ。1985年武蔵野美術大学大学院修了。米国のイェール大学留学を経て、90年《ザ・ワールド・フラッグ・アント・ファーム》シリーズによって国際舞台にデビュー。越境、ボーダーレスといった今日的な世界の状況を、蟻の巣作りによって崩れていく国旗

のイメージで鮮やかに表現したこのシリーズは高い評価を受け、海外を含め多くの美術館に収蔵。柳は、日本の作家には極めて珍しく、天皇制、国旗、日本国憲法第九条、戦争といった日本に固有の微妙な政治的、歴史的問題をテーマとして扱っている。《アント・ファーム》のシリーズ以降、《ヒノマル・イルミネーション》《ヒノマル・コンテナ》などのヒノマルシリーズを展開し、日本の現代美術家を代表する作家の一人としての位地を確かなものとした。 **現代美術家**

柳 亮 (やなぎ・りょう/1903～1978年)

名古屋市長生れ。1922年日本美術学校卒。25～32年渡仏し、パリ大学、ルーヴル美術館付属研究所ポール・ジャモ教室などにおいて西洋美術史を学ぶ。フランス滞在中、パリ日本美術家協会理事長をつとめ、海老原喜之助、児島善三郎らと親交。帰国後、彫刻など美術評論に転じ、美術理論研究会黎明会を起して新進作家の指導。『世界美術全史』著作を発表、かたわら桂離宮の研究を行った。39～44年日本大学芸術科美術部長。49年『近代絵画史—ドラクロアよりピカソまで』(美術出版社)を刊行。61～62年外務省文化使節として渡欧、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアの美術館及び大学で日本文化の紹介にあたり、帰国に際してローマ法王ヨハネス23世より金メダル。『黄金分割』(美術出版社)を刊行。66トキワ松学園女子短期大学創設に際し、造形美術科長主任教授、68年からは同学学長。71年紫綬褒章。77年勲四等旭日小綬賞。東京で没、75歳。(東文研) **美術評論家、トキワ松学園女子短期大学学長**

柳瀬俊雄 (やなせ・としお/1910～1977年)

大阪生れ。旧制五中卒業後、日本大学中退、文化学院を経て1930年本郷絵画研究所で岡田三郎助に師事、春台美術協会会員。33年帝展入選、46年光風会会員。51年日展特選・朝倉賞、52年光風会評議員、同審査員、日展委嘱。61年訪欧遊学、64年新日展菊華賞、日展会員、67年審査員。十柯会創立会員。東京で没、66歳。 **洋画家**

柳瀬正夢 (やなせ・まさむ/1900～1945年)

松山市生れ。1914年上京。日本水彩画会研究所に学ぶ。村山槐多から影響を受ける。未来派、キュビズム、構成主義に興味を抱き。未来派美術協会に入会。23年「MAVO」の結成に参加。ゲオルグ・グロスを研究。45年没、45歳。(出典 わ眼) **洋画家、デザイン、カラー、舞台美術家**

矢野彩仙 (やの・さいせん/1899～1969年)

鹿児島県生れ。若くして徳富蘇峰について国史と国文学を修め、歴史学者として知られ、著者には「日羅上人伝」や「芦北郡史」などがあり、また九州における古い石橋の研究者としてその数千枚の原稿も残っている。油絵については、鹿児島の洋画家大牟礼南涛氏について学び、特に肖像画が得意であった。1969年没、70歳。洋画家

矢野静明（やの・しずあき/1955 年～）

宮崎県生れ。1983年 和光大学人間関係学科卒。2001 年フリーマン・フェローシップでアメリカ、バーモント・スタジオ・センター滞在。04年「絵画以前の問いから―ファン・ゴッホー」。14年「矢野静明作品集」。16年「日本モダニズムの未帰還状態」。立教大学映像身体学科兼任講師。12・13・14年に連続展、ほか多数。89年「今日の作家展：多極の動態」横浜市民ギャラリー、07年「南九州の現代作家たち展」都城市立美術館。07年「ICANOF 展」八戸市美術館で展示・講演。09年モレキュラー『マウスト』公演のテキスト執筆及び講演。洋画家、水彩、美教

矢野文夫（やの・ふみお/1901～1995 年）

神奈川県生れ。早稲田大学文学部中退。詩集に「鴉片の夜」「硫黄」「伊吹」、訳詩にボードレール「悪の華」がある。邦画荘を主宰し、美術批評家としても活躍。1935年文学、美術、映画を対象とする雑誌「美術手帖」（美術手帖社）を主宰創刊。36年自ら経営する邦画社より「月刊邦画」「美術及美術人」を創刊。著書に「夜の歌―長谷川利行とその芸術」「ヴィーナスの神話」「東山魁夷―その人と芸術」などがある。川崎市で没、94歳。昭和期の詩人、美術評論家、日本画家

矢野 眞（やの・まこと/ 1932～2012 年）

福岡市生れ。県立修猷館高等学校卒。東京藝術大学を受験するも失敗、商業デザイナーとして活躍。NHK の人形劇『ひょっこりひょうたん島』のバックなどを描いた。仏画家として国際的に評価が高い。代表作に「千手観音と二十八部衆」「薬師如来と十二神将」。妻の渋沢道子と著書「絵で拝む日蓮聖人大曼荼羅」「千手観音と二十八部衆」共作。デザイナー、仏画

矢野美智子（やの・みちこ/生誕年不詳）

1981年2月、東京神田にオープンした画廊パレルゴンが、80年代アヴァンギャルドの牙城、80年代アヴァンギャルドと新表現主義の「B ニューイメージ」のグループに矢野美智子。1985年サンパウロ・ビエンナーレに出品作家に選抜、斎藤義重、横尾忠則、

矢野美智子、吉澤美香。コミショナーは東野芳明。2002年で開催。現代美術家、彫刻、ドローイング

矢橋公磨（やばし・きみまろ/1902～1964 年）

北海道生れ。1920年上京する。23年首都無選展に出品。24年「MAVO」に参加。詩と抽象的幾何学的作品を創る。26年第3期の「MAVO」を岡田達夫と計画した。戦後は組合書店をおこす。アナーキズム傾向の本を出版。64年没、62歳。洋画家

矢橋六郎（やばし・ろくろう/1905～1988 年）

岐阜県生れ。1930年東京美術学校西洋画科卒。梅原龍三郎に師事。32年国画会会友。36年山口薫、村井正誠らと自由美術協会を創立。50年村井正誠らとモダンアート協会創立。武蔵野美術大学、東京芸術大学で教鞭。69年岐阜県教育委員長。78年東京セントラル美術館で個展。大垣市で没、82歳。洋画家、美教

矢吹璋雲（やぶき・しょううん/1852～1927 年）

岡山県生れ。奥村石蘭に師事し四条派を学ぶ。1898年川端玉章の画塾・天真舎に入り円山派を学ぶ。1904年愛知県意匠図案調整所を経て、愛知県名古屋高等女学校、愛知常磐高等女学校の美術教師、先師、石蘭・玉章に倣い雑誌等に記事を著わした。1916年画塾、璋雲畫會を主催する。1927年没、75歳。日本画家、美教

戴野 健（やぶの・けん/1943 年～）

名古屋市長生れ。1969年早稲田大学大学院美術史科修了。70～71年スペインに留学。90年武蔵野美術大学造形学部映像学科教授。99年早稲田大学芸術学校空間映像科教授。2009年日本藝術院会員。11年早稲田大学會津八一記念博物館館長。15年府中市美術館館長。洋画家、美教、美術館長

ヤノベ ケンジ（やべの・けんじ/1965 年～）

大阪生れ。1989年京都市立芸術大学美術学部彫刻専攻卒。英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アートに短期留学。91年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。94年 3 年間ベルリンに活動拠点を置く。第一回キリンプラザ大阪コンテンポラリーアワード最優秀作品賞。92年水戸芸術館で個展。2003年国立国際美術館で、集大成的展覧会「メガロマニア」を開催。現代美術作家。京都造形芸術大学教授。同大学内のウルトラファクトリーのディレクターを務める。現代美術家、立体、美教

薮野正雄（やぶの・まさお/1907～1990 年）

福岡県生れ。1926年日本美術学校修了。29年二科展に入選し、以後正宗得三郎に師事。連年二科的に出品し、39年同展で特待、41年同会会友。40年紀元 2600 年奉祝展で入選、43年新文展に特選。42年新美術家協会会員。戦後は二科会再論に際し会員に推されるが同会には参加せず、47年第二紀会の創立に加わり、審査員。70、71年に渡欧。73年二紀会常任理事に就任。76年二紀展で三十周年記念大賞、85年黒田賞。また、85年日動サロンで「薮野正雄自選展」。名古屋市で没、83歳。洋画家

矢部友衛（やべ・ともえ/1892～1981 年）

新潟県生れ。1918年東京美術学校日本画科を卒業。18年渡米欧、19年パリへ渡り、アカデミー・ランソンでモーリス・ドニに学ぶ、22年帰国、二科展に出品。22年アクション結成に参加。24年三科造形美術協会を創立。27年造形美術家協会と改称。26年訪ソ。29年日本プロレタリア美術家同盟を結成。81年没、89歳。洋画家

矢部友衛 II（やべ・ともえ/1892～1981 年）

新潟県生れ。1918 年東京美術学校日本画科卒。渡欧米、アカデミー・ランソンでモーリス・ドニに師事。22年第 9 回二科展に初入選。中川紀元らとアクションをつくる。24 年三科造型美術協会の結成に参加。26～27 年モスクワを訪れる。27 年新ロシア美術展覧会を開催。29 年日本プロレタリア美術家同盟の結成に参加。46 年岡本唐貴らと現実会を創立。81 年 7 月 18 日没、享年 89 歳。（佐）洋画家

山内一生（やまうち・いっせい/1929年～）

愛知県生れ。1947年藤井達吉に師事、紙漉き。53年日展入選、65年新日展で特選、74年審査員、86年評議員、97年内閣総理大臣賞、2010年参与。79年日本新工芸展審査員。96年地域文化功労者文部大臣表彰。2007年旭日小綬賞受章。2012年、日工会展で内閣総理大臣賞受賞。工芸家、紙漉き

山内滋夫（やまうち・しげお/1947 年～）

大阪生れ。1966年里見勝蔵に師事。72～77年在仏、ベルナール・ロルジュに師事。1980年個展（横浜高島屋）同 '82 '84 '85 '88 '98年。83年個展（東京・もりもと画廊）同 '85 '87 '89 '91年。84年個展（大阪・たきい画廊）同 '86 '88 '90 '93 '96年。86年現代形象展出品（ストライプハウス美術館）同 '87年。88年俊洋展出品（日本橋三越）以後毎年。

92年弓手会展出品（横浜高島屋）以後毎年。96年個展（アートもりもと）。洋画家

山内重太郎（やまうち・じゅうたろう/1929～）

福岡市生れ。1950 年久野大正に師事。56年西南学院大学商学部商学専攻卒。56年家業の博多織製造・販売に従事。57年九州派に参加。58年九州派3人展 山内重太郎・オチオサム・桜井孝身 トキワ画廊。60年パリに遊学 約 2 年間。67年九州・現代美術の動向展 福岡市民会館。76年多元的抽象展 福岡県文化会館。81年環玄海展（福岡市）結成、83年環抽象絵画協会と改称、86年まで代表。87年福岡アジア美術協会会長。88年九州派展一反芸術プロジェクト（福岡市美術館）。洋画家、九州派

山内壮夫（やまうち・たけお/1907～1975 年）

札幌市生れ。1929年東京高等工芸学校彫刻科卒、30年同校研究科修了。32年国画奨学賞、33年会友、37年会員。39年国画会彫刻部同人全員と共に脱会して新制作派協会彫刻部設立に際し創立会員。新制作協会運営委員長。中原悌二郎賞選考委員、建築美術工業会評議員。49年北海道夕張市の労働会館に具象的なテラコッタ作品を設置。平和の母子像（長崎国際文化会館中庭）、産業祈念像（宇部市）、意志と思索（栃木文化会館ピロティ）、家族（アルミニウム・1958年新潟市庁舎）、本庄陸男文学碑（当別市）、新潟港震災復興記念碑（新潟市）、ソノミの慟哭（作者蔵）、子を守る母たち（箱根彫刻の森美術館）。東京で没、67歳。彫刻家

山内龍雄（やまうち・たつお/1950～2013 年）

北海道生れ。1971年油彩を始める。86年札幌で個展。88年銀座で個展。94～96年東京・表参道で個展。2002年神戸で個展。03年東京・神田で展。07年オーストリア・ウィーンで個展。08年オーストリア・グラーツで個展。芸術家協会（独・インゴルスタット）で個展。16年山内龍雄芸術館開館。洋画家

山内多門（やまうち・たもん/1878～1932 年）

宮崎県生れ。川合玉堂。橋本雅邦に学ぶ。狩野派の影響を受けた山水画を得意とし、帝展審査員、若葉会会頭。作品に「日光山の四季」「金剛五題」など。1932年没、55歳。日本画家

山内秀臣（やまうち・ひでおみ/1930～2016 年）

神戸市生れ。1956年東京藝術大学油画科卒。56～67年黒土会グループ展に出品。61年文藝春秋画

廊にて個展。以降62年新制作展に出品。2016年没、86歳。洋画家

山岡山泉（やまおか・さんせん/1871～1943 年）

奈良県生れ。京都第三高等学校を中退。明治40年代から久原鉱業株式会社に勤務。会計経理の担当役員を勤めるも1916年に退職。焼き物を手がけ、またその絵付けの為に絵画を習い始めた。河井寛次郎との交流は、この頃にはじまる。絵画に比重を移した山泉は、専ら古画の模写を行うようになる。特に雪舟には深く傾倒したことが知られる。なかでも原本に直接あたった雪舟の代表作のひとつ「四季山水図巻（山水長巻）」の模写は10点を数え、このうち4点が現存。1943年没、72歳。水墨画家

山尾薫明（やまお・くんめい/1903～1999 年）

高松市生れ。1927年東京美術学校卒。二科展出品、特選、二科会員、二科会員努力賞。渡欧。戦前インドネシア、ニューギニアで5年活動。二科展で総理大臣賞、同会理事。戦後中近東にオリエント美術研究。1968年東郷青児賞。「二科70年史」編集委員長。99年没、96歳。洋画家

山尾 才（やまお・さい/1947年～ ）

三重県生れ。1970年東京芸術大学油画科卒、小磯良平に師事74～75年スペイン留学。渡欧4回。無所属。個展6回、グループ展4回。洋画家

山縣 章（やまがた・あきら/1917～1994 年）

宮崎県生れ。山倉克己に師事。創元展と日本水彩画展に出品。1984年水彩連盟に初入選。91年創元展準会員賞。93年創元展会員新人賞。94年創元展文部大臣奨励賞。94年没、77歳。（出典 わ眼）水彩画

山形駒太郎（やまがた・こまろう/1886～1978 年）

白馬会11回-13回展出品・光風会名誉会員。1978年没、94歳。洋画家、染色家、蠟染

山上嘉吉（やまかみ・かきち/1901～1991 年）

京都市生れ。関西美術院で絵画を学ぶ。1923年上京、築地小劇場の舞台装置助手。24年三科造型美術協会出品。26年三科を離れた矢部らの「造型」に参加。28年プロレタリア美術家同盟出品。46年「現実会」を結成。55年「点々会」を結成。千葉県柏市に住み、91年没、90歳。（出典 わコレ）洋画家

山川 清（やまかわ・きよし/1903～1969 年）

大阪生れ。画業を志し赤松麟作に師事、上京、川端画学校で洋画を学ぶ。1928～34年渡欧。パリで制作。34年春陽会に出品。36年新興美術協会会員。48年春陽会会員。大阪で没、66歳。多趣味な随筆家としても活躍。洋画家

山川秀峰（やまかわ・しゅうほう/～1944 年）

京都生れ。鏑木清方・池上秀畝に師事した。1928年帝展特選となり、30年帝展で特選、31年無鑑査。第13回展の「序の舞」、二千六百年奉祝展の「信濃路の女」等の優品がある。また青衿会を伊東深水と共に催し、美人画の開拓に努めていた。1944年没、47歳。日本画家、浮世絵師

山川 武（やまかわたけし/1926～2004 年）

神戸市生れ。1953年東京芸術大学美術学部芸術学科卒、同学部専攻科退学。59年東京芸術大学美術学部助手、60年同大学同学部附属奈良研究室に事務主任事務取扱として赴任し、63年同研究室講師となる。67年同大学美術学部芸術学科講師、69年同大学美術学部助教授、78年同大学同学部教授。93年東京芸術大学芸術資料館において「退官記念山川武教授が選ぶ近世絵画」展を開催。94年女子美術大学教授、東京芸術大学名誉教授。2003年『山川武写真集』（私家版）を刊行。研究歴の初めにあげられる業績は、『国華』誌上で特集された長沢蘆雪に関する研究である。「奇想」と目されることとなった画家群をも網羅するその後の絵画史研究に刺激を与えた。円山応挙、呉春等を中心とする近世写生画の研究、さらに光悦、宗達、光琳、抱一等の琳派研究へと展開。田能村竹田、与謝蕪村、浦上玉堂等の南画研究、宋紫石の長崎派、さらに西郷孤月、長井雲坪、狩野芳崖、高橋由一にいたる幕末明治期の画家研究に領域をひろげた。美術史研究の基本である誠実に「見る」ことを通していた点は、趣味でもあった写真にも生かされ、2004年没、77歳。美術史研究者、美教

山川瀧野（やまかわ・たきの/1882年～没年不詳）

1882年生れ。聖護院洋画研究所、関西美術院で浅井忠に師事。1923年二科展に出品。水彩画家

山川輝夫（やまかわ・てるお/1940～1992 年）

東京生れ。1964年東京芸術大学油画科卒、大橋賞。66年同大学大学院修了。69～74年女子美術短期大学非常勤講師。81年東京芸術大学助教授。86～87年文部省在外研究員、イギリスで研修。92年みゆき画廊で個展。東京で没、51歳。92年東京芸術大学芸術資料館で遺作展。洋画家、美教

山川勇一郎（やまかわ・ゆういちろう/1909～1965 年）

神戸市生れ。1934年東京美術学校西洋画科卒。一水会に出品、47年一水会会員。59年会員優秀賞。43年北京で安井曾太郎に接し、師事。安井曾太郎門下生による連袖会に参加。58年深田久弥らと「ジュガール・ヒマール探査隊」を組織、ヒマラヤ地方に旅行し、64年チリ、サンチャゴに滞在し、ボリビア、ペルー、アルゼンチンなどを旅行、65年大阪府岳友クラブ中央アンデス登山隊に同行し、遭難。日本山岳画協会会員。チリで没、56歳。洋画家

山岸主計（やまぎし・かずえ/1891～1984 年）

長野県生れ。15歳(1905年)ころ上京、木版彫刻師武藤秀吉に師事。読売新聞社に勤め、鏑木清方、竹久夢二の挿絵を彫る。黒田清輝率いる葵橋洋画研究所で美術を学ぶ。独立後、30代中盤より欧州取材。版画集「世界百景」その後、「日本百景」を完成。1984年没、92歳。洋画家、版画

山岸主計 II（やまぎし・かずえ/1891～1984 年）

1891 年、長野県伊那生れ。1906 年上京、木版彫刻師武藤秀吉に師事。1913 年、読売新聞社に勤務、鏑木清方、竹久夢二らの挿絵を彫る。1916 年独立、葵橋洋画研究所で洋画を学ぶ。1920 年より「大近松全集」付録絵木版を彫る。1926～29 年渡米欧。1939～43 年従軍画家。1947 年より神奈川県藤沢市に居住。1983 年、故郷の伊那市に移住。1984 年、同地で没92 歳。(F)洋画家、版画

山岸 純（やまぎし・じゅん/1930～2000 年）

京都生れ。53年京都市立美術大学日本画科卒、55年同校専攻科修了、徳岡神泉に師事。56、57年京展で京都市長賞。61、65年新日展で特選・白寿賞を受賞。66年菊華賞。69年日展会員、75年改組日展文部大臣賞、92年日本芸術院賞、2000年日展常務理事。75年京都市立芸術大学教授。99年日本芸術院会員。京都で没、70歳。日本画家

山岸信郎（やまぎし・のぶお/1929～2008 年）

仙台市生れ。1947年仙台工業専門学校から東北大学工学部へ転学。51年東北大学を中退し、59年学習院大学文学部仏文科卒、同大人文科学研究科哲学専攻・修士博士前期課程、64年まで在籍、富永惣一に学ぶ。『三彩』誌で展評などを執筆。新制作協会の事務局、オフミュージアム的な展覧会の企画・運営に数多くあたり、90年代後半からの韓国との交流展をはじめ、草の根的な美術活動を行った。ミニコミ

美術誌『あいだ』の追悼記事 23 本画廊に残された資料は、2010 年国立新美術館アートライブラリーに収蔵された。62年五番館画廊、秋山画廊勤務、田村画廊を開廊、真木画廊を開設。79～85年駒井画廊を運営。山形市に画廊大理石、82年ギャラリールミエール・ルミエール画廊の運営。東京で没、79歳。画廊主

山喜多二郎太（やまきた・じろうた/1897～1965 年）

福岡県生れ。1915年東京美術学校に入学。藤島武二に師事。18年寺崎広業に師事。20年帝展入選。34年帝展で特選。25年から光風会入選、34年光風会会員、58年理事。日展評議員。洋画に水墨画の手法を取り入れ、独特な画風。65年没、68歳。洋画家

山際 靖（やまぎわ・やすし/1901～1952 年）

東京生れ。第一高等学校を経て東京帝国大学文学部に入学して美学を専攻、1925年卒、のち同大学大学院に在学。28年東洋大学教授。30～37年母校美学研究室の副手を勤めた。44年東京帝室博物館に嘱託、47年国立博物館文部技官に任ぜられ、48年同調査員。日本大学教授、和洋女子専門学校、日本女子専門学校、東京女子高等師範学校、明治大学、日本女子大学などに美学を講じた。その著書に「新講美学概論」「芸術通論」「美学」「芸術」「きものの話」「趣味の美学」。1952年没、51歳。美学者、美教、東京博物館調査員

山口和男（やまぐち・かずお/1950 年～ ）

神奈川県生れ。1972～79年お茶の水美術学園にてデッサンと油彩画を学ぶ。74年中央大学商学部卒。86年日洋展奨励賞。97年中日現代美術通鑑(中国国際名人研究院辞書編集部編)に作品掲載。2000年世界学術貢献奨励作品金質奨励入賞、世界文化名人成果金象奨励入賞。02年国際芸術産業展 THE AIR GALLERY LONDON。03年グローバル国際芸術貢献賞金賞、世界芸苑精鋭卓越成果賞。06年グローバル国際芸術貢献賞金鼎賞、世界芸苑精鋭卓越成果賞。洋画家、版画

山口 薫（やまぐち・かおる/1907～1968 年）

群馬県生れ。1930年東京美術学校西洋画科卒。29年「一九三〇年協会」展、国展に出品。30～33年渡欧。37年自由美術家協会創立会員。50年モダンアート協会創立会員。60年芸術選奨文部大臣受賞。64年東京芸術大学教授。67年銀座・松屋で回顧展開催。東京で没、60歳。洋画家、美教

山口主計 (やまぐち・かずえ/1893～1984 年)

長野県生れ。1916年葵橋洋画研究所に学ぶ。18年太平洋展に入選。木版摺師として26～29年米、欧各地で版画指導。31年日本版画協会会員。33年銀座・三越で個展。84年没、92歳。版画家

山口勝弘 (やまぐち・かつひろ/1928～2018 年)

東京生れ。1951年日本大学法学部卒、北代省三、武満徹らと「実験工房」を結成。77～92年筑波大学芸術学系教授。92～99年神戸芸術工科大学視覚情報デザイン学科教授。2000～02年環境芸術学会会長。01年「毎日芸術賞」、03年「文化庁メディア芸術祭功労賞」、13年「2013 年度環境芸術学会賞功労賞」。2018年没、90歳。前衛作家、造形作家、メディアアート作家

山口華楊 (やまぐち・かよう/1899～1984 年)

京都生れ。1912年、尋常小学校卒業卒、日本画家の西村五雲に師事。16年京都市立絵画専門学校別科に入学、同年文展入選。19年同校卒業後、五雲のすすめで竹内栖鳳塾の竹杖会に参加。27、28年帝展特選。38年五雲の死後、画塾を晨鳥社として継承。42～49年京都市絵画専門学校教授。56年日本芸術院賞。71年日本芸術院会員。80年文化功労者、81年文化勲章。円山四条派の写実の画風を受け継ぎつつ、独自の生命感あふれる動物画の境地を開いた。京都市で没。京都で没、85歳。日本画家、美教

山口啓介 (やまぐち・けいすけ/1962 年～)

西宮市生れ。1985年武蔵野美術大学卒。89年から方舟や宇宙船をモチーフにした大型銅版画を発表。数々の賞を受け注目。92～93年NYとフィラデルフィアに滞在、95～97年デュッセルドルフ滞在。第20回現代日本美術展金賞、大阪版画トリエンナーレ1991 銀賞。絵画、立体、インスタレーション取り組みながら、今日的で根源的な生のあり方を思索する。97年に発案した植物をカセットテープのケースに閉じ込める《カセットプラント》も継続中。2009～13年武蔵野美術大学客員教授。15年いわき市美術館で個展。版画家、美教

山口健智 (やまぐち・けんち/1921～1982 年)

旭川市生れ。1938年大阪にいる兄の山口正城のもとに滞在。中之島洋画研究所に学ぶ。39年京都に移住。独立美術研究所に入所。兄の影響で抽象画を制作。41年美術創作協会展に出品、入選。55年渡仏。以後パリで制作。パリで没。61歳。洋画家

山口 源 (やまぐち・げん/1896～1976 年)

静岡県生れ。1923年恩地孝四郎に師事。28年日本創作版画協会に初入選。39年一水会創立に参加。41年国展に出品、49年同会会員。57年リュブリアナ国際版画ビエンナーレで優秀賞。58年ルガノ国際版画ビエンナーレでグランプリ。沼津市で没、79歳。77年山口源版画保存協会が設立、後に「山口源の会」と改称された。83年沼津市は「山口源賞」を制定し、「山口源大賞」(隔年1名)と「山口源新人賞」(毎年2名)を選定。98年静岡県立美術館で「生誕100 年山口源回顧展」が開催。版画家

山口将吉郎 (やまぐち・しょうきちろう/1896～1972 年)

山形県生れ。1920年東京美術学校日本画科卒。結城素明に師事。23年教育絵画展覧会に出品。44年野間挿絵奨励賞。同人誌などで挿絵を発表する。その後は、主に小説本などの挿絵を描き、その中でも『神州天馬俠』吉川英治(著)の挿絵は有名。1972年没、76歳。日本画家、挿絵画家

山口 進 (やまぐち・すすむ/1897～1983 年)

長野県生れ、1916年長野中学校卒。20～26年葵橋洋画研究所に学ぶ。油彩画が帝展入選。日本美術学校中退。23年日本創作版画展、日本漫画展に入選。25年旧制第一高等学校訓務部事務職員、一高画会で絵を教える。28年春陽会展に出品、入選。29年日本創作版画協会会員。31年同会が日本版画協会となり会員。戦後は郷里の長野県にかえり、自然と山をテーマに制作した。代表作は「木曾駒ヶ岳馬の背」。長野で没、1986歳。版画家、洋画家、美教

山口泰二 (やまぐち・たいじ/1939 年～)

前橋市生れ。新聞記者を経て美術運動史研究会を主宰。「変動期の画家」、「アメリカ美術と国吉康雄・開拓者の軌跡」、「中谷泰画集」。記者、美術評論、近代美術史

山口長男 (やまぐち・たけお/1902～1983 年)

ソウル生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒。27～31年渡仏。38年九室会結成。45年二科会会員。54～74年武蔵野美術学校/大学教授。武蔵野美術学園長を務める。62年芸術選奨文部大臣賞を受賞。東京で没、80歳。(出典 わ眼)洋画家、美教

山口猛彦 (やまぐち・たけひこ/1903～1979 年)

佐賀県生れ。川端画学校で学び、1928年東京美術学校西洋画科卒。33年帝展入選。33年光風会に出品、同年会友、40年光風会会員。74光風会展で

光風特賞。76年日展で特選。88年日展会員。86～87年渡欧。70年資生堂ギャラリーで個展。東京で没、76歳。洋画家

山口辰吉（やまぐち・たつきち/1868～1933 年）

栃木県生れ。平福穂庵に師事。1903年沖縄師範学校に赴任し、沖縄の美術教育に携わった。美術団体・沖縄絵画同好会を結社し、丹青協会の設立に尽力し、会長。丹青協会は沖縄師範学校へ赴任した東京美術学校卒業の西銘生楽を中心として活動。作品に「沖縄人物風俗図」がある。1933年没、65歳。日本画家、美教

山口敏男（やまぐち・としお/1902～1941 年）

埼玉県生れ。埼玉県師範学校卒。白日会会員の大久保喜一の指導を受けた。水彩画の制作を続け、寄居小学校、男衾小学校、花園小学校で教壇に立ちながら、日本水彩画会展、白日会展に毎年出品。生涯で1500点以上の作品を描いた。33年中西利雄に師事。36年日本水彩画会展で受賞、白日会会友に推挙。古川弘、武者小路実篤との交友。紀元2600年奉祝展に一水会所属として傑作「竹林静閑」を発表。1941年没、40歳。（田村）美教、水彩画家

山口八九子（やまぐち・はちくし/1890～1933 年）

京都生れ。京都市立絵画専門学校卒。1921年帝展入選。以後も同展で活躍。日本南画院にも第1回展より出品、23年同人。24年京都鞍馬寺本堂襖に「牡丹」をえがく。1933年没、44歳。日本画家

山口牧生（やまぐち・まきお/1927～2001 年）

広島県生れ。1950年京都大学美学科卒、定時制高校教諭を務めながら、大阪市立美術研究所で彫刻を学ぶ。53年以降、自由美術展、行動美術展、集団現代彫刻展などに出品。72年ブルーメール賞。神戸市須磨の現代彫刻展では74年京都国立近代美術館賞、76年神奈川県立近代美術館賞、78年大賞。また山口県宇部の現代日本彫刻展でも、1975(昭和50)年神奈川近美賞、1979(昭和54)年北九州市立美術館賞。2001年没、74歳。彫刻家

山口桃子（やまぐち・みつこ/1943～2010 年）

東京生れ。1965年早稲田大学教育学部卒。喫茶店を経営、日本ジュウリーデザイナー協会(現、日本ジュエリーデザイナー協会)準会員。80年銀座ヤマトビル3階に現代美術を専門とする貸画廊兼企画画廊「ギャラリー山口」を開設。91～93年SOKO ギャラリーに入居、ギャラリー山口 SOKO を開設し運営。ベ

テランから無名の新人まで美術家の発表の場であり、建畠覚造、野見山暁治、篠原有司男、堀浩哉らの個展を数多く開催。また CONTINUUM ‘83年オーストラリア現代美術展、パリ-東京現代美術交流展(84年)、ベルリン-東京交流展(88年)など海外画廊との交換展にも、日本の代表的な現代美術画廊として参加。2010年没、67歳。ギャラリー山口オーナー

山口博一（やまぐち・ひろかず/1940 年～）

名古屋市長生れ。1965年東京芸術大学美術学部工芸科グラフィックデザイン教室卒。67年東京芸術大学大学院卒。愛知県立芸術大学デザイン専攻助手。66年日本版画協会展出品入選、以後現在まで毎年出品、71年日本版画協会新人賞、のち日本版画協会会員。73年愛知県在外研修員として訪欧、訪米研修。78、80年クラコウ国際版画ビエンナーレ展(ポーランド)出品。愛知県立芸術大学非常勤講師。版画家

山口蓬春（やまぐち・ほうしゅん/1893～1971 年）

北海道生れ。1914年東京美術学校西洋画科に入学。在学中に二科展に2度入選、18年日本画科に転科。23年同科を首席で卒業。24年帝展に初入選し、以後、帝展、新文展、日展と官展を舞台に活躍。50年日本芸術院会員、65年文化勲章、文化功労者。日本画家

山口マオ（やまぐち・まお/1958 年～）

千葉県生れ。1984年東京造形大学絵画科卒。87年ザ・チョイス年度賞入賞。88年、MAOグッズ制作開始、キャラクター「マオ猫」。全国カレンダー展通産省生活局長賞受賞。94年ニューヨークADC賞・TDC賞入賞。ロンドン国際広告賞など受賞。96年全国カレンダー展印刷新聞社賞受賞。絵本作家、イラスト、版画

山口正城（やまぐち・まさき/1903～1959 年）

旭川市生れ。東京高等工芸学校図案科入学。1926年大阪市立工芸学校に勤務。37年自由美術展にフォトグラムを出品。39年自由美術協会賞、40年自由美術協会会員。52年千葉大学工学部意匠学科教授。59年日本抽象作家協会を設立。59年没、56歳。洋画家、フォトグラム、美教

山口亮一（やまぐち・りょういち/1880～1967 年）

佐賀県生れ。1903年早稲田中学卒。白馬会洋画研究所に通う。10年第4回文展に初入選。第13回白馬会展に出品。11年東京美術学校西洋画科本科卒。13年第7回文展に出品。久米桂一郎、岡田三郎助らと佐賀美術協を創設。14年第8回文展に出品。20年第

2 回帝展出品作が宮内省買上げ。21 年～43 年まで佐賀県師範学校に勤務。37 年第 1 回新文展から無鑑査出品。62 年佐賀県文化功労者。66 年勲四等瑞宝章。67 年 10 月 31 日没、享年 87 歳。(佐) **洋画家、美教**

山倉克己 (やまくら・かつみ/1929 年～)

千葉県生れ。現在まで多古町に在住。小堀進に師事、1958 年白日展白日賞。73 年日展特選。74 年文化庁現代美術選抜展。日展無鑑査。87 年白日展古川賞。現在日展会友、白日会委員、水彩連盟会員。現場制作に徹する。 **洋画家、水彩**

山崎・ヴィンセンシオ (やまざき・う“いんせんしお/1911～1980 年)

東京生れ。山崎正雄。1931～34 年第 1～4 回独立展入選。川島理一郎に師事。41 年九州文化連盟参加。戦後米軍専属のちサレジオ会専属画家。57 年ヴァチカン居住。70 年帰国し豊島区居住。度々渡欧し内外個展。東京で没、69 歳。(出典 わ眼) **洋画家**

山崎栄治 (やまざき・えいじ/1905～1991 年)

佐賀県生れ。1929 年東京外国語学校仏語部卒。1950 年横浜国立大学講師、フランス語を担当、65 年教授。63 年詩集「聚落」により高村光太郎賞。71 年横浜国立大学を定年退職。1976 年銀座みゆき画廊で「同時代」展。1980 年 Galerie412 で「冬の詩人」展。91 年没、86 歳。 **洋画家、詩人、美教**

山崎省三 (やまざき・しょうぞう/1896～1945 年)

神奈川県生れ。日本美術院研究所に学ぶ。1916 年院展初入選。村山槐多と交友。22～35 年春陽会客員(創立会員)として参加。29～30 年渡欧。37 年新文展に出品。山本鼎らと農民美術運動を進めた。ハノイで没、49、50 歳。75 年北海道立近代美術館で回顧展。 **洋画家**

山崎省三 II (やまざき・しょうぞう/1896～1945 年)

横須賀市生れ。北海道小樽稲穂小学校卒。1915 年頃、上京、日本美術院研究所に学ぶ。16 年院展に初入選、村山槐多と交遊。18 年院展で奨励賞。22 年～35 年春陽会に客員出品。24 年一面素描展に出品。37 年第 1 回新文展に無鑑査出品、以後、6 回展まで連続出品。39 年～44 年資生堂ギャラリーの催青会展に出品。40 年紀元二千六百年奉祝展に出品。44 年戦時特別展に出品。45 年 6 月 7 日、ハノイで没、享年 49 歳。(佐) **洋画家**

山崎隆夫 (やまざき・たかお/1905～1991 年)

大阪生れ。1930 年神戸大学経済学部卒。三和銀行に勤務。小出檣重、林重義に洋画を学ぶ。32 年独立展入選。38、39 年国画会展で国画奨学賞、40 年同人。38 年新文展入選。戦後は国画会展を中心に発表。神奈川県で没、85 歳。 **洋画家**

山崎隆夫 (やまざき・たかお/1940 年～)

新潟市生れ。1965 年日展入選。67 年京都学芸大学特修美術日本画科卒。70 年下保昭に師事。72 年日展特選。73 年日展特選。81 年日展会員。92 年日展 日展会員賞。2008 年日展 内閣総理大臣賞。11 年日本芸術院賞・恩賜賞受賞。12 年日本芸術院会員。13 年新潟日報文化賞。日本芸術院会員、日展理事、京都市立芸術大学名誉教授。 **日本画家、美教**

山崎 隆 (やまざき・たかし/1916～2004 年)

京都生れ。1933 年京都市立絵画専門学校入学、案本一洋に師事。在学中に田口壮や西垣壽一らと新日本画研究会結成に参加。36 年京都市立絵画専門学校を卒業し、同校研究科入学。39 年新日本画研究会から派生した歷程美術協会の第 1 回試作展に新会友として出品。40 年同協会会員、42 年の第 8 回展まで出品。41 年京都市立絵画専門学校研究科卒。京都市立絵画専門学校の後輩三上誠と歷程美術協会の再建を期し、48 年三上、星野真吾、不動茂弥、八木一夫らとともにパンリアルを、翌年日本画家だけでパンリアル美術協会を結成した。同協会では樹幹、亀甲、岩山などのモチーフを通して東洋の神秘思想を掬う作品を発表、また歷程時代に修得した、ホルマリンを用いてより自由に日本画材を扱う手法をパンリアル仲間伝えるなど、戦前における前衛的日本画との橋渡しの役割も果たした。57 年京都美術懇話会に入会、翌年パンリアル美術協会を離れ、以後無所属で活動続けた。戦中戦後の前衛的な画業については、88 年の山口県立美術館「日本画・昭和の熱き鼓動」展、94 年 O 美術館「日本画の抽象—その日本の特質」展、99 年の京都国立近代美術館「日本の前衛—Art into Life 1900-1940」展等の企画により改めて脚光を浴びることとなった。京都で没、88 歳。 **日本画家、パンリアル**

山崎武郎 (やまざき・たけお/1902～1946 年)

長野県生れ。県立熊本工業学校建築科卒。1920 年清水組入社、病気で退社。横井弘三を知る。二科展、中央美術展入選。岸田劉生、梅原龍三郎に師事。国画会展に出品。1946 年没、44 歳。 **洋画家**

山崎近道（やまざき・ちかみち/1904～1985年）

鹿児島県生れ。1924年渡米。カリフォルニア美術学校に学ぶ、NYのアート・ステューデント・リーグに学ぶ。31～32年野田英夫、鈴木英男らとウッドストックで共同生活。CA. のオレンジカウンティに住み、木版画制作。1985年没、81歳。版画家

山崎朝雲（やまざき・ちようん/1867～1954年）

博多生れ。仏師の高田又四郎に学ぶ。1895年内国勧業博覧会に「養老孝子」を出品して妙技3等賞。96年高村光雲に「養老孝子」がみとめられて入門。1907年米原雲海らと日本彫刻会を結成。1910年文展審査員、19帝展審査員、27年帝国美術院会員、34年帝室技芸員。52年文化功労者。東京で没、87歳。彫刻家

山崎つる子（やまざき・つるこ/1925年～）

芦屋市生れ。甲南高等女学校を経て、1948年小林聖心女子学院卒。46年芦屋市の美術講習会で吉原治良に出会い、指導を受ける。54年具体美術協会の結成に参加。72年の解散まで同協会に在籍。75年「アーティスト・ユニオン」に参加。ストライプを基調としたカラフルな抽象画や、ブリキや透明な支持体を使用した作品、野外具体美術展(1956年)で展示した観客が中に入れる形状の『赤』などが知られる。2004年 - リフレクション 山崎つる子（於・芦屋市立美術博物館）。07年 - 移転開廊記念展 山崎つる子-具体から現代-（於・LADS GALLERY）。08年 - Rose is a Rose is a Rose 草間彌生・田中敦子・山崎つる子三人展（於・ベルギー、2009年まで）。開催。洋画家、具体、立体

山崎哲一郎（やまさき・てついちろう/1945年～）

大分市生れ。大分大学在学中二紀展に入選。卒業後は中学校教諭をしながら二紀展、大分県美術展に出品を続け、受賞を重ねた。青木繁記念絵画大賞展で奨励賞、英展で佳作賞、別府現代絵画展で準大賞、西日本美術展では大賞。上野の森美術館大賞展にも入選。1997年文化庁の派遣によりイギリスに留学。現在、二紀会会員。洋画家、美術教育

山崎直秀（やまざき・なおひで/1955年～）

熊本県生れ。1977年九州産業大学芸術学部デザイン科卒、同校大学院芸術研究科修了。80年「日本国際美術展」（以後断続的に参加）、85年「現代日本美術展」（以後断続的に出品）、88年「第7回日本版画コンクール」で優秀賞。「クラコウ国際版画ビエンナーレ」（ポーランド）、「リュブリアナ国際版画ビエンナ

ーレ」（スロヴェニア）、「ノルウェー国際版画トリエンナーレ」に出品。2013年「福岡現代美術クロニクル」展出品。和歌山大学教育学部教授。版画家

山崎秀夫（やまざき・ひでお/1924～1983年）

横浜市生れ。横浜工業高等学校卒。1953年ハマ展でデビュー、56年横浜美術協会会員、75～79年同会会長。1967年春陽会展で春陽会賞。76年春陽会会員。1983年没、59歳。洋画家

山崎 宏（やまざき・ひろし/1953年～）

東京生れ。1990年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、92～2000年非常勤助手。ニューペインティングに影響を受け、原始的な生命力に裏付けられた作風で80年代後半から注目され、新しい日本画界の旗手の一人として活躍する。近作では更にミニマル的な志向へと作風が変化しながら、一度筆で描いた画面を短冊状に切り離し、再度画面を構成する表現を展開している。88年神奈川美術展で準大賞。93年の「現代絵画の一断面—『日本画』を越えて」展。日本画家

山崎福之助（やまざき・ふくのすけ/1889～1916年）

京都市生れ。1910年頃関西美術院に入り鹿子木孟郎に師事、洋画を学ぶ。13年関西美術会競技会で宮内庁買上げ。13、14、16年関西美術会競技会で褒状。15、16年二科展に入選。16年没、27歳。洋画家

山沢栄子（やまざわ・えいこ/1899～1995年）

大阪生れ、東京の女子美術学校日本画科卒。油絵と写真を独学した後、1926年単身渡米。サンフランシスコのカリフォルニア・スクール・オブ・ファインアーツで油絵を学ぶ一方、アメリカ人写真家コンスエロ・カナガの助手となり、写真技術を習得。1929年に帰国し、31年から大阪堂島ビルで写真スタジオを開設。戦後は商業写真家として再出発、カナガに招かれて55年に米国を再訪した後、抽象的な写真作品の制作。68年「私の現代」と題した個展を多数開催し「アブストラクト写真」を精力的に発表。1995年没、96歳。写真家

山路 商（やまじ・しょう/1903～1944年）

長岡市生れ。大連で洋画研究所に通う。1920年に広島に移住。23年「ダダイスト山路商宣言」戦後の広島に於ける芸術運動を主導した。28年二科展入選。30年全関西展で朝日賞受賞。38年広島フォルム美術協会を創立。44年没、41歳。洋画家

山路真護 (やまじ・しんご/1900～1969 年)

埼玉県生れ。京都絵画専門学校中退し、1929年第一美術展入選、30～32年パリに留学し、アカデミー・ジュリアンに学び、サロン・ドートンヌに出品入選。32～55年二科展に出品、43年会友、48年会員。55年野間仁根、鈴木信太郎らと二科会脱退、一陽会設立、会員。66年以降毎年日動サロンで個展開催。1969年没、69歳。洋画家

山下兼秀 (やました・かねひで/1882～1939 年)

鹿児島市生れ。東京美術学校西洋画科に入学。黒田清輝に重用され、白馬会研究所の後継者。1910年文展入選し、スペイン大使館の買い上げ。帰郷、山形屋宣伝課長として勤務。14年の桜島大噴火の際には、多くの作品を描いた。金羊会を結成し、南国美術展の創設にも尽力。鹿児島洋画壇の中心的存在。1939年没、57歳。洋画家

山下菊二 (やました・きくじ/1919～1986 年)

徳島県生れ。洋画家。38年上京、福沢一郎の絵画研究所に入所。44年美術文化賞。召集で中国戦線に派兵。その記憶が心に深く刻まれる。加害者として反戦に拘った。シュルレアリスムの影響を受ける。46年日本美術会の結成に参加。前衛美術会に参加。70年東京造形大学非常勤講師。74年从会結成。1986年没、67歳。96年神奈川県立近代美術館で個展。(出典 わ眼) 洋画家、教、ルポルタージュ作家

山下菊二 II (やました・きくじ/1919～1986 年)

徳島県生れ。1937年香川県立工芸学校金属工芸科卒。38年福沢一郎絵画研究所に入る。44年美術文化協会展で美術文化賞。47年美術文化協会会員。46～62年日本美術会の結成に参加。70東京造形大学非常勤講師。74～83年中村正義らと从会結成。86年没、67歳。96年神奈川県立近代美術館で個展。洋画家、美教

山下 清 (やました・きよし/1922～1971 年)

1922年生れ。市川市の八幡学園に入園。ちぎり絵による点描風貼り絵を学ぶ。39年式場隆三郎に認められる。39年展覧会開催。40年から放浪生活。55年画集刊行。71年没、49歳。(出典 わ眼) ちぎり紙細工、ペン画

山下清澄 (やました・きよすみ/1941 年～)

千葉県生れ。1963年文化学院美術科卒。68年渡独、銅版画を学ぶ。73年版画集『私窩子』(寺山修

司:散文詩)刊行、74～75年パリ滞在、76年版画集『シメール』刊行、版画集『奴婢訓』(寺山修司:散文詩)刊行 76～78年ミラノ、ローマ滞在、制作、ローマ・アカデミアで学ぶ 84年詩画集『冬の組曲—シルヴィアのために』刊行 85年画集『山下清澄 ノスタルジア』(美術出版社)刊行 88年版画集『ゾーディアック』刊行 90年版画集『アルファベットの人体装飾文字』刊行。版画家

山下繁雄 (やました・しげお/1883～1958 年)

東京生れ。不同舎で小山正太郎に師事。太平洋画会研究所に学ぶ。1907年東京勸業博覧会に入選、褒状。1908、15年文展に入選。18年精芸社を創立。32年帝展で特選、昭和洋画奨励賞。33年帝展で特選。51年奈良県文化功労者。56年高島屋「軍鶏100態」展。奈良市で没、75歳。洋画家

山下品蔵 (やました・しなぞう?/生没年不詳)

大正、昭和期に国画会で活躍、1926年国画会展でブロックス賞、28年奨学賞。29年会友推薦、34年会員推薦。36年文部省美術展招待展の被招待者。山の風景画、静物を描いた。安曇野風景。慶應義塾中等部で教えた。慶應義塾大学収蔵。現代洋画大全集2(アトリエ社)に掲載。日本山岳画協会会員。(田村) 洋画家

山下純司 (やました・じゅんじ/1940年～)

長崎市生れ。1966年渡欧、スペイン、67年パリへ渡る。68年～ナショナル・デ・ボザール展入選。80年インターナショナル・ナンシー展招待出品。88年プリ・インターナショナル・アートコンテンポラン・デ・モンテカルロ展招待出品、プリ・ル・コンセルナショナル賞。89年サロンスド、92年ビエンナーレ展招待出品。パリ・ギャラリーフランシス・マリエと契約・個展。サロン・ドートンヌ会員。洋画家

山下真一 (やました・しんいち/1897～1979年)

熊本県生れ。ベルギー王立美術学校卒。一せん美術会委員。1979年没、82歳。洋画家

山下新太郎 (やました・しんたろう/1881～1966 年)

東京生れ。藤島武二に師事。1904年東京美術学校西洋画選科卒。05～10年仏留学、ラファエル・コラン、フェルナンド・コルモンに師事。14年二科会創立会員。31、32年再渡欧。35年帝国美術院会員のち帝国芸術院会員。36年一水会創立会員。55年文化功労者。東京で没、84歳。(出典 わ眼) 洋画家、版画

山下大五郎（やました・だいごろう/1908～1990年）

藤沢市生れ。1929年東京美術学校師範科卒。37、39年新文展で特選。42年新文展には無鑑査出品。戦後は牛島憲之、須田寿らと立軌会を結成。64年中村冊夫、島村三七雄ら林武門下の友人たちと櫛会を結成。83年立軌展で長谷川仁賞。90年東京セントラル美術館で個展。安曇野風景を描いた。東京で没、81歳。洋画家、版画

山下大五郎 II（やました・だいごろう/1908～1990年）

神奈川県生れ。1929年東京美術学校師範科卒。29年神奈川県奈珂中学校で教鞭。37、39年新文展特選、42年無鑑査出品。牛島憲之、須田寿らと立軌会を結成、83年立軌展長谷川仁賞、85年受賞記念展銀座日動画廊で開催。53年選抜秀作美術展招待出品、58年国際具象派展出品、64年中間冊夫、島村三七雄、原精一ら林武門下の友人達と櫛会を結成。77年国際形象展出品。79年「安曇野田植え」が長野県信濃美術館に買上げ。90年東京セントラル美術館で「日本の叙情詩 山下大五郎回顧展」開催。東京で没、81歳。洋画家、版画

山下 充（やました・たかし/1926年～）

静岡県生れ。1949年、上京、水彩連盟研究所に学ぶ。1960～73年渡仏。63年国際形象展招待出品。（以降6回）～68年日動画廊個展（以降14回）。81年長谷川仁記念賞（日動で記念展）。89年宮本三郎記念賞（日本橋三越で記念展）。90年川村文化振興財団川村賞。水彩画家

山下鉄之輔（やました・てつのすけ/1887～1969年）

福岡県生れ。1912年東京美術学校卒。和田英作に師事。在学中萬鉄五郎とアブサト会同人展開催。12年「ヒュウザン会（のちフェウザン会）」の結成に参加。16年大分中学校勤務、教え子に佐藤敬。大分県立女子師範学校、第二高等女学校に勤務。24、25、30年帝展入選、。のち一水会に参加。1969年没、82歳。洋画家、美術教育

山下 徹（やました・とおる/1952年～）

大阪生れ。1977年東京芸術大学油画科卒、79年同大学大学院油画科修了。79年個展（泰明画廊）。84年個展（泰明画廊）。94年個展（日本橋三越）。97年個展（日本橋三越）。洋画家

山下摩起（やました・まき/1890～1973年）

兵庫県生れ。1903年京都市立美術工芸学校入

学、10年京都市立絵画専門学校進学。在学中文展入選、第6回展褒状。22年兵庫県美術協会同入。28～30年渡欧、フォーヴィスム、キュビズム影響を受ける。西洋画法を取り入れた特異な日本画を描いた。58～60年大阪四天王寺の五重塔壁画を制作。61年朝日賞。41年東本願寺難波別院南御堂後門壁画「音声菩薩」制作。西宮市で没、83歳。74年兵庫県立近代美術館で「山下摩起展」を開催。日本画家、壁画

山下三千夫（やました・みちお/1948年～）

鹿児島県生れ。1967年個展のみ発表を続ける。76～77年フランス留学。94年個展（神戸阪急）、96年個展（横浜そごう・神戸阪急）、98年個展（福岡岩田屋）、99年個展（横浜そごう・阪急百貨店うめだ本店）、2000年個展（神戸阪急）、01年個展（JR 大阪セルヴィスギャラリー）、02年個展（阪急百貨店うめだ本店）、05年個展（近鉄百貨店阿倍野本店・京都店）、07年個展（瀧川画廊）。洋画家

山下りん（やました・りん/1839～1857年）

茨城県生れ。江戸に出て、浮世絵師に学び、中村精十郎に師事。1877年工部美術学校に入学、フォンタネージの指導を受けた。80～83年教会より派遣された聖像画家として帝政ロシア、ペテルブルグに留学。女子修道院でイコン制作技法を学ぶ。帰国後、神田駿河台にあった日本正教会の女子紳学校にアトリエを構え、イコン制作に没頭。91年ニコライ堂にもイコンを描いた。1918年ロシア革命後、正教は衰え、笠間に帰郷し同地で没、81歳。洋画家、イコン作家

山田 篤（やまだ・あつし/1902～1955年）

東京生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1929年光風会展入選。38年第一線美術会会員。50年一線美術の創立に参加。1955年没、53歳。洋画家、版画家

山田 勇（やまだ・いさむ/1917～1999年）

京都市生れ。東京高等師範学校卒。1947年行動展に出品。49年示現会展に出品、72年示現会会員、81年京都支部長。80年佛教大学文学部講師。1999年没、82歳。洋画家、美教

山田栄二（やまだ・えいじ/1912～1985年）

福岡市生れ。1935年独立展に入選、38年独立賞、47年独立美術協会会員。53～57年渡仏、55年パリ国際美術展出品。73年再渡欧。78、79年パリ、ブルターニュ、コンカルノで個展。82年福岡・田屋にて滞欧15年記念展。85年没、73歳。86年福岡市美術館で遺作展。洋画家

山田和宏（やまだ・かずひろ/1978年～）

大分県生れ。203年サロン・ドートンヌ展に出品。欧州・NYで作品を発表。15年日本・フランス現代美術世界展 準グランプリ日仏賞。19年米国14th International ARC Salon Competition』でChairman's Choice Award (ARC 会長賞)。19年日本・フランス現代美術世界展 大賞。20年日本・フランス現代美術世界展 招待出展(国立新美術館/東京)。
洋画家

山田敬中（やまだ・けいちゅう/1868～1934年）

東京生れ。月岡芳年に師事、のち川端玉章に入門し円山派を学ぶ。1891年岡倉天心の率いる日本青年絵画協会結成に参加。96年東京美術学校助教授。98年東京美術学校騒動に際して辞職、日本美術院設立に正員として参加。川端画学校教授、石川県立美術工芸学校教頭。日本絵画協会共進会他、数々の展覧会で受賞を重ね、初期文展でも褒状を得て、1920年帝展で推選。24年帝国美術展覧会委員、以後帝展を舞台に活躍した。1834年没、66歳。**日本画家、版画、美教**

山高 登（やまたか・のぼる/1926年～）

東京生れ。1945年明治大学卒。62年頃より 独学で木版画を制作。73年 CWAJ 現代版画展(以後毎年)。75年瞬生画廊・銀座で個展、以後隔年。83年蔵書票作品集を刊行。81年ガラス絵個展(瞬生画廊)。83年木版画個展(東京アメリカンクラブ)。90年『山高登木版画全作品』(瞬生画廊)刊行。**版画家、装填**

山田彊一（やまだ・きょういち/1938年～）

名古屋市生れ。1959年現・愛知教育大学卒。64年ニューヨークの「日本アーティスト選抜14人展」に出品。67年シェル美術賞展で佳作賞。85年和歌山版画ビエンナーレで大賞、86年IBM絵画コンクールで大賞を受賞。(出典 わ眼)**洋画家**

山田喜代春（やまだ・きよはる/1948年～）

京都府生れ。1971年ヨーロッパ放浪。96年立命館大学文学部入学。京都新聞にエッセイ『ぼくは大学1ねんせい』を連載。2000年バルカウス市立美術館(フィンランド)で個展。2011年南カレリア市立美術館(フィンランド)個展 他京都・大阪・東京などで多数開催。詩人、出版物「絵日記万歩のおつかい」「自己肯定感って、なんやろう」。**版画家、詩人、著作**

山田光春（やまだ・こうしゅん/1912～1981年）

愛知県生れ。1934年東京美術学校卒。宮崎で教職。35年瑛九らと洋画研究グループ「ふるさと社」結成。36年愛知県に戻り、教職。油彩画の他、ガラス絵の制作。37年自由美術家協会展協会賞、40年美術作家協会会員。47年中部自由美術協会を創立。56年創造美育協会に参加、愛知支部長。58年愛知県女子大学助教授。64年主体美術協会創立参加。46年愛知県美術教育協会、52年創造美育協会創立参画。66年瀧口修造らとともに「瑛九の会」を結成、瑛九の芸術研究にも大きな実績を残した。1981年没、69歳。**洋画家、美教**

山田耕三（やまだ・こうぞう/1932年～）

京都市生れ。山梨県に移住。20歳頃から制作活動開始し、1957年草原会創元会展入選、63年会員、70年退会。58年山梨美術協会会員。人間の内面に存在、相反する世界を主題にさまざまな素材を使用して独自の世界を創出。90年頃から7年間に及ぶ、山梨の自然をテーマに取り組んできたスケッチ集「山梨百景」を完成させている。**洋画家、水彩、版画**

山田貞美（やまだ・さだみ/1915～2000年）

岐阜県生れ。1937年東京美術学校図画師範科卒。57年独立美術協会展で奨励賞、61年独立賞、62年同会会員。1953～82年東京芸術大学文学部芸術学科教授。現代日本美術展、秀作展招待出品。玉雲の号で水墨画を描き、71年日本墨絵画会長。77年日本水墨画会会長。**洋画家、水墨画家、美術教育**

山田茂人（やまだ・しげひと? /1929～1991年）

愛媛県生れ。55年多摩美術大学洋画科卒。55年光風展入選、57年船岡賞、58年会友、61年会員、66年中沢賞、84年辻永記念賞、評議員。55年日展入選、66年特選、72年70回特別記念賞、87年特選、85年会員。75年渡欧。東京で没、62歳。**洋画家**

山田新一（やまだ・しんいち/1899～1991年）

台北市生れ。1917年宮崎県都城中学校卒、川端画学校に学ぶ。23年東京美術学校西洋画科卒、同校研究科入学。23～45年京城に住み、朝鮮総督府京城第二高等普通学校常勤講師。24年朝鮮美術展に三等賞、33年昌徳宮牌賞、36年同展参与。28～30年渡仏、アカデミー・グラン・ショミエールでアマン・ジャンに師事、サロン・ドートンヌに出品。48年光風会展に出品、同年会員。50年日展で岡田賞。60年日展会員、光風会評議委員、77年日展参与。京都工芸繊維大学、京都女子大学、関西日仏学館で教授。57年ヤマダ洋画研究所で後進を指導。京都で没、9

2歳。洋画家、美教

山田申吾（やまだ・しんご/1908～1977 年）

東京生れ。日本画家山田敬中の次男。1931年東京美術学校日本画科卒。1930年帝展入選。卒業後は結城素明に師事し、同級生らと研究グループ六條社を結成。50年、53日展で特選。日展評議員、同理事を歴任、63年日本芸術院賞。3度にわたってインド、ネパールを訪れ、同地を主題とした作品を多数制作している。申吾は生涯、山々と雲を描き続け、「雲の画家」と称されたほどであったが、その初期には海、水辺を題材としたものも制作している。1977年没、69歳。日本画家

山田眞山（やまだ・しんざん/1885～1977 年）

那覇市生れ。14歳で上京。戦前は中国の北京美術学校教授。1935年には明治神宮外苑絵画館の「琉球藩設置」の壁画を制作(代表作)。57年以来、糸満市摩文仁の丘に建つ平和記念堂に安置するための平和像の制作に打込み、その完成が間近であった。沖縄県で没、91歳。日本画家、彫刻家

山田隆憲（やまだ・たかのり/1893～1953 年）

熊本市生れ。済々黌を卒業後に上京し、黒田清輝の主宰する葵橋洋画研究所に入り、黒田の推薦により、1912～17年東京美術学校西洋画科入卒、研究科に進む。黒田から学んだ外光派の手法をよく受け継ぎ、官展に入選を重ねた。30～34年白日会会員。右手に痙攣が生じ制作できなくなる。1953年没、60歳。洋画家、版画家

山田 正（やまだ・ただし/1899～1945 年）

札幌市生れ。札幌一中で林竹治郎に学び、北大農業実科に進学し、黒百合会で絵画に親しんだ。1927年春陽会入選。上京、3年後に渡仏して約3年間滞在、サロン・ドートンヌなどに出品した。帰国後は国画会に出品した。1945年没、46歳。洋画家

山田東洋（やまだ・とうよう/1865～1946 年）

新潟県生れ。本名勝之助。1887 年「守山湘颯」肖像画の制作。89 年明治美術会第 1 回展に出品。以後、5 回展にも出品。98 年 33 歳で北海道に渡り、40 年画道に励む。1935～40 年白日会展に連続出品。また、日本各地を旅し、朱衣のダルマを油絵で描くことを得意とした。46 年没、享年 80 歳。(佐) 洋画家

山田尚時(尚以)（やまだ・なおじ/1933 年～ ）

北海道生れ。1954年武蔵野美術大学卒。51～55

年『都会の河』シリーズ、61～71年『知床シリーズ』制作。その間ヨーロッパ各地を遍歴し、新しい感性で風景画を描き、68年ヨーロッパスケッチ展開催。'68年現代日本美術展招待出品し、73年全国のそごうで個展。活動の場をパリに移し、73～85年ライフワークとなる『エーゲ海』シリーズ完結。81年MOA美術館に作品所蔵。2000年帰国、NPO 法人日本芸術映像文化支援センター理事長。洋画家

山谷鏐一（やまたに・えいいち/1910～2007 年）

千葉県生れ。1938年野間仁根の指導。48年以降二科展に連年出品。54年二科展で特待賞。55年一陽会創立に参画、会員。千葉県美術会常任理事。81年紺綬褒章受章。千葉県知事表彰。83年地域文化功労で文部大臣表彰。85年「山谷鏐一作品集」発刊。千葉市で没、97歳。洋画家

山田馬介（やまだ・ばすけ/1871 年～没年不詳）

東京生れ。1887年ころ渡米、NYのアート・ステューデンツ・リーグ等で学ぶ。95年一時帰国し、横浜で画塾「バスケ・スケッチング・クラス」を開き、今村紫紅などに水彩画を教える。「外国人向け「輸出画」を描く。97年再渡米。99年ミネアポリスの美術学校、フィラデルフィアの「スクール・オブ・デザイン」で水彩画、デッサンを指導。1902年帰国、横浜で画塾「横浜スケッチ倶楽部」を開く。水彩画展を開催。10年横浜で画廊を開く。14、16年帝国ホテルで個展。17年神戸オリエント楼上、18年大阪ホテルで個展。11、25年NYのアンダーソン・ギャラリー、アメリカン・アート・ギャラリーで個展。34年NYのウイレム・ホスト・ギャラリーで個展。1938年以降に逝去したと推定。水彩画家、画廊主

山田正亮（やまだ・まさあき/1930～2010 年）

東京生れ。1950年東京都立工業高等専門学校卒。53年長谷川三郎に師事。49年アンデパンダン展、自由美術展に出品。56年より「Work」シリーズ。矩形の色面からストライプの画面に到達。79年～佐谷画廊で個展。2005年府中市美術館で個展。10年没、81歳。洋画家

山田正孝（やまだ・まさたか/1908～1995 年）

長崎市生れ。1933年大阪美術学校卒、東光展に入選。37年長崎市立商業学校教諭。52年日展入選。66年東光会委員。69年東光会審査員。75年長崎県美術協会副会長。1995年没、87歳。洋画家

山田睦三郎（やまだ・むつさぶろう/1901～1984 年）

名古屋市長生れ。1916年大澤鉦一郎に師事。17年大澤鉦一郎らと「愛美社」を結成。20年名古屋市立工芸学校図案科卒。27年三協晴らと「三路社」を結成。名古屋工科大学に勤務。35年春陽会展入選。42年文展入選。高校、中学に勤務。62～75年南山大学講師。71年渡欧。84年没、82歳。洋画家、美教

山田嘉彦（やまだ・よしひこ/1964年～）

東京生れ。1964年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。66年同大学大学院修了。同大学に勤務。69年フランス政府給費留学生として渡仏。87年東京・京橋画廊にてパステル展開催、「山田嘉彦画集」が求龍堂より刊行。93年東京学芸大学教授。2005年日本橋高島屋で個展。洋画家、パステル

大和修治（やまと・しゅうじ/1938年～）

東京生れ。1964年武蔵野美術学校卒。65年独立展入選。77年現代洋画精鋭選抜展金賞。91年個展（銀座セントラル絵画館）。94年銀座松屋で個展。2005年立軌会同人。洋画家

大和屋巖（やまとや・いわお/1918～2012年）

北海道生れ。1937年札幌師範学校卒、北海道の小学校教師をしながら川端画学校に学ぶ。その後東京に転居日本水彩画会研究所で学ぶ。49年日本水彩展で日本水彩画会賞。同年北海道美術協会展知事賞。50年日本水彩画会会員推挙。1994年日本水彩画会理事長。2012年没、94歳。水彩画家

山名文夫（やまな・あやお/1897～1980年）

広島市長生れ。日本のイラストレーター、グラフィック・デザイナー。日本のグラフィックデザインの黎明期における先駆者の一人、大正期から昭和初期にかけてのモダンなアール・デコスタイルで知られ、資生堂の現在にもつづくキーデザイン、紀ノ国屋のロゴ、新潮文庫の葡萄マークのデザインで知られる。1980年没、83歳。イラスト、デザイナー

山中嘉一（やまなか・かいち/1928～2013年）

大阪生れ。1947～53年にかけて大阪市立美術館付設の美術研究所洋画科で赤松麟作、小磯良平、須田国太郎に学ぶ。戦後は堺市に移り、54年「デモクラート美術家協会」に参加。瑛九や泉茂とともにグループの中心として活躍。57年の同会解散後は無所属、大阪芸術大学美術学科や浪速短期大学デザイン美術科で教鞭をとり、定年後も非常勤講師として後進の指導にあたった。2013年没、85歳。油彩画、リトグラフ、シルクスクリーン、ガラス絵、モノタイプ、版画家

山中 現（やまなか・げん/1954年～）

福島県生れ。1978年東京芸術美術学部油画科卒。80年同校大学院美術研究科版画専攻修了。81～84年東京芸術大学版画研究室助手。84年に西武美術館版画大賞展で受賞。91年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ（ユーゴスラビア）招待出品。2001年喜多方市美術館「山中現木版画展」。03年不忍画廊個展。09年銀座シロタ画廊個展。10年山中現 一夢の領域ー福島県立美術館で個展。16年養清堂画廊個展。版画家

山中古洞（やまなか・こどう/1869～没年不詳）

東京生れ。月岡芳年、熊谷直彦らに画を学び、住吉派を研究、人物画が得意。1895年内国勧業博で褒状。96年読売新聞、中外商業新報、「新声」「文芸倶楽部」に挿絵や口絵。「辰重」の落款で女優の版画を制作。また書画研究会を行い、97年紫江会と改称。1901年鏑木清方らと烏合会を結成、浮世絵の伝統を継ぐ人物画の研究65年文展開設に際して国画玉成会結成に参加、評議員。著書に江戸から明治末の挿絵の変遷をまとめた名著「挿絵節用」がある。日本画家、挿絵画家、新版画家

山中清一郎（やまなか・せいいちろう/1912～2003年）

大分県生れ。1936年東京美術学校油絵科卒、藤島武二・能勢亀太郎に師事。光風会レイトン賞、37年I氏賞、42年会員、66年評議員、67年退会。51年長崎大学教授。56年日展特選、66年日展菊華賞、68年日展審査員（'76'83年歴任）、69年会員、84年評議員。長崎市で没、91歳。洋画家、美術教育

山中信夫（やまなか・のぶお/1948～1982年）

大阪生れ。1969年多摩美術大学油絵科入学。70年「美術史評」の同人となり同誌の編集。70年多摩美術大学を除籍。72年多摩川の川面に川の流れを撮った16ミリ映画を映写する「川に川を写す」という作品を発表し、注目。72年、第2次美術史評社に参加。同年ピンホール・カメラによる作品を発表する。75年ピンホール・カメラによる作品を展開させる。76～77年パリ、79～80年ブラジルに住む。82年パリ・ビエンナーレに出品して好評。NYで没、34歳。写真家

山中春雄（やまなか・はるお/1919～1962年）

大阪生れ。1935～39年大阪中之島洋画研究所に通う。二科展、全関西美術展に出品。46年から行動美術展に出品、48年行動美術展で会友賞、50年行動美術協会会員。53年フランス遊学。60年「同時代」を結成。62年大阪日仏画廊で個展。1962年没、43歳。洋画家

山中雅彦（やまなか・まさひこ/1955年～）

岩手県生れ。盛岡第一高校卒。1981年白日会にて佳作賞、会友、83年T賞・奨励賞、準会員、84年会員、90年M賞。89年東京セントラル美術館油絵大賞展出品。91年現美展出品。2002年掌の油絵展出品（東美アートフェア内、春風洞画廊）。08年個展「油絵小品展」（松坂屋・上野）。**洋画家**

山中雪人（やまなか・ゆきと/1920～2003年）

広島市生れ。1937年広島崇徳中学校卒。川端画学校で学び、1942年に東京美術学校日本画科卒。結城素明や川崎小虎らの指導を受ける。47年広島実践高等女学校の教職。48年上京し横浜市立蒔田中学校で勤務。49年日本画家の水谷愛子と結婚。51年前田青邨に師事。56年院展入選。70年インドネシアのボロブドゥール遺跡感銘を受た。アジア各地の仏跡を遍歴し、画想の源とした。80年愛知県立芸術大学非常勤講師、法隆寺壁画模写の指導。84年院展で日本美術院賞・大観賞。85年回前田青邨賞。86年日本美術院同人。92年院展文部大臣賞。93～2000年広島市立大学芸術学部日本画家主任教授。97年院展で内閣総理大臣賞。横浜で没、83歳。**日本画家、美教**

山根康壮（やまね・やすたけ/1942年～）

宇都宮市生れ。1961年私立本郷高校卒。75新宿美術研究所に入所、麻生三郎、山口長男に指導を受ける。96年ギャラリー無寸草で個展。2005年羽黒洞個展。08年清澄画廊個展、柏わたくし美術館で山根コレクション展。2018年ギャラリーアビアントで山根コレクション展。**洋画家**

山内愚僊（やまのうち・ぐせん/1866～1927年）

江戸生れ。高橋由一、五姓田芳柳、渡辺文三郎に洋風画を学ぶ。1889年大阪朝日新聞に入社、挿絵を担当。92年松原三五郎と大阪で洋画展。94年関西美術会を結成。1901年京都関西美術会結成。渡仏。関西美術会に所属して関西洋画界の礎を築く。27年没、62歳。**洋画家、挿絵、美教**

山内豊喜（やまのうち・とよき/1911～1991年）

茨城県生れ。1932年川端画学校を修了。日本美術学校に進むが34年に中退。42年美術文化展入選。45年同会会友、48年退会。49年自由美術展に入選し、以後同会に出品を続ける。51年会員。54年コンGRES・カルチュアル・フリーダムの招聘により渡仏してグラン・ショミエールに学んだ。65年アジア財団の支援により再渡仏。同年自由美術家協会を退会し、以後、東京、パリ双方を拠点に活動した。風景画を多

く描き、80、81年愛宕山画廊で個展。日本文化フォーラム主催国際青年美術家展運営委員。東京で没、80歳。**洋画家**

山内秀臣（やまうち・ひでおみ/1930～2016年）

神戸市生れ。1956年東京藝術大学油画科卒。56～67年黒土会グループ展に出品。61年文藝春秋画廊にて個展。以降62年新制作展に出品。2016年没、86歳。**洋画家**

山中嘉一（やまなか・よしかず/1928～2013年）

大阪生れ。1947～53年大阪市立美術館付設の美術研究所洋画科で赤松麟作、小磯良平、須田国太郎に学ぶ。54年「デモクラート美術家協会」に参加。瑛九や泉茂とともにグループの中心として活躍した。57年同会解散後はグループに所属することなく、大阪芸術大学美術学科や浪速短期大学デザイン美術科で教鞭をとり、定年後も非常勤講師として後進の指導にあたった油彩画のほか、リトグラフやシルクスクリーンなどの版画、ガラス絵など様々な分野の作品を手がけた。2013年没、85歳。**洋画家、版画、ガラス絵、美教**

山内豊喜（やまのうち・とよき/1911～1991年）

茨城県生れ。1932年川端画学校修了。日本美術学校34年中退。42年美術文化展入選、45年会友、48年退会。49年自由美術展入選、51年同会会員。54年渡仏、グラン・ショミエールに学ぶ。65年アジア財団支援再渡仏。東京、愛宕山画廊で個展。日本文化フォーラム主催国際青年美術家展運営委員。東京で没、80歳。**洋画家**

山畑阿利一（やまはた・ありいち/1908～1980年）

大阪生れ。大阪府立泉尾工業学校窯業科を卒業後上京、小倉右一郎に師事し、川端画学校で学んだ。1928年帝展入選、38、39年の新文展で特選、42年無鑑査、日展では56、62年に審査員、58年会員、64年評議員、70年参与。第一美術協会、構造社に出品、34年第一美術協会に無鑑査。38年の構造社展で研究賞、39年が構造賞。55年の都市美展出品作が文部大臣賞。日本彫塑会委員、日本陶彫会委員も兼務。主な作品は上記受賞作のほか、「関東大震災慰霊碑」「慈愛」「聖観音像」など。東京で没、72歳。**彫刻家**

山羽斌士（やまば・ひとし/1944年～）

愛知県生れ。1967年東京芸術大学卒、大橋賞、69年同大学大学院壁画科修了、助手。72年渡欧。73

年個展(泰明画廊)。76年三井物産新社屋天井壁画制作。80年スペインに長期取材旅行。88年下諏訪総合文化センターに壁画制作。1991年個展(泰明画廊・名鉄百貨店・梅田画廊)。**洋画家、壁画**

山野辺義雄 (やまのべ・よしお/1936年～)

福島県生れ。若松光一朗に師事。東京芸術大学美術学部油画科入学、大学院で版画専攻。1974年イビザ国際版画ビエンナーレで大賞(スペイン)。76年英国国際版画ビエンナーレで買い上げ賞。90年国際ミニアチュール・アート・アニュアル(加)で第1位。個展はシアトルのデイヴィッドソン・ギャラリー、池田美術館で開催。日本版画協会会員、版画集『髭男と小人ノ国』等出版。**版画家**

山村耕花 (やまむら・こうか/1885～1942年)

東京生れ。尾形月耕に師事、東京美術学校日本画選科卒。1907年文展入選。10年文展で褒状。14年再興院展に参加、第3回展に出品して、日本美術院の同人。烏合会、珊瑚会で活躍。1916年渡辺版画店「十一代目片岡仁左衛門の大星由良之助」を発表し、以降多くの役者絵の新版画を版行。浮世絵、大津絵、蒔絵、陶磁、人形など収集。14年自刻自摺による木版画も制作。石井柏亭や川村花菱との共作、合作。20年「梨園の華」シリーズ12点は代表作。40年南支戦線に従軍して描く。1942年没、57歳。**日本画家、浮世絵師、版画**

山村秀一 (やまむら・ひでいち/1896～1989年)

山口県生れ。小学校卒業後、松林桂月に私淑し日本画を習う。山口師範学校本科卒、女子師範学校教諭。1926年県立中学明善校美術教諭として久留米赴任。水彩画の制作、日本水彩画会会員。西部水彩画協会を設立。水彩画の発展と普及。明善校の美術教諭として多くの美術家を世に送り出した。1989年没、93歳。**水彩画家、美教**

山本 鼎 (やまもと・かなえ/1882～1946年)

愛知県生れ。1906年東京美術学校西洋画科選科卒。07年同人誌「方寸」創刊。12～16年滞欧。18年日本創作版画協会を創立。19年日本農民美術練習所を開設。22～35年春陽会創立会員。43年春陽会に復帰。上田市で没、63歳。**洋画家、版画**

山本兼文 (やまもと・かねふみ/1918～1992年)

鳥取県生れ。鳥取大学を卒業。1949年院展彫刻部入選。以後同展には同41～59年まで出品を続けた。59年第13回二紀展に「和」で初入選。60年褒賞受賞。

71年同人賞を受け、73年同会会員。77年文部大臣賞。院展には写実を基本とする人体像を主に出品していたが、二紀会に移ってからは抽象的作品を制作するようになった。石の量塊感を生かし、変形を加えた直方体を組みあわせた簡素な造形を特色とした。鳥取市で没、73歳。**彫刻家**

山本菊造 (やまもと・きくぞう/1900～1932年)

札幌市生れ。北海中学では美術部・どんぐり会に所属。エルム画会、十二年社、黒土社の同人となり、1925年北海道美術協会創立に参加、道展発展期の中心メンバー。小樽の太地社の同人、第2回展から最終回の第6回展まで出品。28年春陽会展入選。二科展、「一九三〇年協会」展出品。32年独立展入選。1932年没、32歳。**洋画家**

山本丘人 (やまもと・きゅうじん/1900～1986年)

東京生れ。東美校卒。松岡映丘に師事。上村松篁・吉岡堅二らと創造美術を結成、のち創画会を結成。常に日本画革新運動の指導者として活躍、厳しい自然を骨太に描いた力強い画風から、晩年はより詩精神の高い抒情的作風を示した。創画会会員。芸術院賞・芸術選奨文部大臣賞。文化勲章。1986年没、85歳。**日本画家**

山本琴谷 (やまもと・きんこく/1811～1873年)

島根県生れ。津和野藩家老の多胡逸斎(たご・いっさい)にまなび、江戸で桜間青涯、渡辺崋山に師事する。人物、山水を得意とし、1853年津和野藩絵師となった。1873年没、63歳。本姓は吉田。名は謙。字(あざな)は子讓。作品に「遊魚図」など。**江戸時代後期の画家**

山元恵一 (やまもと・けいいち/1913～1977年)

沖縄県生れ。1931年上京、名渡山愛順宅下宿。東京美術学校油絵科卒業後、38年杉全直らが結成した「貌」に参加。41年沖縄県立第二中学校の美術教師。48年ニシムイにアトリエ。52年琉球大学美術工芸科助教授、後進の指導にあたった。また、沖展の中核として創作活動。1977年没、64歳。**洋画家、美教**

山本啓輔 (やまもと・けいすけ/1911～1963年)

姫路市生れ。姫路高校に入学。画家を志望して中退。1930年頃上京。34年二科展に入選。35年黒色洋画展に出品。同年九室会の結成に参加。モンドリアン風の純粋抽象。戦後は二科会員として大作を制作。ピカソ風からアンフォルメル風作品も制作。63年没、52歳。**洋画家**

学名誉教授。彫刻家、美教

山本作兵衛（やまもと・さくべえ/1892～1984年）

福岡県生れ。上三緒炭鉱に移住し、炭鉱夫として働きつつ、1940年全国安全週間ポスターコンクール入選。58年夜警宿直員として勤め、炭鉱絵画を描き始める。以後、明治から昭和にかけて自らの筑豊炭田での体験を約30年にわたって記録、ヤマに生きる人々の素顔を生き生きと描き出した。75年田川市文化功労者賞、77年西日本文化賞。1984年没、92歳。2011年一連の炭坑記録画および記録文書がユネスコ記憶遺産に登録。炭鉱記録画家

山本守礼（やまもと・しゅれい(もりひろ)/1751～1790年）

京都生れ。山本家は代々狩野探幽の流れをくむ画系で、守礼の代で円山派に転向した。1764年兵庫寮下司鉦師。70年仙洞御所造営で宮中御用を務めた。80年山本家を継ぎ、81年鉦師を引退。84年尾張の旧明眼院書院、87年香美町大乘寺で、応挙にしたがい障壁画を描く。現存する作品は10点に満たない。江戸時代中期の絵師

山元春挙（やまもと・しゅんきょう/1871～1933年）

大津市生れ。野村文挙に学び、1885年円山派の森寛斎に師事。全国絵画共進会、内国勸業博覧会などで受賞。竹内栖鳳、菊池景文と並ぶ新進作家として頭角をあらわす。1907年文展第1回展より審査員を務め、自らも文展、帝展に出品。栖鳳とともに明治後期の京都画壇を代表する作家として活躍。99年京都市立美術工芸学校教諭、09年京都市立絵画専門学校設立、同校教諭を兼任。1900年画塾同攻会を組織、09年早苗会と改称。17年帝室技芸員、19年帝国美術院会員。1933年没、62歳。日本画家、美教

山本常一（やまもと・じょういち/1912～1994年）

神戸市生れ。日本大学中退、一時、東宝特殊撮影製作に従事した。国画会彫刻部に出品(第10-14回)したが、1936年新制作派協会第1回展出品以来同会に所属し、49年同会員。選抜秀作美術展、日本国際美術展に出品。77年長野市野外彫刻賞。作品集に『鳥 BIRD』(昭和38年、美術出版社)、著書に「鳥粘土でつくるたのしい造形」(同43年)がある東京で没、84歳。彫刻家

山本眞輔（やまもと・しんすけ/1939年～）

愛知県生れ。1963年東京教育大学教育学専攻卒、72、80年日展特選。92年日展会員賞。99年日展で内閣総理大臣賞。2004年日展出品作で日本芸術院賞。日展理事。日本芸術院会員。名古屋市立大

山本瑞雲（やまもと・ずいうん/1867～1941年）

熱海市生れ。1880年出京、82年高村光雲の門に入り、90年内国勸業博覧会に出し、東京彫工会競技会に出品共に褒状。92年大阪に移り1900年上京、米国シカゴ博覧会で銅賞牌。その後仏像の製作補修にあたり、また諸種の模型を製作し、08年東京彫工会競技会審査員。10年日英博覧会のため東京市から依頼を受けて英国へ出張。17年梅檀社を組織して木彫界の新運動のため努力した。22年聖徳太子奉讃委員となり、昭和に入ってから本郷東片町大円寺の聖観音、六臂如意輪観音、八臂不空絹索観音、八臂馬頭観音、十八臂準提観音脇侍二龍人等を製作し、36年には浅草寺待乳山祥天の毘沙門天、三方荒神両脇侍を作って努力精進を重ねてみた。東京で没、75歳。彫刻家

山本倉丘（やまもと・そうきゅう/1893～1993年）

高知県生。京都絵専卒。山元春挙の早苗会に入塾し、のち堂本印象の東丘社に入る。戦後は日展・東丘社展・京展・関西展等で活躍、四条派の伝統の上に近代的な様式を加えた花鳥画で知られた。日展参事・東丘社顧問。京都市文化功労者・京都府美術工芸功労者。勲四等旭日小授章受章。芸術院賞・京都府文化賞特別功労賞受賞。京都に住した。1993年没、99歳。日本画家

山本 孝（やまもと・たかし/1920～1988年）

新潟県生れ。1929年上京、東京市池袋第二小学校高等科卒、33年骨董商平山堂商店につとめる。48年独立して数寄屋橋画廊を設立、50年に同画廊を解散し51年東京画廊を設立する。58年斎藤義重展を開催し、その後前衛的な現代作家の作品を次々と紹介。桂ゆき、白髪一雄、高松次郎、前田常作、豊福知徳、川端実、李禹煥などの個展を開き、また、フンデルト・ワッサー、イブ・クラインなど海外の作家の紹介にもつとめた。58年日本洋画商協同組合創立に参加し、78～85年理事長。数寄屋橋画廊時代の同僚、志水楠男らとともに現代美術を対象とする画廊の創成期をになった。東京で没、68歳。美術商(東京画廊)

山本探斎（やまもと・たんさい/生没未詳）

名は昌盛。字は士慎。壮園と号す。探淵の子。豊臣秀次公が自害した青巖寺(金剛峰寺)の部屋は、襖絵「柳鶯図(りゅうろず)」があることから柳の間と呼ばれる。江戸時代後期、京都の画家

山本陶秀（やまもと・とうしゅう/1906～1994 年）

岡山県生れ。岡山県伊部(備前市)の窯元で修業し、楠部弥弼(くすべーやいち)に師事。1955年日本伝統工芸展に入選。58年ブリュッセル万博でグランプリ、77年毎日芸術賞。備前焼の茶陶で知られる。87年人間国宝。1994年没、87歳。陶芸家

山本 正（やまもと・せい/1915～1979 年）

岡山県生れ。「一九三〇年協会」洋画研究所に通い、里見勝蔵、野口弥太郎に師事。1938年創紀美術協会結成に参加。47年独立賞。48年同会岡田賞。49年独立美術協会会員。56年渡仏。日本大学芸術学部教授。東京で没、64歳。(出典 わ眼)洋画家、美術教

山本 貞（やまもと・てい/1934 年～ ）

東京生れ。1958年武蔵野美術学校卒、64～67年NY 滞在、アート・ステューデント・リーグに学ぶ。97年宮本三郎記念賞、受賞記念展。97年二紀会理事長。99年安田火災東郷青児美術館大賞、受賞記念展。2004年日本芸術院賞、同年芸術院会員。17年旭日中綬章。洋画家

山本知克（やまもと・ともかつ/1927～2003 年）

京都生れ。京都画壇の重鎮だった日本画家・山本倉丘の長男。堂本印象に師事し、1948年京都市立美術専門学校日本画科卒。52年京都市立美術専門学校研究科修了。47年日展で入選、53、54年日展特選、61年日展会員、評議員。50、53年関西展賞。53年京展市長賞。79年金沢美術工芸大学教授。93年京都府文化功労賞。2003年没、76歳。日本画家、美術教

山本豊市（やまもと・とよいち/1899～1987 年）

東京生れ。1917年錦成中学校卒。戸張孤雁に師事。18～21年太平洋画会研究所でデッサンを学ぶ。21年再興院展入選、23年日本美術院院友、32年同人。24～28年渡仏、マイヨールに師事。28年帰国、マイヨール彫刻を日本に紹介する。32年頃、京都や奈良に旅行し仏像に接したのを契機に、ブロンズや石膏などの材料不足もあり10年頃より本格的に乾漆技法を研究。36年改組帝展に乾漆像を出品する。以後、乾漆の技法を現代彫刻に導入した独特の作風を展開。50年新樹会に出品。54年毎日美術賞。58年ブリヂストン美術館で開催した個展出品作で芸術選奨文部大臣賞。61年日本美術院彫刻部が解散し、新たに結成された彫刻家集団SASに参加、同会が63年国画会と合同するに及んで、国画会会員となり、7

5年退会まで同会に出品。47年東京美術学校講師、53～67年東京芸術大学教授。67年愛知県立芸術大学教授。83年文化功労者。東京で没、87歳。彫刻家

山本直彰（やまもと・なおあき/1950 年～ ）

横浜市生れ。1975年愛知県立芸術大学大学院日本画科修了。92～93年文化庁芸術在外派遣研修員としてプラハに滞在。2009～10年芸術選奨文部科学大臣賞、神奈川文化賞。86年コバヤシ画廊をはじめ個展多数。08年平塚市美術館で「山本直彰 帰還する風景」展開催。日本画家

山本直治（やまもと・なおはる？/1904～1981 年）

大阪生れ。1924年大阪の信濃橋研究所で小出檜重、鍋井克之に指導を受ける。26年二科展入選、35年二科会会友、48年二紀会同人、68年会員、73年鍋井賞、76年二紀会委員、77年評議。大阪で没、77歳。洋画家

山本梅逸（やまもと・ばいいつ/1783～1856 年）

彫刻師の家に生れ、画を好む。張月樵に師事。上京後は文人画家として評価を高め、晩年には尾張藩御用絵師の任を受ける。円山四条派、明清画を学んだ繊細な山水画、花鳥画を得意とした。1856年没、73歳。江戸時代後期の文人画家

山本發次郎（やまもと・はつじろう/1887～1951 年）

岡山県生れ。大阪船場のメリヤス業を営む山本家の婿養子、1920年に家督を相続した山本は、商いの手を広げながら、29年頃から美術品の蒐集を始めた。コレクションは書、陶磁器、仏教美術、御宸翰、ギリシャの壺、エジプトの石彫、洋画、タペストリー、染織。芸術の個性を高く評価し、知名度に左右されず、自らの眼にかなうもののみを徹底的に蒐集して独特のコレクションを築いた。佐伯没後の32年ごろ。それまで、佐伯祐三の名を知らず、作品も見ることがなかった山本のもとに、画商が佐伯作品を持ち込んだ。山本と佐伯の運命的な出会いでした。山本は次のように回想しています。「この時のことは今でも歴々とよく覚えておりますが、後から思えば人と人の契合の深い因縁が、この瞬間から起きたというのでしょうか、胸に動悸打つ異様な感じで、長い間我を忘れて眺め入ったようなことでした。それ以来、ただもう有頂天になって、手の届く限り熱心に蒐めにかかりました。恰も前世からの約束ごとでもあるかの如く、スルスルと、最早多分その代表的なものは殆ど集まりつくしたかと思えます。」(「佐伯祐三遺作蒐集に就て」「山本發次郎遺稿」)

より)。37年には「山本發次郎氏所蔵 佐伯祐三遺作 展覧会」を開催、同時に豪華画集「山本發次郎氏蒐蔵 佐伯祐三画集」を出版します。コレクションの中心はパリ時代の作品で、展覧会には 108 点が出品、画集には 107 点が掲載されており、わずか 5 年ほどで山本が比類ない佐伯コレクションを築いた。45年芦屋の山本邸はB29の集中攻撃を受け全焼。邸内の施設に残してあった佐伯作品約 100 点は、その他の工芸品や絵画などとともに灰となる。山本發次郎の各種にわたるコレクションの約 8 割が焼失しましたが、佐伯作品については、疎開された 3 分の 1 が残された。83年佐伯作品を含む油彩画、墨蹟、インドネシアの染織などの山本發次郎コレクションが、遺族により一括して大阪市に寄贈。大阪新美術館建設準備室は、佐伯祐三の芸術を永く保存し、世に問い続けるといふ山本發次郎の遺志を継ぎ、佐伯作品の蒐集と顕彰につとめている。1951年没、64歳。コレクター

山本日子士良（やまもと・ひこしろう/1910～1993 年）

奈良県生れ。1929 年私立浪速中学校卒。34 年東京美術学校油絵科卒。第 2 回東光会展に初入選。36 年昭和 11 年展に入選。37 年熊岡美彦に師事。40 年第 8 回東光会展で Y 氏奨励賞。42 年第 2 回航空美術展で朝日新聞社賞。43 年東光会会員。50 年第 6 回日展で岡田賞。67 年第 10 回日展で菊花賞。71 年日展会員。56 年板橋区立美術館で回顧展開催。93 年 9 月 15 日没、享年 82 歳。(佐)洋画家

山本彪一（やまもと・ひょういち/1912～1999 年）

栃木県生れ。1937 年早稲田大学商学部卒。独学で絵を学び、猪熊弦一郎の師事を受け画家の道へ。42 年新制作展に出品。以降、日展、光風会にて活躍。77 年フランス・パームコマンドール勲章。パリと近郊を描いた風景画やバラを題材。二科会会員。行動美術協会創立会員。1999 年没、87 歳。洋画家

山本 弘（やまもと・ひろし/1930～1981 年）

長野県生れ。1948 年帝国美術学校中退。池田龍男らと交友。20 代前半に飯田市に帰郷。日本アンデパンダン展等に出品。表現主義的絵画を描く。飯田市で個展活動。自死、51 歳。飯田市美術館に作品 50 点が収蔵される。(出典 わ眼) 洋画家

山本不二夫（やまもと・ふじお/1905～1984 年）

千葉県生れ。1926 年東京商科大学専門部卒、～32 年旅館、運送業を自営。～38 年内務省土木部に務め。34 年二科展入選、41 年会友、50 年新体制下会友、55 年会員、63 年会員努力賞、65 年総理大臣

賞、69 年青児賞、理事。34 年日本水彩展入選。39 年キング賞、41 年会員、理事。70 年ポルトガル、モロッコ及び訪欧。千葉県で没、79 歳。洋画家、水彩画家

山本文彦（やまもと・ふゆひこ/1937 年～）

東京生れ。1961 年東京教育大学教育学専攻科芸術専攻修了。58 年二紀展入選。61 年二紀展文部大臣賞、二紀展内閣総理大臣賞。昭和会展林武賞、安井賞、金山平三記念美術賞、宮本三郎記念賞。筑波大学芸術学系教授、2000 年定年退官し、筑波大学名誉教授となる。10 年日本藝術院会員。洋画家

山本芳翠（やまとも・ほうすい/1850～1906 年）

岐阜県生れ。はじめ京都で南画を学ぶ、1872 年横浜で初代五姓田芳柳、76 年工部美術学校でフォンタネージに師事。洋画を学ぶ。ワグマンや五姓田義松に影響を受ける。77 年内国勸業博覧会で花紋賞、宮内庁買い上げ。78～87 年渡仏、エコール・デ・ボザールで L. ジェロームに師事。帰国後合田清と画塾「生巧館」を主宰。明治美術会の創立や「生巧館」を黒田清輝に任せ黒田は「天真道場」とし、白馬会の結成を助けた。1903 年演劇や歌劇における洋風舞台装置の制作を行った。06 年没、56 歳。洋画家、美教

山本正男（やまもと・まさお/1912～2007 年）

長野市生れ。1936 年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。38 年同大学院修了。美学専攻。50 年以降、横浜国立大学助教授・教授、東京芸術大学教授を歴任。62 年文学博士。79 年東京芸術大学名誉教授、同大学学長就任。85 年任期満了。86 年沖縄県立芸術大学学長に就任。長野県信濃美術館館長を兼ねる。96 年沖縄県立芸術大学学長退任、同大学名誉教授。その他、日本学術会議会員。美学会代表委員。2002 年長野県信濃美術館館長退任。2007 年没、96 歳。美術史家、美術館長

山本雅子（やまもと・まさこ/1964 年～）

東京生れ。1987 年東京芸術大学美術学部卒、89 年同大学修士課程修了。個展中心に発表。2002 年渋谷東急で三人展。05、06 年渋谷東急で二人展。洋画家

山本雅彦（やまもと・まさひこ/1901～1993 年）※

東京生れ。父は木彫家山本瑞雲。父瑞雲のもとで木彫を学ぶ、塑造の道へ進み、1926 年東京美術学校彫刻科塑像部卒。28 年帝展入選し、以後帝展への出品を続け、新文展では無鑑査出品。41 年応召し戦

後旧ソ連エラプカに抑留され、3年間に官労功などに携わる側ら小仏像の制作を続け、これらの小仏像は「エカプカ仏」と呼ばれ供養する会ができた。50年日展で特選、第6回、7回日展で特選、朝倉賞。58年新日展で文部大臣賞を受賞。日展では評議員、参与。日本彫塑家クラブ理事、日本美術家連盟理事長。東京で没、92歳。彫刻家、日本美術家連盟理事長

山本正文（やまもと・まさふみ/1947年～）

山梨県生れ。1970年千葉工業大学建築学科を卒業後渡仏。翌年スペインに渡り、バルセロナ工芸応用美術学校版画科。パールケル、ピュージュグロス、フェレルなどのスペイン各地の版画工房で経験、79年独立し。92年のメキシコ国立版画美術館における大規模な回顧展。以後も世界各国で展覧会を開催。一方でカレーリア夏期国際版画学校やウィンチェスター美術学校修士コースにおいて実験講座や版画セミナーを担当し、版画の普及にも力を注いでいる。版画家

山本六三（やまもと・むつみ/1940～2001年）

兵庫県生れ。1969年版画家の野村博に師事。71年銀座「養清堂画廊」で個展。72年生田耕作氏の翻訳書の挿絵を手がけ、70年代にはサバト館や湯川書房が発行した限定本の挿画を担当する。75年～東京、大阪、京都、パリなどにて個展。生涯を通じて独自の顔貌美と幻想に彩られた作品を描き続けた。挿絵画家、版画家、洋画家

山本森之助（やまもと・もりのすけ/1877～1928年）

長崎市生れ。東京美術学校西洋画選科卒。白馬会賞受賞。白馬会会員。第1回から第3回までの文展で連続して三等賞、二等賞、二等賞を受賞。文展審査員。1912年中沢弘光らと光風会を設立した。渡欧。東京で没、51歳(出典 わ眼) 洋画家

山本容子（やまもと・ようこ/1952年～）

浦和市生れ。1978年京都市立芸術大学西洋画専攻科修了、第2回日本現代版画大賞展・西武賞。80年エイボン女性年度賞芸術賞、京都市芸術新人賞。83年第4回韓国国際版画ビエンナーレ・優秀賞。92年講談社出版文化賞ブックデザイン賞。版画家

山本蘭村（やまもと・らんそん/1907～1977年）

東京生れ。文化学院卒。駿河台洋画研究所に学ぶ。藤田嗣治、野間仁根に師事。二科展に出品。1935年黒色会の設立に参加。38年二科会内の九室会に参加。個展中心に発表。67年日動サロン個展。新樹

会会員。文化学院で指導に当たる。東京で没、70歳。洋画家

山領まり（やまりょう・まり/1934～2020年）

福島市生れ。東京芸術大学専攻科卒。山領絵画修復工房を立ち上げて半世紀にわたって絵画の修復に取り組み、絵画修復の基準を作り上げてきた。戦後はGHQに接収された戦争記録画の修復や、パリ日本館の藤田嗣治の作品の日仏共同修復事業のほか、浮世絵、版画、文書など紙の美術作品、文化財の保存修復。1997年長野県上田市に開館した無言館に展示する戦没画学生の作品の修復を実施。修復家、山領絵画修復工房

山脇 巖（やまわき・いわお/1898～1987年）

長崎県生れ。1926年東京美術学校建築科卒。築地小劇場で舞台美術制作。30年渡欧。ゲッサウのバウハウス建築科に入学、フォト・モンタージュ学ぶ。32年帰国山脇建築研究所を開設。「ニューヨーク万博日本館」など設計。のち帝国美術学校校長、39年日本大学教授建築を講じた。87年没、88歳。洋画家、フォト・モンタージュ、建、美教

山脇信徳（やまわき・しんとく/1886～1952年）

高知市生れ。1909年文展で三等賞。10年東京美術学校西洋画科卒。「白樺」同人。22年渡満。23～26年春陽会員、客員参加。25～29年渡欧。29年国画創作協会洋画部会員。45年高知県洋画協会創立会長。47年高知県美術展覧会創始。高知市で没、65歳。洋画家

山脇敏男（やまわき・としお/1892～1974年）

新潟県生れ。1911年春上京して加納鉄哉の門をたいた。師に才能を認められ東京美術学校彫刻専科に入学したが、中退。24年帝展に木彫が入選、以後34年まで毎年入選。25年木彫界の大先輩内藤伸の知遇を得て師事、その主宰する木生会に加えられ奮起。36年文部省招待展に招待出品、37年新文展無鑑査出品。45年東京大空襲のためアトリエを焼失罹災して村上市に帰り、帰郷中には仏像製作に専念。65年日展委嘱出品、第10回日展出品で菊花賞、第11回日展で審査員、69年日展会員。木彫一筋に励んできた晩年を飾った。74年勲四等瑞宝章を受けた。東京で没、82歳。彫刻家

山脇(津田)敏子（やまわき・としこ/1887～1960年）

広島県生れ。女子美術学校で日本画を、関西美術学校で洋画を学ぶ。二科展、文展入選。1907年津田清風と結婚(のち離婚)。1919年朱葉会の結成に参加。23年農商務省嘱託として渡仏。文化学院等で手芸講師。26年再渡仏。29年山脇洋裁学院、47年山脇服飾美術学院創立。1960年没、73歳。洋画家、服飾デザイナー

山脇道子（やまわき・みちこ/1910～2000年）

東京生れ。東京女子高等師範学校付属高等女学校

卒。1930年渡欧、デッサウのバウハウスのテキスタイル工房で学ぶ。32年帰国、資生堂ギャラリーで「バウハウス織物個展」を開催。新建築工芸学院で造形プログラムに協力。帝展、実在工芸展に出品。著書「バウハウスと茶の湯」。2000年没、90歳。洋画家、テキスタイル

山脇洋二（やまわき・ようじ/1907～1982 年）

大阪生れ。母校東京美術学校で教え。1956年教授。金彩にたくみで、62年芸術院賞。文化財保護審議会専門委員。作品に「舞御堂小箱」など。1982年没、75歳。彫金家

矢柳 剛（ややなぎ・ごう/1933 年～ ）

北海道生れ。1951年星薬科大学入学、53年中退。57年ブラジルに渡り、同年サンパウロ近代美術館で個展を開催。65～68年パリに滞在し、アトリエ17でS・W・ヘイターに版画を学ぶ。70年代以降は立体も手がけ、現在もアート、デザイン、映像などの分野で国際的な活動。版画家、デザイン、映画

ゆ

湯浅一郎（ゆあさ・いちろう/1868～1931 年）

群馬県生れ。同志社英学校に入学。1888年生巧館画塾、天真道場に学ぶ。96年東京美術学校西洋画科選科3年に入学。96年白馬会の結成に加わる。1905～09年滞欧。帰国後、二科会の結成に参加。二科展中心に発表。東京で没、62歳。洋画家

湯浅一郎 II（ゆあさ・いちろう/1868～1931 年）

群馬県生れ。1888 年同志社英学校普通科卒。山本芳翠の生巧館画塾に入門。92 年第 4 回明治美術会展に出品、以後 5、7 回展にも出品。94 年天真道場に学ぶ。96 年白馬会の結成に参加。第 1 回白馬会展に出品。以後 13 回展まで出品。98 年東京美術学校西洋画科選科卒。1900 年巴里万国博覧会に出品。03 年第 5 回内国勸業博覧会に出品。04 年セントルイス万国博覧会に出品。05～10 年滞欧。08 年第 2 回文展に初入選、以後、5 回展にも出品。14 年二科会創立会員。31 年 2 月 23 日没、享年 62 歳。(佐)洋画家

湯浅龍平（ゆあさ・りゅうへい/1964 年～ ）

東京生れ。1982年米サンディエゴ移住。90年サンディエゴ州立大学美術科卒。スコウヒーガン絵画彫刻学校に学ぶ。92年カリフォルニア・インスティテュート・オブ・アーツ修士課程修了。96年ホルベイン・ペイント・アート・アワード受賞。97年昭和シェル石油現代美術賞。石膏などを混ぜて綿密に作った地に、表面を削ったり、さらに塗り重ねて層をつくりながら、「VOID」というテーマを描く。「昭和シェル石油現代美

術賞展」(1998 年)、「絵画の力 80年代以降の日本の絵画」(2003 年、東京都現代美術館)など作品発表。洋画家

油井一二（ゆい・いちじ/1909～1992 年）

長野県生れ。1924年三井尋常小学校高等科卒、28年に上京して神東電業社を経営する義兄のもとで働く。証券会社等へ転職を試みたのち、33年東洋美術協会に外交員として入社、再び絵画販売に従事する。34年荒井辰之助、清水栄一郎と共同出資し、日東美術協会を創立。以後、中国東北部、朝鮮半島、台湾等まで販路を広めた。39年10月、日東美術協会を独力で再開。同31年11月、東京・上野広小路に美術店を開いた。47年肖像画の制作依頼を業務の一環として始めた。48年山田正道から「美術年鑑」復刊の相談を受け出資。54年再び絵画販売を始め、現代日本画を中心に販路を開いた。65年「美術年鑑」の権利を創刊者山田正道から買いとり、65年株式会社美術年鑑社を設立、代表取締役社長。71年「新美術新聞」を創刊、出版。83年開館佐久市立近代美術館約780点の油井コレクションが母体。90年に油井一二記念館が併設され、没後の93年同館で「開館10周年記念展「近代日本美術の流れと油井コレクション」が開催。著書に『美の宝庫』(美術年鑑社)、自伝『風呂敷画商一代記』、続風呂敷画商一代記『片目の達磨』。東京で没、82歳。(引用 東文研)美術年鑑社長

油井夫山（本名;忠助）（ゆい・ふざん/1884～1934 年）

福島県生れ。東京美術学校西洋画科卒業。奥羽六県連合共進会美術展の幹事。亜欧堂研究に着手。白馬会展入選。福島県でアート・クラブ結成。光風会展入選。1923年福島洋画会結成。30年宮城県角田中学校教諭。34年没、51歳。(出典 わ眼)洋画家、美教

結城素明（ゆうき・そめい/1875～1957 年）

東京生れ。川端玉章(ぎょくしょう)の門下。平福百穂(ひやくすい)らと无声(むせい)会を結成。1916年百穂、鐙木清方、松岡映丘らと金鈴社を結成。日本画に洋画の写実を取り入れ、文展などで受賞。13～44年母校東京美術学校教授。25年帝国美術院会員。1957年没、81歳。日本画家、美教

結城正明（ゆうき・まさあき/1840～1904 年）

富山県生れ。江戸に出て、狩野勝川院に入門。江戸城新御殿障壁画制作に参加。1873 年青野桑州に洋式銅版画を学ぶ。77 年第 1 回内国勸業博覧会で

受賞。81年第2回内国勸業博覧会に出品。82年第1回内国絵画共進会に出品。85年フェノロサの第1回艦画会に出品。88年東京美術学校創立時に日本画展。91年東京美術学校字助教授。93年同校辞職。門下に横山大観、菱田春草らがいる。1904年3月6日没、享年64、65歳。(佐) **日本画家、美教、版画**

由木 礼 (ゆうき・れい/1928～2003年)

東京生れ。1952年品川工に師事。67年現代日本版画巡回展(スウェーデン)。70年春陽会・研究賞(99年岡鹿之助賞)。75年現代青年版画展(パリ近代美術館)。80年プレミオリソーネ国際版画展(イタリア)。81年個展(ドゥノン美術館・フランス)。82年20世紀木版画展(米)。96年個展(岩崎ミュージアム)。2003年没、75歳。 **版画家**

湯川雅紀 (ゆかづ・まさき/1966年～)

和歌山県生れ。1989年和歌山大学教育学部卒。91年大阪教育大学大学院美術教育研究科修了。96年ドイツ国立デュッセルドルフ芸術大学(クンスト・アカデミー)芸術学科留学、ヤン・ディベッツのもとでマイスターシューラー取得。「VOCA展 '98」VOCA賞。2002年度ポーラ美術振興財団在外研修生助成。 **洋画家**

幸 寿 (ゆき・ひさし/1911～2003年)

大分県生れ。早稲田大学中退後、独学で絵を学んだ。1936年独立展入選。40年から美術文化協会展に出品し、43年受賞、会員。56年から2年間大分の精神病院に起居し、「狂女シリーズ」を描く。58年新象作家協会の創立に参加。60年現代日本美術展に出品、東京、九州各地で個展。2003年没、92歳。 **洋画家**

湯田 寛 (ゆだ・ひろし/1923～1985年)

東京生れ。1943年京都市立絵画専門学校日本画科卒。47年大阪府豊中中教諭。49年パンリアル美術協会入会。58年京都アンデパンダン展に出品。64年現代日本美術展に出品。79年豊中中学校長。84年没、61歳。85年大阪ABCギャラリーで回顧展。 **日本画家、美教**

柚木祥吉郎 (ゆのき・しょうきちろう/1919～2005年)

倉敷市生れ。父は柚木久太。1931年東京美術学校油絵科卒。47年日展入選、48年一水会入選、51年日展特選。52年一水会フジエ賞、会員。53～58年岡山大学助教授、57年岡山県展審査員。64年ノートルダム清心女子大学家政学部助教授、77年同大

学児童学科長。80年春陽会会員。2005年没、86歳。 **洋画家、美教**

柚木玉郎 (ゆのき・ぎよくそん/1865～1943年)

倉敷市生れ。柚木玉洲の養子となる。東京農林学校卒後、第八国立銀行取締役などを歴任。実業界で活躍する傍ら、倉敷市玉島に來訪していた清国の画家・胡鐵梅に南画を学び、訪中して宋元の絵画も研究した。流麗な水墨画を描き、また詩書にも通じ、県下を代表する文人。 **南画家**

柚木沙弥郎 (ゆのき・さみろう/1922年～)

東京生れ。柚木久太と寿の次男。1942年東京帝国大学入学。46年大原美術館に勤務。47年芹沢銈介に弟子入。50年女子美術大学工芸科専任講師。72年女子美術大学教授。87～91年女子美術大学・女子美術短期大学学長。58年ブリュッセル万国博覧会(EXPO'58)で型染型紙が銅賞。90年宮沢賢治賞。93年渋谷区立松濤美術館で「柚木沙弥郎の染色」展開催。96年絵本「魔法のこぼれ」が「子どもの宇宙」国際図書賞(スイス)。2012年神奈川県立近代美術館鎌倉別館で「柚木沙弥郎」展を開催。14年フランス・パリ 国立ギメ東洋美術館で「La Danse des formes 柚木沙弥郎」展を開催。18年日本民藝館特別展「柚木沙弥郎の染色 もようと色彩」展を開催。 **染色作家、絵本、洋画、版画**

柚木久太 (ゆのき・ひさた/1885～1970年)

倉敷市生れ。父は南画家柚木玉郎。1906年満谷国四郎に師事、07年太平洋画会研究所に学び、東京美術学校に聴講。11年文展に入選、11～15年渡仏留学、アカデミー・ジュリアンでローランスに師事帰国。16年文展で特選。19、22年帝展で特選。25年帝国美術院展委員。55年和田三造等と新世紀美術協会創立に参加、会員。57年新日展会員。70年日展参与。倉敷市で没、85歳。 **洋画家**

由里 明 (ゆり・あきら/1911～1984年)

京都府生れ。1930年京都府師範学校卒。35年独立美術京都研究所で須田国太郎に師事。39年文展入選。41年京展で市長賞、渡欧。47年京展で京展賞。51年光風会会員。54年日展で特選。京都精華大学美術学部教授。82年日展会員。84年没、72歳。 **洋画家、美教**

よ

陽 咸二 (よう・かんじ/1898～1935年)

東京生れ。1915年小倉右一郎に入門。18年文展

に出品、入選。22年帝展で特選。写実主義より、ギリシャ彫刻のクラシック前期の影響を受け、独自の様式樹立。29年構造社会員。35年帝国美術院の指定、「壮者」、「降誕の釈迦」、「サロメ」、「千一夜物語」等が彼の代表作。1935年没、37歳。彫刻家

楊斎延一（ようさい・のぶかず/1872～1944年）

1872年生れ。楊洲周延の門人。1887～1907年、主に、日清戦争、日露戦争などの戦争物の錦絵を描いて名を上げた。また、他に美人画や風俗画、博覧会、憲法、国会関係、「東京名所」連作なども手がけた。代表作として「陸海軍大演習之図」、「参謀本部会議之図」、「大元帥陛下新橋御発輦ノ図」などがあげられ、その他に「大日本国会議事図」や「東京名所上野公園之景」などの3枚続も描いている。明治20年代には石版画も描き、晩年には肉筆画を描いた。1944年没、73歳。明治時代の浮世絵師

楊洲周延（ようしゅう・ちかのぶ/1838～1912年）

越後生れ。彰義隊とともに上野戦争、函館戦争に参加している。国芳および三代豊国に画を学ぶ。明治期にはかつての江戸城での武士や女官の生活を作品化し、「官女絵」と呼ばれる分野を確立した。当時の最新の風俗を細やかに描き、洋装美人や女学生など美人画においても著名であった。浮世絵師、武士

葉 祥明（よう・しょうめい/1946年～）

熊本市生れ。絵本『ぼくのべんちにしらいとり』でデビュー。1990年絵本『風とひょう』でボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞。91年北鎌倉に葉祥明美術館を開館。2002年に故郷の阿蘇に葉祥明阿蘇高原絵本美術館を開館。郵政省ふみの日記念切手にメインキャラクターの“JAKE”が採用。『地雷ではなく花をください』（日本絵本賞読者賞受賞、『イルカの星』、『おなかの赤ちゃんとお話しようよ』、『心に響く声』などの作品が好評。絵本作家、洋画家、詩人

横井弘三（よこい・こうぞう/1889～1965年）

長野県飯田市生れ。早稲田大学中退。絵は独学。1915年二科展で樗牛賞。16年二科賞。30年初のアンデパンダン展開催。44年長野に疎開。焼き絵など独特な画法。62年一水会会員。素朴派、稚拙派を名乗る。長野県で没、76歳。洋画家

横井玉子（よこい・たまこ/1855～1903年）

熊本県生れ。肥後国(熊本県)高瀬藩の家老原尹胤の次女として、江戸藩邸で生まれる。夫は横井小楠の甥左平太(時治)。横井津世子、矢嶋楯子姉妹らの薫陶

を受け、浅井忠に油絵を学ぶ。女子学院に奉職、裁縫、礼式、割烹、洋画を教え、舎監を務める。1901年女子美術学校(女子美大)を創立した。日本基督教婦人矯風会の種々の請願の発起人のひとりでもあった。〈参考文献〉『女子美術大学八十年史』、林えり子『続・結婚百物語』。1903年没、48歳。明治期の教育家、女子美術学校創立者

横井礼以（よこい・れいゐ/1886～1980年）

愛知県生れ。1906年白馬会洋画研究所に学ぶ。12年東京美術学校西洋画科卒。19年二科賞。23年二科会会員。30年名古屋に緑ヶ丘中央洋画研究所を設立。47年第二紀会(のち二紀会)創立会員、同会委員。67年勲四等瑞宝章。68年名古屋造形大学短期大学名誉教授。名古屋市で没、93歳。(出典 わ眼洋画家、美教

横江嘉純（よこえ・よしずみ/1887～1962年）

富山県生れ。1906年京都美術工芸学校卒、14年東京美術学校彫刻科卒。18年文展入選、26年特選、27年帝展で帝国美術院賞。29年帝展審査員、文展、日展審査員。30年、36年研究のため渡欧し欧州各地の彫刻を見学。51年日展で文部大臣賞、参事、評議員。作品は「大乘」、「望洋」、「母と子」、55年東京駅中央口前広場に建立された「愛の像」の制作者としても著名。東京で没、74歳。彫刻家

横尾 茂（よこお・しげる/1933～2012年）

新潟県生れ。1960年文化学院卒。山口薫、佐藤忠良に学ぶ、大森絵画研究所でデッサン研究。61年自由美術展入選、64年佳作作家に推薦、65年同会員、74年自由美術賞。自由美術協会の井上長三郎、山下菊二、一木平蔵らによるグループ展(日本画廊)に参加し、76年10月同画廊で個展。77年安井賞。79、80、81年「明日への具象展」に出品。85年に郷里の新潟浦川原にて「横尾茂の世界 雪と土とそしてふるさと」展を開催。88年にも浦川原芸術祭で「横尾茂と郷土の作家達展」を開催する。2012年没、78歳。洋画家

横尾忠則（よこお・ただのり/1936年～）

兵庫県生れ。1952年西脇高校入学、在学中、挿絵の通信教育を受ける。58年日宣美展で奨励賞。62年東京アートディレクターズ・クラブ銀賞。67年ニューヨーク近代美術館にポスター15点買上げ。69年パリ青年ビエンナーレ版画部門グランプリ。72年ニューヨーク近代美術館で個展。81年「画家宣言」。2002年東京都現代美術館で個展。多摩美術大学大学院教授。洋画家、版画家、美教、ポスター、デザイン

横尾龍彦（よこお・たつひこ/1928～2015年）

福岡市生れ。1950年同大学日本画科卒。65年渡

欧、パリ滞在。66年東京銀座青木画廊で個展。73年芸術出版社より『横尾龍彦画集』を刊行。75年ベルギー、ドイツ旅行、ウィーン滞在。78年『横尾龍彦作品集』刊行。79年挿画。80年ドイツ滞在。89年聖像彫刻で第14回吉田五十八賞(建築美術の部)。93年秩父市黒谷に、翌年ベルリン郊外にアトリエを開設。2000年翌年北九州市立美術館での個展開催。15年東京のキッド・アイラック・アート・ホールで帰国記念展「みちすがら」を開催。2015年没、87歳。洋画家、彫刻

横尾泥海男 (よこお・でかお/1899～1956 年)

佐賀県生れ、1922年東京美術学校西洋画科本科卒。栃木県立宇都宮高等学校教師。23 年松竹蒲田撮影所美術部入社、のち助監督に昇進。25年より俳優に転向。31年不二映画社設立に参加、32年浅草公園劇場に喜劇爆笑隊を旗揚げ。56年没、56歳。洋画家、美教、映画

横田 海 (よこた・かい/1934 年～)

東京生れ。1959年新宿美術研究所で麻生三郎、山口長男の指導を受ける。77年現代画廊で企画展5回開催。89年より美術ジャーナル画廊、93年よりギャラリー銀座汲美で個展。2002年新宿小田急で個展。08年よりギャラリーゴトウで個展。洋画家

横田建三 (よこた・けんぞう/1930～1983 年)

熊本県生れ。1949年熊本師範学校卒。海老原喜之助に師事し、51年独立美術協会に出品。54年京都学芸大学特設科卒、彫塑を学ぶ。倉敷市の中学校教員。海老原の紹介で坂田一男を訪ね、A.G.O.に参加。岡山県立豊学校に勤務。岡山青年美術家集団結成に加わる。汎瀬戸内現代美術展を企画。1983年没、53歳。洋画家、美教

横田善夫 (よこた・よしお/1933年～)

新潟県生れ。1958年東京声専音楽学校卒。65年二科展入選、67年二科展特選(大蔵省収蔵)。69年フランス・ドイツ他自転車にて写生旅行・出光美術館収蔵。75年東南アジア旅行。77年神戸・東京大丸で個展。ヨーロッパ各地ののどかな風景を点描画という独特の表現、技法を用いて作成。洋画家

横地康国 (よこち・やすくに/1911～1990 年)

東京生れ。華道相阿弥流家元、華名宗象円。海城中学校卒。1937年帝国美術大学西洋画科を首席で卒。34年JAN(青年美術家集団)を結成。39年美術文化協会創立に参加、会員。49年独立賞。51年独立美術協会会員、51年武蔵野美術学校講師、62年

武蔵野美術大学教授。64年G賞。65年華道相阿弥流家元19世を継承。81年武蔵野美術大学図書館で回顧展。84年東京セントラル美術館で回顧展。東京で没、78歳。華道家元、洋画家

横手貞美 (よこて・さだみ/1899～1931 年)

宮城県生れ。1919 年海星中学卒。上京し、小林万吾の同舟舎、岡田三郎助の本郷絵画研究所に学ぶ。東京美術学校を受験するも不合格。光風会展、日本水彩画会展に出品。27 年渡欧。28 年サロン・ドートンヌに出品。以後、29 年、30 年にも連続出品。29 年アンデッダ展に出品。以後、29 年、30 年にも連続出品。31 年 3 月 22 日パリで没、享年 31 歳。同年遺作展が第 18 回二科展ほかで開催された。(佐)洋画家

横手貞美 II (よこて・さだみ/1899～1931 年)

宮城県生れ。1919年中学校卒業後、上京。小林萬吾の同舟舎で木炭画を学ぶ。本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事、山口長男、大橋了介に出会う。1927 年山口長男、荻須高德、大橋了介と渡仏、サロン・ドートンヌに出品。佐伯祐三を訪ね影響を受ける。1931 年フランスで没、31歳。洋画家

横堀角次郎 (よこぼり・かくじろう/1897～1978 年)

群馬県生れ。椿貞雄を知る。岸田劉生に師事。1915 年巽画会展で三等賞。草土社創立同人。23、24 年春陽会展。24 年三岸好太郎らと麗人社を結成。30 年春陽会会員。東京で没、81歳。洋画家

横溝 洋 (よこみぞ・ひろし/1928～1990 年)

東京生れ。1951年早稲田大学理工学部応用化学科卒、猪熊弦一郎に師事。52年読売アンデパンダン展に対象を抽象的形体にデフォルメした「工場」を出品。80年国画会展に入選し、87年同会会友。73年インド、スリランカへ、翌年インド、ネパールへ、76年トルコ、イラン、アフガニスタンへ赴き、帰国、個展開催。80年前後中国、西域を中心に旅している。作品は早くから抽象的傾向が強く、晩年には「系」のシリーズを追求し、幾何学的形体と強烈、明快な色彩で宇宙の律を表現。86年国画会会員。東京で没、62歳。洋画家

横山繁行 (よこやま・しげゆき/1894～1946 年)

熊本県生れ。玉名中学校卒業後上京し、1921年東京美術学校西洋画科卒、専攻科に進んだ。26～35 年まで玉名中学校、ついで満州に渡り奉天で終戦まで図画教員をつとめた。立教大学校庭の《夕陽を受けた》は帝展入選作。1946年没、52歳。洋画家、美教

横山潤之助（よこやま・じゅんのすけ/1903～1971 年）

東京生れ。渋沢秀雄から絵の手ほどきを受け、川端画学校に学ぶ。1921年二科展に入選。23年古賀春江らと美術団体「アクション」を創立。22年二科展で樗牛賞。24年二科賞、二科会会員。25年中央美術展会友。29～30年渡欧米。45年空襲で自宅、3000点の作品を焼失。52年岐阜に移住。岐阜県で没、68歳。洋画家

横山申生（よこやま・しんせい/1932 年～ ）

福岡県生れ。1949～51年坂本繁二郎に師事。55年武蔵野美術学校卒。56～59年日展入選・示現会受賞2回。73～76年訪仏。75年ル・サロン展で銀賞。76～77年仏国際展招待出品、ル・サロン展でアンリエットバットマン賞、ル・サロン会員。77～82年日洋展連続入選、日洋展三越奨励賞。80年コレクター選公募展にてグランプリ、日仏有名作家展出品（三越本店）。三越本店、東急本店、小田急百貨店、銀座松坂屋、そごう百貨店、大丸百貨店、阪神百貨店で個展。日本美術家連盟会員、フランス芸術家協会会員（ル・サロン）。洋画家

横山泰三（よこやま・たいぞう/1917～2007 年）

高知市生れ。京華商業学校に転じる。油彩画家を目指し、川端画学校で3年間洋画を学ぶ。帝国美術学校入学、1944年中退。白木屋宣伝部に勤務し、ポスターの製作に従事。雑誌『大阪パック』に投稿した漫画作品が一等。戦後、『新夕刊』の専属として連載小説の挿絵。洋画家としても活動し、展覧会開催。毎日新聞夕刊および週刊新潮に連載された「プーサン」、朝日新聞朝刊に連載された1コマ漫画『社会戯評』などの風刺漫画で知られ、痛烈なアイデアと独特な画風で「戦後の漫画界に新風を巻き起こした」。漫画家の横山隆一は実兄。54年菊池寛賞（『プーサン』）。81年紫綬褒章。88年勲四等旭日小綬章。鎌倉市で没、90歳。漫画家、挿絵、洋画

横山大観（よこやま・たいかん/1868～1958 年）

水戸市生れ。1887年東京美術学校創設の話を聞いて画家を志し、89年美術学校開校と同時に入学。岡倉天心の薫陶を受けた。卒業後は模写事業などに従事したが、98年天心が日本美術院を創立した際、これに参加する。洋画表現の導入によって日本画の革新を目指したが、その画法は「朦朧体」と悪罵され、茨城県五浦に天心とともに移住、研鑽生活を送った。1907年文展開設とともに審査員。新旧両派の対立から14年除名され、同年日本美術院を再興。以後生涯にわたって美術院を率いて活躍した。31年帝室技芸

員。35年帝国美術院会員、37年第1回文化勲章を受章、帝国芸術院会員。日本画家

横山貞二（よこやま・ていじ/1952 年～ ）

愛知県生れ。1976年武蔵野美術短期大学卒。79年春陽展。86年個展（77 ギャラリー・銀座、92、94、96年も）。87年西武美術館版画大賞展。89年個展（渋谷西武百貨店美術画廊、90、94年も）。版画家

横山松三郎（よこやま・まつさぶろう/1838～1884 年）

千島エトロフ島生れ。1861年ロシア人画家・レーマンの助手、西洋画法と写真術を学ぶ。上海に渡航した。64年横浜の下岡蓮杖を訪ね、写真術と石版術を習い、68年江戸両国に写場を設立。71年旧江戸城を撮影。73年上野不忍池畔に私塾を開いた。76年から陸軍士官学校で石版術と写真術を指導した。78年輕気球の飛揚を撮影。80年に写真と油絵を融合させた「写真油絵」を考案。翌年陸軍士官学校を辞して写真石版社を設立した。1984年没、47歳。写真家、石版画

横山 操（よこやま・みさお/1920～1973 年）

新潟県生れ。1934年上京。39年川端画学校に学ぶ。45年シベリア抑留、50年に帰国。同年の青龍社展入選。56年青龍社展で青龍賞。58年轟会を結成。日本国際美術展優秀賞。61年渡米、以後個展を中心に作品発表し水墨画も描く。66年多摩美術大学日本画科教授。東京で没、53歳。日本画家、美教

与謝蕪村（よさ・ぶそん/1716～1783 年）

摂津生。姓は谷口、のち与謝、俳号を宰鳥・宰鳥夜半亭等、画号を四明・朝滄・長庚・春星、晩年謝寅と号する。夜半亭宋阿に俳諧を学び、絵は各派・中国画・舶載画譜により画法を修得し独自の画風を固め、池大雅と共に活躍した。1783年没、67歳。江戸中期の俳人・画家

吉井淳二（よしい・じゅんじ/1904～2004 年）

鹿児島県生れ。1929年東京美術学校卒。在学中白日会展白日賞。二科展入選、40年二科会会員。46年に南日本美術展を創設し、海老原の死後は同展の審査委員長。終戦後、東郷青児らと二科会の再建に尽力し、79年二科会理事長に就任。65年日本芸術院賞、76年日本芸術院会員、89年文化勲章。2004年没、100歳。洋画家

吉井 忠（よしい・ただし/1908～1999 年 ）

福島市生れ。1926年太平洋画会研究所に学ぶ。36年エコール・ド・東京に参加。36年渡欧。38年創紀美術協会結成。39年美術文化協会結成。47年自由美術協会に参加。64年主体美術協会結成。92年福

鳥島立美術館で「吉井忠展 大地に響く人間の詩」開催。99年没、91歳。洋画家

吉井長三（よしい・ちようぞう/1930～2016年）

広島県生れ。日本を代表する銀座の老舗ギャラリー「吉井画廊」のオーナーとしてフランス近現代絵画の魅力在国内に伝える一方、富岡鉄斎、梅原龍三郎、東山魁夷ら日本人画家をヨーロッパに紹介。日仏間の文化交流に尽力した功績から、97年紺綬褒章、2007年フランス国家功労勲章コマンドゥール。2016年没、86歳。美術商、吉井画廊創業者会長、青春白樺美術館理事長

吉江 審（よしえ・ただす/1948～1999年）

長野県生れ。1971年東京デザイナー学院卒。東京デザイナー学院専任講師、色彩教育研究企画室長、日本情操教育振興会常任理事。著書76年「やさしいシルクスクリーン」、91年「スクリーンプリントテクニック」。99年没、51歳。版画家、デザイン、美術

吉江新二（よしえ・しんじ/1919年～）

長野県生れ。東京美術学校で日本画を学ぶが、のち洋画に転じ、戦後主体美術協会の創立に参加。社会を鋭く見据えながら、絵画表現に挑みつづけている。繊細でしなやかな線による独特の奥行きがある半具象の作品や、緊張する色面により構成された抽象的な作品がある。洋画家

吉岡 憲（よしおか・けん/1915～1956年）

東京生れ。川端画学校に学ぶ。1935年ハルビンに滞在。聖ウラジミール専門学校卒。39年帰国。43年独立展で独立賞。48年独立美術協会賞。49年日大芸術学部講師。東京で没、40歳。（出典 わ眼）洋画家

吉岡 憲 II（よしおか・けん/1915～1956年）

東京生れ。川端画学校に学び、満州に渡り、聖ウラジミール専門学校に学ぶ。ハルビンに7年滞在、1940年帰国。43年独立美術協会賞。ジャワで文化指導。ジャワ美術学校創設の基礎を築いた。独立展で独立賞、47年準会員、48年会員。49年日大芸術学部講師。日本国際美術展、アンデパンダン展にも作品を発表。東京で没、40歳。洋画家

吉岡堅二（よしおか・けんじ/1906～1990年）

東京生れ。1921京華商業学校を中退、野田九浦に入門、画塾居仁洞で学ぶ。22年中央美術社第3回展で入選。25年油彩で自画像を描くなど、洋画も吸収。

26年帝展に入選。30、33帝展で特選。38年新美術人協会、48年創造美術（現創画会）をおこし、日本画の革新運動を展開。法隆寺金堂壁画模写などにも従事。東京芸大教授。71年芸術院賞。1990年没、83歳。

日本画家、挿絵

吉岡耕二（よしおか・こうじ/1943年～）

大阪生れ。1962年大阪市立工芸高等学校美術科卒。67～81年渡仏、パリ国立美術学校に留学。68年サロン・アーティスト・デ・フランセーズ受賞。75年サロン・ドートンヌ正会員。81年帰国（14年間）。85年梅田阪急百貨店にて個展。88年西武百貨店（渋谷・大宮・船橋）にて個展。97年西武百貨店（渋谷・大宮・船橋）にて個展。Bunkamura Galleryで98年から11回個展。2013年台北の東呉大学で個展。洋画家

吉岡 一（よしおか・はじめ？/1930年～）

大阪生れ。大坂学芸大学卒。1955年関西独立賞。大阪フォルム画廊で個展。73年安井賞展出品、奨励賞。朝日新人展招待、現代秀作展招待出品。洋画家

吉岡弘昭（よしおか・ひろあき/1942年～）

名古屋市長生れ。1957年独学で油絵を描き始める。69年独学で銅版画制作を始める。75年日本版画協会出品・準会員推挙。87年名古屋市芸術奨励賞。88年「吉岡弘昭全版画 1967-1987」刊行。89年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展招待出品。90、94年ソウル国際版画ビエンナーレ展正体出品。2001年個展「吉岡弘昭 初期銅版画から今日まで展」（佐喜真美術館・沖縄）。13年「『吉岡弘昭全銅版画 1967-2013』出版記念展」（名古屋芸術大学アート&デザインセンター）。版画家

吉岡正人（よしおか・まさと/1953年～）

大阪生れ。1974年渡仏（アカデミーG ショミエール等）。80年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒、優秀賞。81年安田火災美術財団奨励賞。82年二紀展同人に推挙、88年同人優賞、91年会員。82年筑波大学大学院修了。91年個展（紀伊國屋画廊）。92年文化庁芸術家在外研修員として渡伊（ローマ、～93年）。93年個展（日本橋三越本店、大阪三越）。2000年前田寛治大賞展大賞。09年二紀展文部科学大臣賞。12年現在埼玉大学教授、二紀会委員。洋画家

吉加江京司（よしかえ・きょうじ/1909年～1993年）

宮崎市長生れ。1932年津田青楓洋画塾、33年独立美術京都研究所で学ぶ。38年独立美術展に出品。

美術文化協会会員。54年アルファ芸術陣に参加。新象創立に参加。中心的な会員として活躍。93年没、84歳。洋画家

吉川 清 (よしかわ・きよし/1903～1956 年)

群馬県生れ。時宗々学院に学び、1925年東洋大学卒。その間、川端画学校に学ぶ。36年青年美術家連盟に出品。37～42年まで春陽会に出品。43年以降は独立展に出品。53年独立美術協会会員。40年以来、藤沢市遊行寺の真徳寺住職。宗教画を描いた。時宗の研究家で「一遍上人」を著した。藤沢市で没、53歳。洋画家、僧

吉川三伸 (よしかわ・さんしん/1911～1985 年)

名古屋生れ。1937年福沢一郎に師事。ナゴヤ・アヴァンギャルドクラブ結成。39年美術文化協会の設立に参加。40年美術文化協会賞。48年年美術文化協会会員。52年タケミヤ画廊個展。54年「アルファ芸術陣」結成。58年新象作家協会創立に参加。名古屋で没、74歳。(出典 わ眼) 洋画家

吉川豊華 (きつかわ・れいか/1875～1929 年)

東京生。幕儒吉川淡斎の子。浮世絵師橋本周延の門に入り、のち狩野派・土佐派を学ぶ。一時橋本雅邦や洋画家の小山正太郎に師事する。国史内典・有職故実に通じ、冷泉為恭に私淑して、大和絵風の画境を創り、端麗な白描画を能くした。金鈴社同人。帝展審査員。1929年没、55歳。日本画家

吉田嘉三郎 (よしだ・かさぶろう/1861～1894 年)

大分県生れ。晴野鴻洲に日本画を学び、田村宗立に師事して3年間洋画を学び、彰技堂に入った。1881年内国勸業博覧会に出品。82、84年内国絵画共進会に出品。89年福岡県立中学修猷館助教授。「中学図画帳」、図画教科書の編纂。教え子だった博の画才を見込み、養子。89年創立された明治美術会の通常会員。1894年没、33歳。洋画家

吉田カツ (よしだ・かつ/1939～2011 年)

兵庫県生れ。大阪美術学校デザイン科卒。1971年上京。74年『ローリング・ストーン』誌等、各誌のイラストレーションを手がける。77年アートディレクター石岡瑛子と組み PARCO のポスターや雑誌『野性時代』表紙、西武劇場「サロメ」のポスター制作。79年青山のグリーン・コレクションズで個展、イラストの領域に留まらない絵画活動を展開。85年フジサンケイグループのシンボルマーク、全日空機内誌『翼の王国』表紙イラストを制作。2005作品集に『吉田カツ・セクサス』(美術出版社、1980年)。兵庫県で没、72歳。イラスト、デザイン、版画

吉田勝彦 (よしだ・かつひこ/1947年～)

東京生れ。1969年多摩美術大学絵画部油絵科卒、71年東京藝術大学大学院版画専攻科入学。72年東京藝術大学大学院修了。大橋賞。74年春陽会展出品し新人賞、78年春陽会展賞、80年会員。75年ベネズエラ、アルマンド・レベロン美術学校で特別版画教授。個展多数。81年画集『Meditación Secada』刊行。86年絵本、かがくのとも『えぞまつ』(福音館書店)出版。2005年「小さな永遠～吉田勝彦の版画」(愛媛県美術館分館)。版画家

吉田克朗 (よしだ・かつろう/1943～1999年)

埼玉県生れ。1968年多摩美術大学絵画科卒。斎藤義重教室で学ぶ。「もの派」作家。69年シルクスクリーン制作。70年ソウル国際版画ビエンナーレで大賞受賞。73年～文化庁芸術家在外研修員英国。80年代からは絵画の制作。82年鎌倉中央公民館の壁画を制作。97年から武蔵野美術大学教授。1999年没、56歳。洋画家、モノ、立体、美教、版画

吉田貫三郎 (よしだ・かんざぶろう/1909～1945 年)

明治42年生まれ。昭和7年横山隆一らの新漫画派集団に参加。のち挿絵に転じ、怪奇推理小説から現代小説、時代小説まで幅ひろく手がけ、代表作に吉川英治「大都の春」、久生十蘭(ひさお-じゅうらん)「魔都」などがある。昭和20年中国広東(カントン)で戦病死。37歳。兵庫県出身。神戸商業卒。本名は貫一。随筆に「蟹(かに)の爪」。挿絵画家

吉田喜蔵 (よしだ・きぞう/1889～1944 年)

大津市生れ。黒田清輝に師事。1926～27年フランスに留学。洋画研究所を経営後進の指導に当たった。27年帝展に「南仏風景」出品後はもつぱら個展により、パステル画が多かった。1944年没、55歳。洋画家

吉田久継 (よしだ・きゅうけい/1888～1963 年)

東京生れ。東京美術学校卒。1918年文展入選、20年帝展特選、のち帝展審査員。エッチングも手がけ、29年洋風版画会創立に参加。日展評議員。1963年没、74歳。1963年没、74歳。彫刻家

吉田 清 (よしだ・きよし/1927～2006 年)

東京生れ。44年電機高校を中退。古美術商水戸幸に入店し、56年有限会社赤坂吉田を設立して同社代表取締役。58年同社を有限会社赤坂水戸幸と改称。61年から63年まで東京美術倶楽部青年会理事長。第二次大戦で行方や消息が不明であった佐竹本三

十六歌仙絵を一堂に集めた「佐竹本三十六歌仙展」を開催。東京美術倶楽部で81年監査役、83年取締役、97年代表取締役。東京美術商協同組合で66年理事、77年専務理事、91年理事長、99年全国美術商連合会会長。宗翠と号して茶の湯をよくし、79年財団法人小堀遠州顕彰会理事、84年光悦会役員、86年財団法人 MOA 美術館光琳茶会役員、2000年大師会理事となり、東都茶道界の重鎮であった。著書に『佐竹本三十六歌仙図録』(共著、東京美術青年会、1962 年)、『古筆手鑑梅の露』(書芸文化院、1964 年)、『写経手鑑紫の水』などがある。2006年没、79歳。東京美術倶楽部代表取締役

吉田謙吉 (よしだ・けんきち/1897～1982 年)

東京生れ。1915年府立工芸学校金属科鑄金科卒、葵橋洋画研究所に学ぶ。22年東京美術学校図案科卒。22年二科展に入選。装飾美術グループ「千頭者」結成。23年「アクション」に参加。23年今和次郎らの「バラック装飾社」に参加。「MAVO」に参加。24年三科造形美術協会に参加。24年築地小劇場創立メンバー、松竹歌劇団の舞台装置を担当。舞台美術家。日本大学、多摩美術大学、玉川大学で演劇科教鞭。60年日本マイム協会創立、会長。東京で没、85歳。洋画家、舞台美術、美教

吉田堅治 (よしだ・けんじ/1924～2009 年)

大阪生れ。1944年に大阪第二師範学校卒業、土浦海軍航空隊にて訓練を受ける。46年から池田市立呉服小学校、51年に上京し、大田区立入新井第二小学校の美術教師。64年渡仏、スタンリー・ウィリアム・ヘイターの版画工房アトリエ 17 で学ぶ。アトリエ・デュ・ノールに加わり、ノルウェー政府から奨学金。67年にアペル・レ・フェノザから彫刻を学ぶ。90年 3 ヶ月間メキシコに滞在し、マヤ・シリーズを制作。「生命」をテーマにした絵画を多く描いた東京で没、84歳。2010年 NHK 総合テレビにてドキュメンタリー番組「生命(inochi)～孤高の画家 吉田堅治～」が放送。洋画家

吉田 敏 (よしだ・さとし/1915～1965 年)

宮崎県生れ。1935年宮崎県師範学校卒。県内の小中学校に勤務。58年[日本水彩展]奨励賞。59年[日本水彩画会]賞。59年会友、無鑑査。その後も毎年出品を続ける。65年[宮崎美術家集団]展に出品。小林中学校の在職中、1965年没、50歳。66年に宮崎市と小林市で遺作展。90年東京で遺作展。美教、水彩画

吉田三郎 (よしだ・さぶろう/1889～1962 年)

石川県生れ。1912年東京美術学校彫塑科卒。18

年文展特選、19年帝展特選、22年帝展審査員。31年文部省の命により古代彫刻研究のため一年間仏、イタリア、北米に留学。35年多摩美術短期大学彫刻科教授。43年日本美術及工芸会理事。50年日本芸術院賞受賞。日展運営会参事。55年日本芸術院会員。58年日展常務理事。61年日本彫塑家クラブ委員長。東京で没、72歳。彫刻家

吉田茂承 (よしだ・しげつぐ/1931 年～)

山口県生れ。工業高等学校卒、山口県庁の職員を経て上京。1959年東映動画に入社し、『レインボー戦隊コピン』『魔法使いサリー(旧)』などの原画・動画を手掛けた。69年Aプロダクションへ移籍、演出家として、東京ムービー作品を中心に活躍。のちフリーの演出家に。80年代は、“TMS 少女アニメ路線 3 部作”(『おはよう!スパンク』『とんでモン・ペ』『レディジョージ』)のチーフディレクタ、『ピーターパンの冒険』などのコンテ・演出。水彩画家として活躍中である。アニメーター、アニメーション演出家、水彩画

吉田 苞 (よしだ・しげる/1883～1953 年)

岡山市生れ。1908年東京美術学校西洋画科卒。10年同校研究科修了。児島虎次郎らと岡山洋画研究所創設。15年文展に入選。19～42年第六高等学校講師。20年渡仏。21、22年帝展で特選。13年光風会会員。29～34年対露宣戦御前会議の壁画制作(児島虎次郎没後)。53年岡山市文化賞。岡山市で没、70歳。洋画家、美教

吉田 卓 (よしだ・たく/1897～1929 年)

広島県生れ。上京、正則中学校卒。1920 年頃、川端画学校、本郷洋画研究所に学ぶ。22年第9回二科展に初入選。以後、15 回展まで出品。26 年台湾旅行。第1 回聖徳太奉賛展に出品。第13 回二科展で二科賞。28 年第9 回中央美術展に出品し会友。日本水彩画会会友。第15 回二科展に無鑑査出品。同会会友。29 年2 月25 日大阪で没、享年32 歳。(佐)洋画家

吉田たすく (よしだ・たすく/1922～1987年)

廃れていた「組織織」「風通織」を研究・試織を繰り返して復元。風通織に新しい工夫を取り入れ「たすく織綾綴織(あやつづれおり)」を考案。難しい織りを初心者でも分かりやすい『紬と緋の技法入門』として刊行する。1957年新匠工芸会展で着物「水面秋色」を発表し稲垣賞を受賞。新匠工芸会会員。鳥取県伝統工芸士。染織家・緋紬研究家

吉田達磨 (よしだ・たつまる/1910～1995 年)

福岡県生れ。1928年大谷大学入学。36年に画業に専念を決心、春陽会展入選、43年会員。文展無鑑査。牡丹や枯蓮などをモチーフとした骨太な画風の

静物画、風景画を多く描いた。戦後も晩年まで一貫して春陽会に出品を続け、インドやネパールなどの仏教遺跡を訪ね歩いて描いた風景画などに新境地を拓いた。1995年没、85歳。洋画家

吉田千鶴子（よしだ・ちづこ/1924年～）

神奈川県生れ。佐藤高女(現女子美大付属高)卒。北岡文雄、夫の吉田穂高に木版画を学ぶ。のち木版と亜鉛凸版を併用。1954年日本版画協会会員。70年グレンヘン色彩版画トリエンナーレ展で佳作賞。抽象作品や、星、蝶を主題とする連作を制作。版画家

吉田遠志（よしだ・とおし/1911～1995年）

東京生れ。父は博、母はふじを、弟は穂高。父に木版画を学ぶ。同舟舎デッサン研究所に学ぶ。1935年太平洋画美術学校卒。30年以降父と世界各国を写生旅行。太平洋画会展に出品。50年プラス美術家群を創立。52年日本版画協会会員。52年NYのジャパン・ソサエティの協力でアメリカ各地で木版画の講演、技法紹介。66年以降しばしば渡米、米国各地で講演会、展覧会を開催。80年長野に「美麻文化センター」を創立、木版画等技術指導。88年絵本にっぽん賞。東京で没、83歳。洋画家、版画、美教、水彩

吉田俊雄（よしだ・としお/1924～2001年）

岡山市生れ。1952年東京芸術大学油画科卒。52～61年独立美術協会出品、新人賞、ブルヴ賞、独立賞。61～68年米欧留学。NYアート・ステューデント・リーグで学ぶ。69年立軌会会員。世界各地へ取材旅行をし、働く人々や素朴な民衆の姿を描きつけた。2001年没、77歳。洋画家

吉田稔郎（よしだ・としお/1928～1997年）

神戸市生れ。具体美術協会の創立メンバー、1955年～解散まで出品。絵筆を使わない作品作りを特徴とし、初期には板に穴を開けた作品や板に焦げ目をつけた作品などを制作、60年代にはスポンジを使った作品から泡を使った作品へと展開。70年万国博覧会でみどり館グタイグループ展示と屋外展示「ガーデン・オン・ガーデン」に出品、具体美術まつりのフィナーレでの大掛かりな作品を手掛けた。具体美術協会の記録、会計、連絡の事務局役割を担い、吉原治良の秘書役も兼ねた。1997年没、69歳。洋画家、具体、立体

吉田利次（よしだ・としじ/1916～1998年）

大坂生れ。1932年赤野塾洋画研究所、中之島洋画研究所に学ぶ。35年全関西洋画展入選。戦後、二科展に出品。50年大阪市立美術館の美術研究所に通う。デモクラート美術協会展に参加、4回で退会。53年に第1回平和を守る美術展(現関西平和美術展)

を開催。55年に「リアリズム美術家集団」を結成。吉田にリアリズム論を大きく発展。58年個展開催、多数の銅版画を展示。60年代安保闘争～三井三池闘争に刺激を受け。炭鉱シリーズを制作。1998年没、82歳。洋画家、版画

吉田白嶺（よしだ・はくれい/1871～1842年）

東京生れ。1901年独学で彫刻家を志す。平櫛田中、内藤伸らと研究者を結び、東京彫工会、日本美術協会等に木彫を出品。のち日本美術院同人となる。代表作に『寂靜』。1942年没、72歳。彫刻家

吉田 博（よしだ・ひろし/1876～1950年）

福岡県生れ。1894年三宅克己の影響受け水彩画を始め、同年不同舎に入門。99年から欧米各地を巡歴。1902年には前年に解散した明治美術会を引き継ぎ、太平洋画会を創立、太平洋画会展を開催。版画や水彩画で数多く制作した。東京で没、73歳。洋画家、版画家、水彩画家、浮世絵

吉田ふじを（よしだ・ふじを/1887～1987年）

福岡市生れ。1894年画塾不同舎に学ぶ。1903年太平洋画会展に出品。03～07年渡米欧。夫となる吉田博と二人展現地で開催。07年文展に出品、水彩画を得意とする。19年朱葉会展に参加会員、のち会長。80年資生堂ギャラリーで画業周年記念の個展を開催。東京で没、99歳。水彩画家

吉田ふじをⅡ（よしだ・ふじを/1887～1987年）

福岡市生れ。本名藤遠。1894年母ふじと共に上京。99年不同舎に入門。1900年日本女学校に入学。03年第2回太平洋画会展に初出品。同年渡米し、その後渡欧。07年帰国、東京勧業博覧会に出品。第1回文展に出品。10年第4回文展で褒状。18年女流洋画研究団体「朱葉会」創立会員。23年～25年再渡米後イギリス経由で帰国。80年画業80年個展を資生堂ギャラリーで開催。87年5月1日没、享年99歳。(佐)水彩画家

吉田穂高（よしだ・ほだか/1926～1995年）

東京生れ。父は博、母はふじを、兄は遠志。1949年第一高等学校卒。51年木版画制作を始める。52年日本版画協会展に出品、日本版画協会会員。55年兄遠志と渡米、キューバ、メキシコ巡遊。57年ロスで個展。62年ルガノ国際版画ビエンナーレで優秀賞。69～77年すいどーばた美術学院(のち創形美術学校)で版画家講師。72年ソウル国際版画ビエンナーレで大賞。87年山口源展で大賞。88年町田市立国

際版画美術館で個展。日本版画家連盟理事、日本版画協会理事。東京で没、69歳。 **版画家、美教**

吉田正雄（よしだ・まさお/1935～1998 年）

茨城県生れ。1956年二科展新人賞、57年二科賞。60年パリ賞。61～63年渡仏し、パリのアトリエ 17 で S.W.ヘイターに版画を学ぶ。64年二科会会員。67年会員努力賞、76年青児賞。92年茨城県つくば美術館にて個展開催。同年第 77 回二科展で《方舟・何処へ》が内閣総理大臣賞。1998年没、63歳。 **版画家**

吉田政次（よしだ・まさじ/1917～1971 年）

和歌山県生れ。1935年川端画学校に通う。41年東京美術学校西洋画科卒。47年同校研究科修了。恩地孝四郎の影響を受け、49年より日本版画協会展に出品。52年日本版画協会会員。50年モダンアート協会展に招待出品。54年モダンアート協会会員。57年東京国際版画ビエンナーレ展で新人賞。69年バルセロナで開催のホアン・ミロ賞国際素描展で大賞。東京で没、54歳。 **版画家**

ヨシダ・ヨシエ（よしだ・よしえ/1929～2016 年）

東京生れ。神奈川県立湘南高校在席中に終戦。小林秀雄や林達夫ら鎌倉文化人を知り、地域雑誌『緑地帯』の発行に関わり、3 号まで刊行。50 年頃、片瀬目白山に在住の丸木位里・俊夫妻を尋ね、藤沢の旅館で「原爆の図」を展示する。以後 3 年間、丸木夫妻らと「原爆の図」5 部作の全国巡回展示を行う。56年詩集『風と夜と』（私家版 250 部、吉留要画）をヨシダ・ヨシエ名で刊行。同年「小山田二郎の芸術」（『美術批評』、8 月号）で美術評論デビュー。58 年詩画集『ぶるる』（岡本信二郎画、亜紀社）。61 年「瀧口修造覚え書き」（『現代芸術』、5.6～9 月号）では、瀧口の戦中期の活動について論述。62 年「鬚光伝」（『AVECART』、58 号から 9 回連載）は、ヨシダのこの頃の中心テーマ「戦争と美術」が展開される。鬚光については、77年から82年まで『デフォルマシオン』で「わたしの内部の鬚光」を長期連載する。74年コスモス展（サンパウロ大学現代美術館）を組織。71年尾崎正教や小本章と人間と大地の祭り展（代々木公園）を企画。72 年『戦後前衛所縁荒事十八番』（ニトリア書房ト・ユニオンに参加。77年より日本・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議に参加。91年より池田 20 世紀美術館評議委員（94年まで、以後2007年まで理事、10年まで評議委員）を務める。93年『修辞と飛翔』（北宋社）刊。96年ライフワーク的な『丸木位里・俊の時空・絵画としての「原爆の図」』（青木書店）刊。2005年『ヨシダ・ヨシエ全仕事』（芸術書院、全著述が収録されてはいな

い）刊。08年細江英公による写真集『原罪の行方 最後の無頼派ヨシダ・ヨシエ』が刊行される。埼玉県で没、86歳。 **美術評論家**

吉田芳夫（よしだ・よしお/1912～1989 年）

東京生れ。。祖父島村俊明、父吉田芳明、伯父吉田白嶺と代々彫刻家を家業。1946年東京美術学校彫刻科塑像部卒。38年国画会展入選、K 氏賞。39年東美校同級生で国展での同志であった柳原義達らと共に新制作派協会彫刻部を創立し、創立会員。工匠、芸術家など深い内面性を含んだ人物塑像を主に制作し、76年新制作展出品作で中原悌二郎賞受賞。一貫して具象彫刻を制作し、実在感のある物の生成を追求してレアリストを目指した。東京で没、77歳。 **彫刻家**

吉田喜蔵（よしだ・よしぞう/1889～1944 年）

大津市生れ。1907年上京し、黒田清輝に師事。09年宮内庁買上げ。24年大阪市美術協会展に出品。26～27年渡仏。27年帝展入選。29年アジア洋画研究所を開設。31年兵庫県美術家連盟に参画。35年大阪阪急で個展。パステル画を描いた。1944年没、56歳。 **洋画家、パステル画家**

吉田善彦（よしだ・よしひこ/1912～2001 年）

東京生れ。1929年速水御舟に師事。37年院展入選、小林古径に師事。40年法隆寺金堂壁画模写事業に参加。46年法隆寺金堂壁画の模写に従事、49年金堂消失によって模写事業が中止。62年美術院賞。64年文部省買上げ、院展同人。67年法隆寺金堂壁画再現模写に安田靉彦班の一員として従事。70年東京芸術大学教授。73年文部大臣賞。81年院展で内閣総理大臣賞。82年毎日芸術展賞、日本芸術院賞恩賜賞。東京で没、89歳。 **日本画家、美教**

吉田ルイ子（よしだ・るいこ/1938 年～ ）

北海道生れ。慶應義塾大学法学部卒、フルブライト交換留学生として、米の大学で学び、10年間NYに在住。ハーレムで撮った写真が公共広告賞。帰国後は写真展「ハーレム Black is beautiful」を開催。82年東宝映画「ロングラン」で監督。2001年日本ジャーナリスト会議特別賞、03年国際写真フェスティバル東川賞特別賞。 **写真家、ジャーナリスト、映画監督**

吉仲太造（よしなか・たいぞう/1928～1985 年）

京都市生れ。京都の行動美術研究所に学ぶ。1946年行動展に出品。53年行動美術賞。54年瀧口修三の選考による初個展。55年岡本太郎の招きで55年二科会会友、九室会に参加。59年退会以降無所

属。企画展に出品、招待出品。前衛芸術家として実験的制作し続けた。75年横浜市民ギャラリーで個展開催。東京で没、56歳。洋画家

吉永梅里 (よしなが・ばいり/1866～1937 年)

高知県生れ。今井小藍に画を学んだ。稲吉屋は父の代までは栄えていたが、梅里は商売を好まず番頭に任せきりで、店はなくなり借家住まいとなった。襖を張って生計をたてていたという。軸や襖絵のほか、絵馬も描いた。島内松南や下司凍月とも交流があり、土陽美術会にも会員として参加した。1937年没、71歳。日本画家

吉仲正直 (よしなか・まさなり/1942～2016 年)

大阪生れ、早稲田大学で美術史を学ぶ。26歳の時に画家を志し、油絵やテンペラなど、様々な技法を独学で習得。東京、大阪、アジアを中心に幅広く活動を展開、1988年には文化庁芸術家在外研修員として韓国に留学し、89年現代日本美術展で東京国立近代美術館賞。大阪芸術大学では長年にわたり教鞭をとり、後進の育成にも尽力した。2019年何必館・京都現代美術館で個展。洋画家

吉野 純 (よしの・じゅん/1922 年～)

長野県生れ。東京府大泉師範学校、東京高等師範学校及び研究科卒。1948～53年山梨県立韮崎高等学校で美術教諭。東京教育大学絵画専攻の教授。同大学院芸術研究科長、芸術専門学群長を歴任、85年退官。この間、二紀会に出品、会員、理事、現在副理事長。初期にはアンフォルメルの影響を受けた作品、65年の欧州遊学でロマネスク美術に衝撃を受け、今日まで続く重厚なマチエールとプリミティブで詩的なフォルムの作品へと変わっていった。近年は聖書に題材を採った作品が多い。洋画家

吉野辰海 (よしの・たつみ/1940 年～)

宮城県生れ。お茶の水美術院に入学、1959年武蔵野美術大学入学、61年退学。60年第2、3回ネオ・タダ展、第13回アンデパンダン展に参加、活動。78年“犬”をモチーフにした作品制作。63年「MONO-KUI」、2007年「立ち上がる臓器」等の作品発表。彫刻家、造形、ネオ・タダ

吉野正明 (よしの・まさあき/1913～1994 年)

熊本県生れ。台北第二師範学校卒。1941年二科展入選、60年二科展で特選、61年会友、66年会員、82年会員努力賞、84年評議員。個展も数多く開催した。88年広島赤十字原爆病院に「ベニスの大競艇」を寄贈。東京で没、81歳。洋画家

吉野谷幸重 (よしのや・ゆきしげ/1932 年～)

兵庫県生れ。1959年東京芸術大学油画科専攻科卒、大橋賞。60年光風会船岡賞。61年一水会佳作賞、75年会員佳作賞、77年会員優賞、運営委員。63～64年渡欧。77年紺綬褒章。90年個展(日本橋三越・'94、'01、'04、'07、'10)。洋画家

吉原甲蔵 (よしはら・こうぞう/1899～1971 年)

佐賀県生れ。1927年太平洋画会研究所に学ぶ。戦中は太平洋美術学校講師をつとめた。28年帝展入選、官展に出品、36年文展鑑査展入選、この作品は東西両朝日新聞のカレンダーに採用された。39年太平洋画会展出品の「室内」で太平洋画会賞、会員。48年示現会創立に際し参加、会員。1971年没、72歳。洋画家

吉原治良 (よしはら・じろう/1905～1972 年)

大阪生れ。1928年関西学院高等商業部卒、専攻科中退。27年艸園会に入る。34年二科展に入選。38年二科展で特待。38年九室会の創立に参加。48年芦屋市美術協会を結成、代表。52年現代美術懇談会設立に加わり、54年具体美術協会を結成、主宰。67年日本国際美術展で最優秀賞。アンフォルメル主導のタピエと交友。芦屋で没、67歳。洋画家、具体創立

吉原英雄 (よしはら・ひでお/1931 年～)

広島県生れ、大阪・天王寺高校卒。1954、55年具体美術協会創立参加。55年瑛九、泉茂らのデモクラート美術家協会に参加。この頃より版画を制作。59～69年日本版画協会会員。68年東京国際版画ビエンナーレで文部大臣賞。69年現代日本美術展でブリヂストン美術館賞、70年芸術選奨文部大臣賞。78年京都市立芸術大学教授。94年紫綬褒章。95年京都市文化功労者。2002年勲三等瑞宝章。03年大阪市文化功労者。版画家、洋画家、美教

吉原通雄 (よしはら・みちお/1933～1996 年)

芦屋市生れ。父は美術家の吉原治良。関西学院大学在学中の1954年具体美術協会の結成に参加、第1回展から72年の第21回展まで、毎回出品した。第1回展、地面にひろげたベニヤ板に、コールタールを流し、上から砂をふりかけ、アスファルト道路をはぎとったような絵画作品を出品。58年の大阪で開催された第2回「舞台を使用する具体美術」発表会では、美術と舞踏を融合させた「ロック・ア라운드・ザ・クロック」を演出した。1996年没、63歳。造形作家、具体

吉益耳童 (よしまつ・じどう/1867～1944 年)

大阪生れ。1888年京都府画学校西宗で田村宗立に学ぶ。89年京都市画学校専門科卒。90年画塾「明治画学館」で学ぶ。上京。川村清雄に師事。明治美術会通常会員。1902年関西美術展に出品。1944年没、77歳。洋画家

与志美登野（よしみ・との/1907～1976 年）

岡山県生れ。本名小川政太郎。1922 年笠岡尋常小学校卒。26 年太平洋美術専門学校卒。38 年第 25 回二科展に初入選。翌年も入選。45 年戦災のため帰郷。46 年一水会展に入選、以後毎回出品。22 年第 3 回日展に初入選、以後、6, 7, 9, 10 回展に出品。54 年一水会員。63 年笠岡市文化連盟理事長。65 年第 8 回新日展に出品。70 年第 32 回一水会展で会員優賞。74 年笠岡市文化功労賞。75 年笠岡市文化連盟会長。76 年 1 月 6 日没、享年 69 歳。（佐）**洋画家**

吉村益信（よしむら・ますのぶ/1932 年～2011 年※

大分市生れ。1955 武蔵野美術学校卒。大分のキムラヤで結成されたグループ新世紀群に参加し、第 1 回新世紀群同人展に出品する。新世紀群には、磯崎新、風倉匠、中学生の赤瀬川原平も関わり、後のネオ・ダダの原型。日本アンデパンダン展（第 7～10、12、13 回）、読売アンデパンダン展（第 7～14 回）に出品。52 年、新世紀群野外展を若草公園で開催（56 年まで）。55 年新世紀群主催の座談会に池田龍雄を招き、「制作者懇談会」や岡本太郎主宰「アートクラブ」に出席し、アヴァンギャルドの精神を吸収。57 年赤瀬川隼の結婚式で磯崎新に描いてもらった図面をもとにしたアトリエ「ホワイトハウス」が新宿百人町に完成。赤瀬川原平、風倉匠、磯崎新らに呼びかけ、60 年に「オール・ジャパン」結成。篠原有司男が合流し、「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」結成。第 1 回展を銀座画廊で開き、吉村は折り畳み可能な「携帯絵画」を出品するとともに、ポスターを全身に巻いて街中を練り歩くパフォーマンス。「安保記念イベント」（6 月、ホワイトハウス）、第 2 回ネオ・ダダ展（7 月、同上）、「ビーチ・ショウ」（7 月、鎌倉安養院／材木座海岸）、第 3 回ネオ・ダダ展（9 月、日比谷画廊）。ネオ・ダダは事実上解散。62 年の読売アンデパンダン展で展示空間を埋め尽くすような作品「ヴォイド」を出品。62 年国立市公民館での「敗戦記念晩餐会」、磯崎新邸での壮行会を経て、NY に渡る。渡米当初は「ヴォイド」シリーズの制作を続けていたが、66 年にカステレーン・ギャラリーで開催した個展「HOW TO FLY」では、電球を使用した作品を発表し、ライト・アートの先駆となる。65 年帰国、電球やネオンを使った作品の制作を続けるが、アトリエが手狭なために、自身は図面を引くだけで制作は工場に発注する「発注芸術」と呼ばれる制作方法をとる。ライト・アートと発注芸術は、68 年の第 8 回現代日本美術展でコンクール優賞となった「反物質 ライト・オン・メビウス」に結実する。70 年の大阪万国博覧会に際しては、「貫通」という会社組織を作り、若い作家たちを雇い、彼らに活躍の場を与え

た。万博のせんい館のために作られた巨大なカラスのオブジェ「旅鴉」は、のちにデュシャンの作品になぞらえて「大ガラス」と改名されたことで知られる。吉村のリーダーシップが発揮された「貫通」も、万博の終了と共に仕事の機会が減るなどして解散。テクノロジーに彩られた万博のあと、吉村は第 10 回現代日本美術展にサヴィニャックのポスターを元にしたオブジェ「豚・pig lib;」を出品し、新しい作風を見せる。72 年には、サトウ画廊で個展「群盲撫象」を開催し、象の身体部位を切り落としたようなオブジェを発表する。万博前後のこの時期は、異なるスタイルで自身の代表作となる作品を次々と作り出した豊穣な時期となった。75 年にこれまで様々な組織を牽引してきた実績をかわれ、国内外の作家から要請されてアーティスト・ユニオン結成に伴うまとめ役を引きうけるが、79 年には事実上消滅。神奈川県秦野市の山中にアトリエを構え、アートシーンの中心から離れた。90 年代に、戦後の前衛美術の再評価が高まるなか、福岡のギャラリーとわーるで行われた石松健男の写真展「60 年代ネオ・ダダと！」（1992 年）や福岡市美術館の「流動する美術—ネオ・ダダの写真」展（1993 年）によって、ネオ・ダダにも注目が集まる。1994（平成 6）年の個展「ウツ明け元年」（佐野画廊）で「豚; Pig Lib;」を再制作し、吉村はふたたび表舞台に登場する。その後も、「ヴォイド」や「携帯絵画」などの再制作を行い、ほとんど作品が残っていなかったネオ・ダダの再評価に寄与する。2000 年には地元である大分市美術館で回顧展。2011 年没、78 歳。**ネオ・ダダのリーダー**

吉村芳生（よしむら・よしお/1950～2013 年）

山口県生れ。山口芸術短期大学卒。創形美術学校卒。1978 年シェル美術賞展佳作賞。80 年山口県美術展覧会最優秀賞。83 年山口県芸術文化振興奨励賞。2007 年山口県美術展覧会大賞。2010 年山口県立美術館で回顧展。2013 年没、63 歳。**洋画家**

吉村芳松（よしむら・よしまつ/1886～1965 年）

東京生れ。郁文館中学校卒、1913 年東京美術学校西洋画科卒。14 年文展入選、25 年特選、27 年特選、日展会員。55 年新世紀美術協会創立参加。35 年多摩美術学校助教授。1965 年没、78 歳。**洋画家**

吉本作次（よしもと・さくじ/1959 年～）

岐阜県生れ。1984 年名古屋芸術大学美術学部絵画科卒。86 年渡米、NY に 5 ヶ月間滞在、制作。89 年 NY で個展、後に訪欧。95 年名古屋文化振興事業新進芸術家海外研修の助成を受け NY を訪問。96 年文化庁インターシップ研修生。97 年名古屋市芸術奨励

賞。名古屋芸術大学美術学部洋画 2 コース教授。洋画家、美教

吉原通雄 (よしわら・みちお/1933～1996 年)

兵庫県生れ。父は吉原治良。関西学院大学在学中の1954(～72)年具体美術協会結成参加。54年 1 回展では、地面にひろげたベニヤ板に、コールドタールを流し、上から砂をふりかけ、アスファルト道路をはぎとった絵画作品出品。58年「舞台を使用する具体美術」発表会では、美術と舞踏を融合させた「ロック・アラウンド・ザ・クロック」を演出。65年オランダとドイツの前衛グループ「ヌル」が主宰するヌル国際展、に具体グループ招待、展示にあたる。具体美術協会解散後は沈黙、近年活動をはじめていた。1996年没、63 歳。洋画家、具体、現代美術家

吉原義彦 (よしわら・よしひこ/1900～1956 年)

新潟県生れ。長岡中学校卒。京都高等工芸学校に学ぶ。宮内庁勤務。造型展、プロレタリア美術展に出品。著書に「プロレタリア油絵の描き方」(『総合プロレタリア芸術講座第 5 巻』1931 年)がある。37年従軍画家として上海に派遣。1943年新文展で岡田賞。戦後は一水会に出品。1956年没、56歳。洋画家

依田洋一朗 (よだ・よういちろう/1972 年～)

香川県生れ。95年タイラー スクール オブ アート 学士号取得(フィラデルフィア、米)。98年クイーンズ カレッジ修士号取得(ニューヨーク、米)。2018年「カフェ・ルーージュ」南天子ギャラリー(東京)。2016-17年「Yoichiro Yoda “Bromide Paintings”」13th Street Repertory Theatre (NY)。14年「ザ・グレート・ギャツビー・イン・ブルー」南天子ギャラリー(東京)、12年「YOICHIRO YODA DRAMAS OF MEMORY : 記憶のドラマ 依田洋一朗」三鷹市美術ギャラリー(東京)。NYの古い劇場やホテル、食堂や遊園地をモチーフに、マンハッタンの風景と記憶の深層をたぐり寄せては描く、状況への抵抗を試みる画家。洋画家

四谷十三雄 (よつや・とみお/1938～1963 年)

横浜市生れ。1958年横浜造形芸術研究所夜間部に学ぶ。61年研究所で知り合った芥川麟太郎、星野鐵之とグループを結成、三人展。63年京浜第二国道横断歩道での輪禍により没、25歳。67年横浜市民ギャラリーで遺作展。79年横浜市民ギャラリーで没後15年遺作展。現代画廊で遺作展。94年美術研究藝林、銀座・空想ギャラリー、横浜・那由他共催没後30年記念展。2008年平塚市美術館「四谷十三雄の造形世界」展。洋画家

淀井彩子 (よどい・さえこ/1943 年～)

東京生れ。彫刻家・淀井敏夫(1911～2005 年)の長女。東京藝術大学大学院修了後、フランス留学。留学中に訪れたエジプトの風土に衝撃を受け、鮮やかな

色面による抽象画を描きます。近年はエジプトの風景をモチーフに、大胆なストロークを遣い、より自由な表現を獲得。洋画家

淀井敏夫 (よどい・としお/1911～2005 年)

兵庫県生れ。1933年東京美術学校卒。在学中帝展に入選。36年二科展に出品、51年二科会会員、72年平櫛田中賞、73年二科展内閣総理大臣賞、77年 日本芸術院賞。82年日本芸術院会員、98年二科会理事長。94年文化功労者、2001年文化勲章。母校で25年にわたって教鞭をとり、55年東京芸術大学教授、73年同大学美術部長。99年故郷の兵庫県朝来町にあさご芸術の森美術館・淀井敏夫記念館が開館。東京で没、94歳。彫刻家、美教

與那覇朝大 (よなは・ちやうたい/1933～2008 年)

沖縄県生れ。19 歳の時に画家となり、コザ市(現沖縄市)でアメリカ兵相手に肖像画を描いた。1971年の新美術協会展で新人賞を受賞、77年に沖縄県産業デザインコンクールで会長賞、86年新美術協会展で光琳賞、日本美術選賞。92年新美術協会展で桃山芸術大賞。98年アート・オブ・ジ・イヤーのグランプリ。99年フランス芸術協会から 20 世紀芸術遺産認定作家。04年ジュネーブ国際平和遺産認定作家賞。首里城正殿、識名園の切手デザイン。2008年没、74 歳。洋画家、陶芸家

米倉 兌 (よねくら・さとる/1913～2000 年)

福島市生れ。1932年仙台商業学校卒、神戸洋画研究所に入門、浜田葆光に師事。水彩画を別荘博覧に学ぶ。34年二科展入選(以降～42年)、日本水彩画会展入選(以降～38年)。関西水彩協会会員、日本美術連盟会員。福島県美術協会会員。72～88年三越で個展開催。2000年没、87歳。水彩画家

米倉寿仁 (よねくら・ひさひと/1905～1994 年)

甲府市生れ。1926年名古屋高等商業学校卒。教職。シュルレアリスム絵画を独習。31年二科展に入選。福沢一郎と知己。35年独立展に入選。シュルレアリスム表現。38年創紀美術協会の創立に参加。39～51年美術文化協会創立会員。51年美術団体サロン・ド・ジュワンを結成、主宰。埼玉県で没、89歳。洋画家

米倉斉加年 よねくら・まさかね/1934～2014 年)

福岡市生れ。福岡市立警固中学校、福岡県立福岡中央高等学校卒業、西南学院大学文学部英文科中退。2014年没、80歳。俳優・演出家・絵本・絵師

米倉 守 (よねくら・まもる/1938～2008 年)

津市生れ。関西学院大学を経て、関西大学文学部卒。卒業後、朝日新聞社に入社、編集委員。1994年多摩美術大学教授、同大学造形表現学部長。2002

年松本市美術館館長。評論家と作家の間に大きな位置を占めている一般読者という存在こそすべてである。評論家の願望を描き、作家、作品を一般大衆に語る自由はあるからだ。(中略)美は壊れやすく滅びやすく、はかない。そして事実滅びてゆくけれど、それを語り描くことが評論家だと思っている。」米倉は、美術を「現場」から見つめつづけ、「一般読者」に向かって「批評」として発信をつづけたジャーナリストであった。東京で没、70歳。(引用 東文研) **松本市美術館館長、評論家**

米坂ヒデノリ (よねさか・ひだのり/1934～2016 年)

北海道生れ。1957年東京芸術大学彫刻科卒。58年第13回全道展で北海道知事賞。59年全道美術協会会員(1981年退会)。61年自由美術協会会員。71年第35回自由展で自由賞。77年北海道文化奨励賞。82年北海道現代美術展で北海道立近代美術館賞。05年北海道文化賞受賞。09年道功労賞、同年釧路芸術館で「米坂ヒデノリ オーケストラ展」、14年釧路市民文化会館で個展が開催。2016年没、82歳。 **彫刻家**

米沢嘉圃 (よねざわ・よしほ/1906～1993 年)

秋田県生れ。1931年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。35年東方文化学院東京研究所所員、49年東京大学東洋文化研究所教授。武蔵野美術大学教授、53年大学長、同大学長。美術史学会代表委員、文化財専門審議会委員、文化財保護委員として活躍。東京国立博物館評議員。77年勲三等旭日中綬章。77年より美術研究誌「国華」主幹。専門の中国絵画だけでなく日本絵画史の分野でも新資料を次々と紹介。 **東洋美術史家、東京大学名誉教授、武蔵野美術大学名誉教授、元武蔵野美術大学長、国華社主幹**

米陀 寛 (よねだ・かん/1917～2005 年)

宇都宮市生れ。1936年下野中学卒。神奈川県横須賀市の海軍航空技術廠科学部に入所。36年中村岳陵に入門。43年新文展入選。終戦後は宇都宮に戻り、同地で画家としての本格的な道を歩み始める。しばらく日展や院展、創造美術展春季展に出品、入選するも、50年代より日展への出品を重ね、67年新日展で特選、69年改組日展で特選・白寿賞。82年日展会員。67年日春展奨励賞。個展は78年銀座松屋、81年銀座・北辰画廊、上野東武(創作陶芸個展)、88年二荒山神社宝物殿などで開催。81年栃木県文化功労賞受賞。84年『米陀寛画集』(下野新聞社)刊行。99年宇都宮美術館で回顧展が開催。宇都宮市で没、88歳。 **日本画家**

米谷清和 (よねたに・きよかず/1947 年～)

福井市生れ。1969年横山操奨学金により渡欧。72年改組日展入選。73年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了91年会員、2002年評議員。77年改組日展で特選、87年日展で特選、2001年会員賞。78年個展(資生堂ギャラリー、東京)。81年多摩美術大学日本画科講師、98年同校教授。84年横の会結成に参加。85年山種美術館賞展で優秀賞。98年個展(日本橋・高島屋、他)。2002年個展(福井県立美術館)。 **日本画家、美教**

米田三男之介 (よねだ・みおのすけ/1913～1981 年)

愛媛県生れ。1932年日本美術学校洋画科卒。在学中、大久保作次郎に師事。35年白日会に出品。35年京都で日本画を学び、関西美術院に通う。シュルレアリスムの画風。戦後、二科会会員、50年九室会に出品。55年美術文化協会会員、のち常任理事。65年現代美術家協会会員、のち常任理事。千葉県で没、68歳。 **洋画家、日本画**

米原雲海 (よねはら・うんかい/1869～1925 年)

島根県生れ。初め宮大工を業、上京して高村光雲に木彫を学ぶ。1903年内国勸業博覧会入賞し、木彫家として頭角を現した。07年山崎朝雲、平櫛田中らと日本彫刻会を組織。東京美術学校教授。日本美術協会、東京彫工会の評議員。10年以後は、文展、帝展の審査員。日本の伝統的木彫の正風を伝える理想主義的な作風。主要作品『仙丹』(1910、東京国立近代美術館)、『神来』『寒山子』『竹取翁』『旅人』など。東京で没、55歳。 **彫刻家**

米丸瑞枝 (よねまる・みずえ/?～)

静岡県在住。県展連続26回入選。浜松・由美画廊「マイ・アート展」(中日新聞共催)などに出品。静岡県立美術館により 60 号の水彩画作品が購入される。(出典 わコレ) **水彩画**

米谷雄平 (よねや・ゆうへい/1938～2008 年)

台湾生れ。1961年北海道学芸大学札幌分校美術科卒。61年道展で協会賞、63～82年道展会員。68年北海道立美術館の「北海道秀作美術展」に招待出品('70、'73、'74、'76年)。78年北海道立近代美術館の「北海道現代美術展」に出品('80、'81、'82年優秀賞)。83年北海道立近代美術館の「イメージ展」招待出品('86年優秀賞、'88 まで)。92年ソウル市立美術館の「ソウル・サッポロ展」招待出品。94年北海道立近代美術館の「札幌アヴァンギャルドの潮流展」招待出品。98年札幌市民ギャラリーの「さっぽろ美術展」招待出品。2005年北海道立近代美術館で「米谷雄平展」開催。2008年没、70歳。 **洋画家**

四方田草炎 (よまだ・そうえん/1902～1981 年)

埼玉県生れ。1921年川端画学校に学ぶ。28年川端龍子に師事、「御形塾」に入る。師より「草炎」の号。29年青龍展に出品。34年頃から須田剋太らと交遊。47年上田臥牛らと「筵上会」を結成、資生堂ギャラリーで個展開催。素描に集中制作。横山大観から評価。

70年「筵上会」と新協美術展が合流した草草会に参加。東京で没、79歳。 **日本画、素描画**

依岡慶樹 (よりおか・けいじゅ/1919～1997 年)

高知市生れ。1941年京都市立京都絵画専門学校日本画科本科卒、在学中は榊原紫峰に師事。43年西岡翠嶂に入門。49年日展入選。以後同展に発表を続ける。1953年関西総合展で関展賞。53～62年東西の若手とともに竜土会を結成、開催。57年高山辰雄に師事。59年個展(産経会館)を開催。63～64年約ヨーロッパ各国を旅し、美術を研究。82年フランスで銅版画を学んで帰国。著書に技法書「日本画入門から大作まで」(日貿出版社発行)がある。1997年没、78歳。 **日本画家、版画**

萬鐵五郎 (よろず・てつごろう/1885～1927 年)

岩手県生れ。1903年上京し、白馬会洋画研究所に学ぶ。06年早稲田中学校卒業後、渡米同年帰国。07年東京美術学校に入学。12年卒業制作「裸体美人」が話題、日本フォーヴィスムの先駆的作品。ヒュウザン会(後のフウザン会)の結成に参加。17年二科展に出品。19年二科会友。22年日本水彩画会会員。24年春陽会会員。茅ヶ崎市で没、42歳。 **洋画家、水墨**

ら

ラグーザ・玉 (らぐーざ・たま/1861～1939 年)

江戸、西新堀生れ。1872 年小林永洲に日本画を学ぶ。77 年ラグーザに絵の指導を受ける。80 年ラグーザと結婚。82 年ラグーザらと渡伊、パレルモ大学美術専攻科入学。84 年高等美術工芸学校副校長。88 年パレルモの学校美術展で第 1 等賞金牌。イタリア政府より功労銅牌。92 年全イタリア博覧会美術部門で第 1 等金賞。1906 年装飾関係の仕事が増える。10 年ニューヨークの展覧会で婦人部門最高賞。33 年帰国。銀座伊東屋で絵画展。日本各地に写生旅行。39 年 4 月 6 日没、享年 77 歳。(佐) **洋画家**

り

李 禹煥 (り・うふあん/1936 年～)

韓国慶尚南道生れ。1956年ソウル大学入学中退。61年日本大学文学部哲学科卒。67年サトウ画廊で個展。60～70年代「もの派」の代表的作家。70年青山デッサン専門学校、東京総合写真専門学校で教え。現在多摩美術大学名誉教授。93年神奈川県立近美で個展。2001年世界文化賞。 **洋画家、モノ派、美教**

李 克民 (り・こくみん/1945 年～)

中国陝西省生れ。中国農民絵画研究会会員。陝西省農民画協会理事。1972年代表作「高原打井」(高原の井戸を掘る)が中国切手の図案採用。「中国切手デザイン美術展」で芸術功労賞受賞。全国農民絵画展を主催した文化省の二等賞を受賞。中国国立美術

館と中国国内の美術館に収蔵。 **洋画家、図案**

利渉重雄 (りしょう・しげお/1948 年～)

千葉県生れ。1983年フレッヘン国際版画トリエンナーレ(西ドイツ)・第 3 席。84年ノルウェー国際版画ビエンナーレ・ビエンナーレ賞。85年版画「期待の新人作家」大賞展・大賞、ロックフォード国際版画ビエンナーレ・買上賞。95年環太平洋国際版画展・買上賞。97年環太平洋国際版画展招待出品・買上賞。2000年クラコウ国際版画トリエンナーレ(ポーランド)。 **版画家**

龍一之介 (りゅう・いちのすけ/1913～1983 年)

福岡県生れ。1926年上京、武蔵商業中退。太平洋画美術学校卒。35年光風会に入選。白日会展、旺玄展に出品、入選。38年牧野虎雄に師事。46年新生派美術協会を創立、48年同会を現代美術協会とする。50年渡仏、抽象画を研究。65年新芸術協会創立、会長。78年ル・サロン展に出品、79年会員。東京で没、70歳。 **洋画家**

劉 栄楓 (りゅう・えいふう/1892～没年不詳)

神奈川県生れ。洋画を独習。1914、15、17年文展入選。28年劉栄楓洋画展覧会が各地で開催。37年満州国新京で開催された訪日宣詔記念美術展覧会で新京美術代表。38年満州国展覧会に無鑑査、美術委員として出品。没年、不詳。 **洋画家**

龍 駿介 (りゅう・しゅんすけ/1889～1988 年)

福岡県生れ。龍清六、遠山五郎、山本森之助、南薫造に師事。川端画学校に学ぶ。1927、29、30、37年光風会、29年白日会入選。31年伝習館と柳川高女で個展。35年改名。38年以降、富士山を専門に描く。東京で没、99歳。(出典 わ眼) **洋画家**

劉 生容 (りゅう・せいよう/1928～1985 年)

台南市生れ。油彩画家の劉啓祥は叔父。1937年東京に移住、41年劉啓祥のアトリエに出入りして絵を描き始める。玉川学園中等部に学ぶ。43年に台湾に帰り、台南一中に編入。61年～訪日、東京で個展を開催。67年岡山市に移住。国際展、日本の展覧会に出品。1985年没、57歳。77年台北市立美術館で回顧展。 **洋画家**

料治熊太 (りょうじ・くまた/1899～1982 年)

岡山県生れ。関西中学卒業後、1919年上京、国学院大学で折口信夫の講義を受講。20年翌年雑誌記者として研究社に入社。大震災後、博文館の雑誌「太陽」の編集に携わる。28年博文館退社後著述活動。会津八一の門下、古美術の研究に専念。29～41年版画雑誌「白と黒」、「版芸術」、棟方志功、前川千帆、谷中安規らと親交。戦後は古美術の評論に専念、「茶わん」等の諸雑誌に執筆する。また、民俗雑器の収集家。著書に『会津八一の墨戯』『日本の土俗面』『古陶の美』『そば猪口』など。東京で没、82歳。 **評論家、版画家**

る

れ

ろ

ロツカク アヤコ (ろっかく・あやこ/1982年～)

千葉県生れ。グラフィックデザインの専門学校のイラストレーション科に通い、20歳で卒業。デザイン・フェスタに参加してライブで絵を描くパフォーマンスを行った。この場で初めて筆を使わずに手で直接描く手法を思い付いたという。2002年からは路上での創作活動を始め、03年 GEISAI#4 に参加。注目を集めたアヤコはスカウト賞を受賞。その後、NYを訪れて国外の画廊の知見を得て帰国し、06年 GEISAI に参加。スイスでのアート・バーゼル出展時に行ったライブペインティングでは100枚以上の売り上げを記録した。09年ベルリンへ移住。11年オランダロッテルダムのクンストハル美術館、翌年にはスロバキアのダヌビアナ美術館(スロバキア語版)で個展を開催。**現代美術家、パフォーマー**

六角鬼丈 (ろっかく・きじょう/1941～2019年)

1941年生れ。65年東京藝術学術学部建築科卒。磯崎新アトリエ勤務。69年六角鬼丈計画工房主幹。91年～2009年東京藝術大学美術学部教授。90年「東京武道館」で日本建築学会賞。71年「伝家の宝塔」を提案。85年「新鬼流八道」陰陽、善悪、虚実など二極、二律背反を合体。シルクスクリーン作品を制作。2019年没、77歳。**建築、版画、美教**

わ

若江漢字 (わかえ・かんじ/1944年～)

神奈川県生れ。1963年日本デザイン専門学校卒。75年展覧会を機に西ドイツ、オランダに滞在、その間アムステルダム市立美術館アトリエ・ヴォルフスブルグ市立美術館アトリエの招待作家として滞在。82～83年文化庁芸術家在外研修員として西ドイツ・ヴッパータール総合制大学に学ぶ。86年神奈川「芸術・平和への対話」展を企画する(横浜・大倉山記念館)。87年「ベルリンの壁」展を企画する共催:国連神奈川県本部・東京ドイツ文化センター。1988～95年ドイツ・ヴッパータール市と横須賀市で制作。94年ピラミッド・アトランティック版画工房の招きによりワシントンに滞在、版画制作。日本広報文化センター(日本大使館、ワシントン DC)のパネルディスカッションに参加。横須賀市に住む。94年カスヤの森現代美術館開設。**写真・立体・絵画・インスタ、版画、現代美術作家**

若杉五十八 (わかすぎ・いそはち/1759～1805年)

長崎県生れ。江戸時代後期の長崎派の洋風画家。1772年若杉家の養子。直接オランダ人に画法を学んだともいわれ、麻布油彩の本格的な西洋風俗画を描いた。唐絵目付の画家たちと違い、在野の画家だったため、画業を明らかにする資料は、残っていない。71年、従兄の若杉敬十郎が没し、長崎会所請払

役並となり、80年養父の実子に家督を譲り、会所請払役の久米豊三郎の養子となって再び会所請払役見習となり、94年養父豊三郎の隠退とともに請払役。1805年没、47歳。**長崎派の洋風画家**

若月公平 (わかつき・こうへい/1956年～)

埼玉県生れ。1981年武蔵野美術大学実技専修科研究課程版画専修修了。85年現代日本美術展・ブリヂストン美術館賞、85年中華民国国際版画展・金賞。87年日本版画協会展・準会員佳作賞。94年ミヤコ版画賞展・都賞。97年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ・グランプリ、富嶽ビエンナーレ・準大賞、大阪トリエンナーレ-1997-版画・特別賞。2005年高知国際版画トリエンナーレ・奨励賞、現代版画の潮流展(町田市立国際版画美術館、松本市美術館)。13年個展(養清堂画廊・銀座)。**版画家**

若菜寿夫 (わかな・ひさお/1912～1960年)

甲府市生れ。1935年中央美術展入選。同年甲斐美術会展出品。37年山梨美術協会発足に会友として参加、後に会員。40年教育美術研究所を開設。サロン・ド・ジュワン展出品。昭和20年代後半、県内画壇において抽象的な前衛芸術メンバーのリーダー格。写真から抽象へと移り、心の中のイメージをダイナミックに表現。1960年没、48歳。**洋画家**

若林 奮 (わかばやし・いさむ/1936～2003年)

東京生れ。1959年東京芸術大学卒。62年二科展で金賞。67年第2回現代日本彫刻展で受賞。87年東京国立近代美術館・京都国立近代美術館で個展。96年中原悌二郎賞。99年多摩美術大学教授。2003年芸術選奨文部科学大臣賞。2003年没、67歳。版(700点の版画作品)。**彫刻家、版画**

若林夏欧 (わかばやし・かお/1977年～)

東京生れ。1999年文化学院文学科卒業。2010年「淀井彩子若林夏欧若林奮若林砂絵子展本はいのちの水だから—Livres Objets」展ギャラリーTom に出品。16年「若林夏欧—わたし自身」かんらん舎。17年「サントさんはじめてのしごと」WAKABAYASHISTUDIO 発行。**洋画家**

若林景光 (わかばやし・かげみつ/1908～1994年)

佐賀市生れ。1931年東京美術学校日本画科卒。39、40、41年大日本美術院展入選。45年日本画から油絵に転じる。78年佐賀県民展グランプリ賞。83年サロン・ド・ナシオン展に招待出品。87年サロン・ド・パリ大賞。89年パレ・デ・コングレ賞。1994年没、86

歳。1997年佐賀県立美術館にて回顧展。**洋画家、日本画**

若林砂絵子（わかばやし・さえこ/1972年～）

東京生れ。父・若林奮、母・淀井彩子の長女。1995年多摩美術大学美術学部絵画科油絵専攻卒。98年多摩美術大学大学院絵画科修了。2000年渡仏。05年 ENSAD パリ国立高等装飾美術学校卒。アトリエ・コントロール・パリで版画を学ぶ。08年パリ第一大学、パンテオン＝ソルボンヌ造形美術科卒。個展中心に発表。00年佳作賞「第7回日仏会館ポスター原画コンクール展」、03年絵画賞。「ラ・フアンシリエンヌ・デザール：第3回若い才能ノゼ市美術展」、04年コジェディム賞。**版画家**

若林茂熙（わかばやし・しげき/1939年～）

佐賀市生れ。父は画家若林景光、弟は画家若林夏生。1967年東京藝術大学大学院油画科修了。国展で新人賞受賞。72年伊香保グランドホテル壁画完成（油絵 6000号）。オペラの舞台美術始める。79年東京宝塚劇場緞帳製作。東京展出品。83年日生劇場20周年記念公演モーツァルト四大オペラ装置製作。文化庁移動芸術祭オペラ公演舞台美術。佐賀市文化会館緞帳原画製作。90年舞台美術（日生劇場）。舞台美術（五反田、新宿文化センター）。95年国展受賞。96年国画会会員小品展（日本橋高島屋）。小野田記念館タペストリー原画製作。舞台美術【こうもり】（新宿文化センター）。**洋画家、舞台美術**

若松光一郎（わかまつ・こういちろう/1914～1995年）

福島市生れ。川端画学校で学ぶ。1938年東京美術学校油絵科卒。37年より新制作展に出品、44年新制作展で岡田賞。45年女子高等学校講師。56年新制作派協会会員。60年代抽象絵画。コラージュも制作。73年福島県文化功労賞。85年いわき市立美術館で個展。いわき市で没、81歳。**洋画家、版画、美教**

若山為三（わかやま・ためぞう/1893～1961年）

広島市生れ。広島県立忠海中学中退。1902年上京、03年太平洋画研究所に入り、満谷国四郎に師事。22～24年渡仏、アカデミー・グラン・ショミエールでシャルル・グランに学ぶ。27年春陽会賞、30年無鑑査推挙、34年春陽会会員。東京で没、66歳。**洋画家**

若山八十氏（わかやま・やそじ/1903～1983年）

北海道生れ。1941～42年頃卓上印刷機謄写版で版画を試作。42年謄写版作品を日本版画協会、国展、文展に出品し、以後普及に努める。版画は恩地孝四郎に師事。63年ペーパークリーン版画を始める。66年孔版画集団「髑土会」を結成。札幌市で没、80歳。**版画家**

脇坂秀樹（わきさか・ひでき/1930年～）

大分県生れ。大分大学卒業後、県内の中学校や高校の教壇に立つかわら、県美展や東光展を主な作品発表の場としてきた。また、新人画家の登竜門・安井賞展にも選抜出品の経験を持つ。この間、県内の東光展出品者を束ねた豊光会の結成と運営に携わってきたほか、県美協役員を永く務めるなど、地元美術の振興にも尽力している。**美術教育、美術普及**

脇田愛二郎（わきた・あいじろう/1942～2006年）

東京生れ。1964年武蔵野美術大学を卒業後に渡米。65年NYに移住、ブルックリン・アート・ミュージアムに学ぶ。69年NYのマーサ・ジャクスン・ギャラリーで個展を開催。83年平櫛田中賞。85年辻井喬共作詩画集『鏝』刊行。86年東京野外現代彫刻展出品、大賞。86年渋谷区立松涛美術館にて「特別陳列脇田愛二郎」展を開催。素材を問わない多岐なもので制作。東京で没、63歳。**彫刻家、造形、版画**

脇田 和（わきた・かず/1908～2005年）

東京に生れ。1923年渡欧。25～30年ベルリン国立美術学校卒。光風会会友。36年新制作派協会を結成、会員となる。55年日本国際美術展最優秀賞。70年東京藝術大学教授を退官。98年文化功労者。東京で没、97歳。（出典 わ眼）**洋画家、版画家、美術教育**

脇本楽之軒（わきもと・らくしけん/1883～1963年）

山口県生れ。京都市立美術工芸学校に入学したが中途退学して上京。藤岡作太郎に国文学、中川忠順に美術史をまなぶ。1915年美術攻究会（のち東京美術研究所）を設立し、36年機関誌「画説」（のち「美術史学」）を創刊。50年東京芸大教授。重要美術品等調査委員、国宝保存会委員。1963年没、79歳。著作に「平安名陶伝」。**美術史家**

和氣史郎（わけ・しろう/1925～1988年）

栃木県生れ。栃木師範学校卒。1952年東京芸術大学油画科卒。55年独立展出品。57、58年独立展で独立賞。58年関西総合展で第1席。朝日新人賞。59年独立美術協会会員。抽象から具象へ。76年渡欧。82年大阪府立現代美術センターで回顧展。88年没、63歳。**洋画家**

分部順治（わけべ・じゅんじ/1911～1995年）

高崎市生れ。東京美術学校卒。1932年帝展入選。37、38年新文展で特選、67、68年日展で内閣総理大臣賞。75年芸術院賞。ブロンズの男性裸体像を制作。東京で没、84歳。**彫刻家**

鷲塚泰光（わしづか・ひろみつ/1938年～）

東京生れ。1964年慶応義塾大学大学院文学研究科（美術史）修士課程修了。文化財保護委員会、文化庁文化財保護部美術工芸課文化財調査官を経て、現在奈良国立博物館館長。主な著書；「石仏」「金銅仏」

「丹後・若狭の仏像」(日本の美術 147・223・251 至文堂)、『日本の古美術』室生寺(保育社)、『仏像を旅する「山陰線」』(至文堂)。奈良国立博物館館長

鷺田新太 (わしだ・あらた/1900～1977 年)

滋賀県生れ。1924年上京、川端画学校に学ぶ。同舟舎に通う。33年安井曾太郎に師事。34年二科展出品。37年一水会展出品。56年光陽会展に出品し68年文部大臣奨励賞。のち同会代表。個展中心に発表。73～74年渡仏。76年フジキ画廊滞欧作品展。東京で没、77歳。洋画家

和田英作 (わだ・えいさく/1874～1959 年)

鹿児島県生れ。1891年明治学院を退学、曾山幸彦に入門。95年内国勧業博覧会で妙技二等賞。96年白馬会会員。96年東京美術学校助教授。1900～03年渡仏。03年東京美術学校教授。19年帝国美術院会員。23年仏政府勲章。32年東京美術学校校長。43年文化勲章。清水市で没、84歳。洋画家、美教

和田香苗 (わだ・かなえ/1897～1977 年)

東京生れ。画家の和田英作は長兄。1920年東京美術学校西洋画科卒。20年渡米、シカゴ在。21年、渡仏。23年帰国。31年東京高等工芸学校教授。37年文展無鑑査。47年国際観光美術協会結成。戦後も日展、光風会展に出品。53年工学院大学教授。東京で没、79歳。洋画家、美教

和田嘉平治 (わだ・かへいじ/1874～1950 年)

栃木県生れ。1908年東京美術学校卒業、10～17年滞欧、伊太利国立美術学校を卒業。東京で没、67歳。彫刻家

和田 清 (わだ・きよし/1898～1985 年)

千葉県生れ。千葉中学校で堀江正章に学ぶ。1926年東京美術学校西洋画科卒。27～30年渡仏。帝展、新文展に出品。光風会会員。1985年没、87歳。洋画家

和田邦坊 (わだ・くにぼう/1899～1992 年)

香川県生れ。1926年東京日日新聞社に入社し、記者や風刺漫画家として活動。新聞漫画家として朝日新聞社の岡本一平と並ぶ絶大な人気を誇った。小説家、『うちの女房にや髭がある』(1936 年)は映画化された。38年東京日日新聞社を退社し、故郷の香川県で画家やデザイナーとして活動した。「灸まん」「名物かまど」「ひょうげ豆」など多数の香川県名物のパッケージデザインを手がけた。64年香川県『文化功労者』表彰。66年四国新聞社、『文化賞』。79年に「うどん本陣 山田家」を設立した時には店の総合プロデュースを行った。山田家名物「ざるぶっかけ」の命名者は和田邦坊である。65年讃岐民芸館の初代館長。1992年没、68歳。漫画家・小説家、デザイナー、画家

和田賢一 (わだ・けんいち/1956～2008 年)

広島県生れ。1980年東京芸術大学美術学部芸術学科卒、渡伊留学。古典絵画技法、修復技法を修得し、帰国後は修復家。生涯のテーマとなる“光”の表現を追求した絵を作成。2018年アースプラスギャラリーで個展開催。修復家、洋画家

和田金剛 (わだ・こんごう/1907～1982 年)

静岡県生れ。澤田政広に師事。静岡県立菰山中学校卒。1933年帝展入選し、以後帝展、新文展に出品、41年新文展で特選。戦後は日展に出品し、70年日展で文部大臣賞、58会員、64年日展評議員。「杜の精」(同21年)、「たそがれ」(同33年)、「人」(同39年)、「祈り」(同53年)がある。東京で没、75歳。彫刻家

和田三造 (わだ・さんぞう/1883～1967 年)

兵庫県生れ。1900年福岡市修猷館中学入学、03年白馬会洋画研究所に学ぶ。04年東京美術学校西洋画科卒。07、08年文展で二等賞。09～15年渡欧。絵画、工芸図案を研究。16年文展審査委員。19年帝展無鑑査。27年帝国美術院会員、37年帝国芸術会員。32～44年東京美術学校教授。27年日本色彩研究所を創立、日本標準色カード500色を制定、45年財団法人日本色彩研究所理事長。33年工芸審査会委員。58年文化功労者。東京で没、84歳。洋画家、美教、色彩、版画

和田 新 (わだ・しん/1899～1988 年)

大阪生れ。明治学院普通部を経て東京美術学校西洋画科に入学し、1924年同科卒。27年東京国立文化財研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所設立準備事業にたずさわる。29年東京美術学校助教授西洋美術史を講ずる。29～30年文部省の派遣により西アジア美術史研究のため欧州、イラン、イラク等を巡遊。30年帝国美術院附属美術研究所嘱託。35年東京美術学校教授。依願退官。37～42年帝国美術院附属美術研究所所員、42年退官。47年日本博物館協会幹事。51～71年日本美術家連盟事務局長、美術家の国際交流に尽くし、46年以後も同連盟相談役。47年日本博物館協会幹事。51～71年日本美術家連盟事務局長、71年以降同連盟相談役。71年よりほぼ毎年油絵個展開催。著書に「イーラン芸術遺跡」(45年)。東京で没、88歳。洋画家、美術史家 日本美術家連盟相談役、美教

和田千秋 (わだ・ちあき/1957 年～)

大分市生れ。1982年九州産業大学芸術学部美術学科卒。83年同校研究科修了。在学中、「版画教室」(IAF 芸術研究所)が主宰する「現代美術研究会」に参加。87年長男が脳障害を負う。92年制作を再開し、障害をテーマにした《障害の美術》シリーズに取り組む。2012年でシリーズは12回を数え、近年は絵画表現の可能性と向き合う。**洋画家、水彩、版画**

和田 徹 (わだ・とおる/1923～1995 年)

東京生れ。中野高等無線電信学校卒。1941年旭石油株に入社。47～49年角浩の近代絵画研究所に学び、50年より猪熊弦一郎の純粹美術研究所に学ぶ。51～61年新制作派展に出品。この頃から版画家菅野陽に銅版画を学ぶ。62、64年養清堂画廊で個展。69年立軌展に招待出品、70年立軌会同人。大阪大丸本店、新宿小田急百貨店、日本橋三越、東京渋谷東急本店、横浜高島屋、上野松坂屋で個展。1995年没、72歳。**洋画家、版画家**

和田直樹 (わだ・なおき/1969 年～)

茨城県生れ。多摩美術大学美術学部絵画科卒。白日会展安田火災美術財団奨励賞、同三洋美術奨励賞、同梅田画廊賞等を受賞。白日会会員。**洋画家**

渡部耿賢 (わたなべ・あきよし/1946 年～)

広島県生れ。1977年渡仏。37年間、フランスにアトリエを構え、ヨーロッパの風景を描く。パリ国際美術展でユーマニテール・ド・フランス賞、ニース・コートダジュール美術展グランドファイナル賞、イルドフランス・ルベック展で最優秀賞。現在、フランス芸術家協会会員、ル・サロン会員、ナショナル・デ・ボザール会員。**洋画家**

渡辺一郎 (わたなべ・いちょう/1912～1988 年)

東京生れ。両親は渡辺与平と亀高文子。1937年東京美術学校油画科卒。36年文展入選。37～39年渡欧。帰国後赤艸社で指導にあたる。40年光風展でI氏賞。40年紀元2600年奉祝文展に招待出品。57年国画会に移り、59年国画会会友、62年国画会会員。1988年没、76歳。98年西宮市大谷記念美術館で「抽象との語らい渡辺一郎展」**洋画家、美教**

渡邊榮一 (わたなべ・えいいち/1947 年～)

山形県生れ。1965年東京理科大学数学科に入学。66年ドライポイントを始める。67年大学を中退し、野間博治に師事、エッチングを学ぶ。70年日動版画グランプリ展グランプリ受賞。79年銀座・日動画廊にて個展(以降84、89年)。2010年銀座・日動画廊にて油彩の初個展開催。**版画家**

渡辺長男 (わたなべ・おさお/1874～1952 年)

大分県生れ。1899年東京美術学校卒。1900年日

本彫塑会を結成。山田鬼斎、長沼守敬等に師事し、代表作に14年製作の「明治天皇御立像」、10年万世橋建立の「広瀬中佐、杉野孫六群像」等。尚現彫塑界の長老朝倉文夫は実弟である。東京で没、77歳。**彫刻家**

渡辺おさむ (わたなべ・おさむ/1980 年～)

山口県生れ。2003年東京造形大学デザイン学科卒。スイーツデコの技術をアートに昇華させた第一人者。「東京カワイイTV」(NHK)テレビで放映。アート界のスイーツ王子として人気。中国、イタリア、ベルギー、トルコ、アメリカ、韓国で個展。12年「SWEET OR UNSWEET?」が出版。12年大原美術館で個展、「渡辺おさむ お菓子の美術館」清須市はるひ美術館(愛知)。**現代美術作家**

渡辺修渡舟 (わたなべ・おさむとしゅう/1935～2007 年)

鳥取県生れ。鳥取県立米子西高等学校卒。埼玉県毛呂山町にある「新しき村」に入村。武者小路実篤や高田博厚に師事。農業・養鶏などに勤しみながら、時間を作っては創作活動に充てた。絵画教室も開いた。出身地である山陰地方を10年にわたり写生、300点の作品を制作。これらの作品のうち122点を展示する「心の山陰百景展(1987 年)」を埼玉県立近代美術館で開催した。埼玉県展知事賞。2007年没、71歳。**日本画家、彫刻家**

渡辺 学 (わたなべ・がく/1916～2000 年)

銚子市生れ。1941年東京美術学校日本画科卒。59年新制作展で新作家賞。60年新制作協会会員。62年日本美術展で優秀賞。68年松屋で「朝倉摂・渡辺学二人展」。71 年東京造形大学講師。創画会に出品。銚子市で没、84歳。(出典 わ眼) **日本画家**

渡辺崋山 (わたなべ・かざん/1793～1841 年)

江戸生れ。三河田原藩の家老で、海防掛を兼ねた。佐藤一斎に儒学を、谷文晁に南画を学び、のち西洋画の技法を取り入れて写實的画風を確立。特に肖像画にすぐれた。「慎機論」を著し、幕政を批判したため蛸社の獄に連座して自刃。三河国で没、48歳。**江戸時代の絵師、文人画、南画、肖像**

渡部菊二 (わたなべ・きくじ/1907～1947 年)

会津若松市生れ。1931年日本水彩画展入選。32年上京、白日展、太平洋画会展に入選。35年日本水彩画会会員。36年白日会会員。36年教員を止め、作品制作。40年水彩連盟結成に参加。会津若松市で没、40歳。**水彩画家**

渡辺小五郎（わたなべ・こごろう/1911～1941 年）

宮崎県生れ。1935年東京美術学校卒業、同年以来毎年二科会に出品、死後二科会々員におされた。1941年没、31歳。彫刻家

渡部金秋（わたなべ・きんしゅう/1860～1905 年）

大垣市生れ。渡部審也の兄。はじめ狩野派を学んだが、上京して宮本三平について洋画を学ぶ。写実力を生かし、85～92年東京帝大で動植物の写生に従事。明治美術会や太平洋画会に出品し、その事務局にも携わった。図案家としての名声も高かった。1905年没、45歳。洋画家、図案家

渡辺謙二郎（わたなべ・けんじろう /1900～1943 年）

宮崎県生れ。1918年旧制県立延岡中学校卒。19年上京、[太平洋画会]研究所に学ぶ。数年後帰郷。家業のかたわら、田園の風景を主に描いた。延岡市で没、43歳。宮崎県総合博物館で開催された82年「延岡の異才」[渡辺謙二郎]・小五郎展」で、展示紹介。詩人渡辺修三、彫刻家の[渡辺小五郎]は弟である。

洋画家

渡辺浩三（わたなべ・こうぞう/1897～1980 年）

秋田県生れ。1917年京城中学校卒。24年東京美術学校西洋画科卒。25～29年パリに留学、ロジェ・ビシエールに師事。31年槐樹社展で槐樹賞。33年東光賞、34年東光会会員、のち委員。34年帝展で特選。47～73年の間、日展で5度の審査員、58年日展会員、74年日展参与。52年秋田市立工芸美術学校校長。56年岡山大学教育学部教授。熊本市で没、82歳。洋画家、美教

渡辺光徳（わたなべ・こうとく/1887～1945年）

福島県生れ。中村不折に師事。銅版画独習。1927～29年帝展入選。28、29年日本創作版画協会展に出品。31年日本版画協会創立会員。1945年没、58歳。版画家

渡辺恂三（わたなべ・じゅんぞう/1933～2013 年）

東京生れ。1957年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒。57、58、61年新制作展新作家賞、63年会員。69年国際青年美術家展でストラレム優秀賞第1席。同年文化庁芸術家在外研究員渡仏、滞在中にパリで個展を開催。76年カンヌ版画ビエンナーレ、リト部門第1位賞。86年池田20世紀美術館で回顧展開催。98年京都文化功労賞、2001年第14回京都文化賞、04年京都文化功労者顕彰。挿絵も描く。東京造形大学美術学科助教授、京都市芸術大学美術学部教授、宝塚造形芸術大学教授。2013年没、80歳。洋画家、美教、挿絵

渡辺小華（わたなべ・しょうか/1835～1887 年）

1835年生れ。渡辺華山の次男。三河田原藩家老。7歳のとき父が自刃。椿椿山、福田半香に画を、大橋訥庵に詩文を関根痴堂に学ぶ。花鳥画を得意とした。1887年没、53歳。江戸時代後期の絵師

渡辺庄三郎（わたなべ・しょうざぶろう/1885～1962 年）

茨城県生れ。1906年版画店尚美堂。09年渡辺版画店を開設。橋口五葉、伊東深木、川瀬巴水らに原画を依頼して新版画を制作。1962年没、76歳。明治-昭和時代の画商、版元

渡辺正太郎（わたなべ・しょうたろう/1894～1973 年）

7月10日生れ。1908年名古屋市商業学校速成科卒。16年太平洋画会研究所卒。第4回二科展に初入選、以後、17回展まで出品。24年第3回円鳥会展に出品。26年第1回聖徳太子奉賛展に出品。27年第8回中央美術展に出品。28年第24回太平洋画会展で会員。30年第2回聖徳太子奉賛展に出品。37年第1回一水会展に出品、以後、4、7回展に出品。73年9月4日船橋市で没、享年79歳。（佐）洋画家

渡辺審也（わたなべ・しんや/1875～1950 年）

大垣市生れ。1892年明治美術会教場に入学、浅井忠らに師事。94年同校卒。1901年明治美術館を解散し、太平洋画会を創立。05年浅井忠と東宮御所天井画を描く。11年太平洋展出品作が宮内庁買上げ。16年文部省嘱託教科書の挿絵を描く。1950年没、75歳。洋画家、挿絵

渡辺審也 II（わたなべ・しんや/1875～1950 年）

岐阜県生れ。1890年上京し、明治美術会教場に学ぶ。浅井忠に師事。92年第4回明治美術会展に出品、以後10回展まで連続出品。1902年第1回太平洋画会展に創立会員として出品、以後、出品を続ける。1909年第3回文展に出品。50年12月5日没、享年75歳。（佐）洋画家、挿絵

渡辺省亭（わたなべ・せいてい/1851～1918 年）

東京生れ。菊池容斎に師事。1875年から起立工商会社で輸出工芸の下絵図案を描く。1878年パリ万博（万博で高賞）、欧州に遊学し、帰国後は洋風表現を加味した花鳥画を描くようになる。明治期の博覧会や展覧会で受賞を重ね、内外で高い評価を得た。出版界で活躍、多くの挿画を手掛けた。木版画を制作。日本画家、版画、挿絵

渡辺大次郎 (わたなべ・だいじろう/大正初期～没年不詳)
札幌商業学校出身。「一九三〇年協会」展、独立展に出品。1933年北海道独立美術作家協会の創立に参加。北海道内では、道展、太地社展、楚人社展に出品した。**洋画家**

渡辺武夫 (わたなべ・たけお/1916～2003 年)
東京生れ。1939年東京美術学校油画科卒。38年光風会展でF氏賞、39年船橋賞、40年光風賞、41年光風特賞、44年会員、90年常任理事、97年理事長。42、43年新文展で特選、61年日展会員、66年評議員、74年日展内閣総理大臣賞、89年日本藝術院賞、同年理事、89年常務理事。55年渡欧、グラン・シヨミエールで学ぶ。56帰国、58年松屋で個展。77、79、82、84年渡仏制作した。東京で没、87歳。**洋画家**

渡辺 武 (わたなべ・たけし/1916～1945 年)
埼玉県生れ。1937年帝国美術学校師範科卒。39年美術文化協会展入選。42年美術文化協会会員。39～44年東宝撮影所美術部に勤務。41年グループ展ジュンヌオムを結成。国画会展入選。1945年沖縄で戦死、29歳。**洋画家**

渡辺 正 (わたなべ・ただし/1928～1993 年)
山形県生れ。48年山形師範学校卒、55年武蔵野美術学校卒。55年独立展入選、71、72年奨励賞、73年独立賞と海老原賞、83年会員。58年個展(東京銀座、ルナミ画廊)開催。同51年の第12回現代日本美術展、同63年の第17回日本国際美術展にも出品した。東京で没、65歳。94年山形美術館「抽象の世界:渡辺正遺作展」開催。**洋画家**

渡辺達正 (わたなべ・たつまさ/1947 年～)
愛知県生れ。1969年多摩美術大学絵画科卒。71年春陽会・研究賞。79年技法書『銅版画』(創元社)刊行。83年現代日本の美術—風景の表現(宮城県近代美術館)。84年ビエラ国際版画展。85年中日美術展(中華民国国立歴史博物館)、日本現代版画展(台北市立美術館)。92年春陽会・岡鹿之助賞。97～2017年年多摩美術大学教授。2007～09年春陽会理事長。**版画家**

渡辺千尋 (わたなべ・ちひろ/1944～2009 年)
東京生れ。1963年桑沢デザイン研究所に入学。78年銅版画制作。79年日本版画協会展奨励賞。89年「象の風景」シリーズがプラハ国立美術館に収蔵。94年『ざくろの空』蓮如賞。「セビリアの聖母」の復刻

過程を記した「殉教(マルチル)の刻印」で小学館ノンフィクション大賞優秀賞。2009年没、64歳。13～14年練馬区立美術館および長崎県美術館において回顧展。**版画家、装展**

渡辺貞一 (わたなべ・ていいち/1917～1981 年)
青森県生れ。1933年青森師範図画専科入学。35年上京し、37年まで川端画学校で学ぶ。41年以後、国展に出品。57年国画会会員。64、65年滞欧。56年から松村画廊で個展。66年西部ギャラリー、72年日仏画廊、79年現代画廊で個展。東京で没、64歳。**洋画家**

渡辺豊重 (わたなべ・とよしげ/1931 年～)
東京生れ。1945年福島県に疎開。55年創元会員佐竹禹南に水彩画師事。56年川崎の美術研究所で難波田龍起、中谷泰に師事。58年創元会展出品。59～65年春陽会展出品。62年銀座、中央画廊個展、作品は抽象画。77年国際青年美術家展で大賞のパリ留学賞。82年池田20世紀美術館で回顧展を開催。88年神奈川県立近代美術館で『今日の作家たち I - '88 江口遇・渡辺豊重展』開催。**洋画家、水彩**

渡辺文三郎 (わたなべ・ぶんざぶろう/1853～1936 年)
岡山県生れ。はじめ円山派の日本画を学び、1873年五姓田芳柳、義松に洋画を学ぶ。東京英語学校の図画教師となる。75～1902年東京開成学校等で教鞭。76年五姓田義松の妹幽香と結婚。77年、81年内国勸業博覧会に出品。89年明治美術会創立に参加。1902年太平洋画会創立に参加。以後、出品。07年文展に出品。晩年は墨画を制作。1936年没、83歳。**洋画家、美教、水墨**

渡辺豊州 (わたなべ・ほうしゅう/1863～1915 年)
大阪生れ。大阪の文人画家木下芦洲に日本画を学ぶ。明治10年代(1877年)ワグマンに師事、洋画を学んだと伝えられる。横浜で輸出用の絵(日本風景、風俗)を岩彩、水彩で描く。1904年頃日本美術協会会員。05年太平洋展に出品。東京で没、51、52歳。亀高文子は長女。**日本画家、洋画、水彩**

渡辺豊州 II (わたなべ・ほうしゅう/1863～1915 年)
大阪生れ。本名豊次郎。大阪の文人画家、木下芦洲に日本画を学ぶ。1877 年代上京、ワグマンの画風を慕い洋画を学んだと伝えられているが不詳。横浜で外国商館に勤めて絵を描く。明治30年代後半には日本美術協会会員となる。1905 年第4回太平洋画会展に出品。明治後期から活躍した渡辺文子の父。15 年東京で没、享年51、52 歳。(佐) **日本画家、洋画、水彩**

渡部 満 (わたなべ・みつる/1953 年～)
青森県生れ。1985年日伯現代美術展安田火災美

術財団奨励賞。86、87、90、91年日仏現代美術展出品。89、91年現代日本美術展出品。91年個展(東京セントラル絵画館)。95年小磯良平大賞展大賞。96年両洋の眼「現代の絵画」展出品(同'97)。個展(梅田近代美術館・東京大丸美術画廊)。無所属。洋画家

渡辺明節 (わたなべ・めいせつ/1929年～)

いわき市生れ。1951年東京藝術大学日本画科卒。現日美展で受賞。83年「サンドインスタレーション」を展開、大きな反響を得る。90年没後、仁摩サンドミュージアム内に於いて作品を常設展示。サンドインスタレーション

わたなべ ゆう (わたなべ・ゆう/1950年～)

山梨県生れ。1988年日本国際美術展・佳作賞。90年上野の森美術館絵画大賞展・大賞、日本IBM美術奨学大賞。91年吉井画廊で個展。92年現代美術展・佳作賞。94年山梨県新進作家選抜展・山梨県立美術館賞。95年安井賞展・安井賞。97年江原画廊で個展(毎年)。99年アサヒギャラリーで個展。洋画家

渡辺祐一郎 (わたなべ・ゆういちろう/1921～1995年)

北海道生れ。1942年東京美術学校油画科卒、藤島武二に師事。48年一水会展で一水会賞、53年会員、常任委員。52年日展で特選・朝倉賞、53年無鑑査、75年会員、88年評議員。57～58年渡仏留学。59年東京大丸で滞欧作品展開催。東京で没、74歳。洋画家

渡辺幽香 (わたなべ・ゆうこう/1856～1942年)

江戸生れ。父は初代五姓田芳柳、兄は義松。76年画家渡辺文三郎と結婚。華族女学校で教鞭。77年内国勸業博覧会に油彩を出品、褒状。86年石版画集「寸陰蔓稿」、87年銅版画集を玄々堂より風俗画集を出品。90年内国勸業博覧会で褒状。東京で没、88歳。洋画家、版画

渡辺百合子 (わたなべ・ゆりこ/1904～45年)

千葉県生れ。青山女学院卒。10代で朱葉会会員。帝展入選。1924～27年渡仏、ゲラン研究所で学ぶ。帰国後、帝展、文展、朱葉会で活躍。30年大久保作次郎と結婚。1945年没、41歳。洋画家

渡辺義知 (わたなべ・よしとも/1889～1963年)

東京生れ。日本美術学校で彫刻を研修、大正末年頃二科展彫刻部に作品を発表。1925年～二科展、26年二科展に頭像を主に出品した。28年二科賞、会友、31年会員、31年二科会の研究所である番衆技塾の指導者。先輩の藤川勇造と共に彫塑科を担当指導した。32年渡欧。以来二科彫刻の中心的存在となり、33年から戦争渦中にかけて、連年二科展に発表

した「国土を譲る」の記念像連作は、時局精神作興の要望に応えた。戦後、二科会復活に逸早く参加したが、46年民主日展への参加問題に関する意見の衝突のため、同会から除名。晩年の主な作に、「シジフォス」(昭35・第3回日展招待)、「白雲」(昭36・第4回日展招待)や「広島赤十字原爆殉職者慰霊塔」(昭36)。東京で没、74歳。彫刻家

渡辺與平 (わたなべ・よへい/1888～1912年)

長崎県生れ。京都市立美術工芸学校卒。1904年室町画塾で鹿子木孟郎に師事。06年中村不折に学ぶ。08年文展に初入選。10年文展で三等賞。挿絵画・日本画も描く。「ヨヘイ画集」を出版。12年没、24、25歳。(出典 わ眼)洋画家、挿絵、日本画

渡辺亮輔 (わたなべ・りょうすけ/1880～1911年)

宮城県生れ。1899年東京美術学校西洋画科入学、1905年まで同校研究科で学ぶ。黒田清輝の教えを受け、明治美術会系の画家たちの脂派(旧派)に対して、その明るい外光表現と影の部分に紫色を多用したことから紫派(新派)と呼ばれた画風を学ぶ。1911年没、30歳。宮城県美所蔵の《樹陰》は、07年文部省美術展覧会(文展)の第1回展に、《夏の朝》とともに入選した作品。洋画家

渡辺亮輔 II (わたなべ・りょうすけ/1880～1911年)

宮城県生れ。1899年宮城中学卒。1902年第7回白馬会展に出品。以後9～10回展に出品。03年東京美術学校西洋画科選科卒。黒田清輝に師事。03～07年まで、報知新聞、日本新聞、国民新聞に挿絵を描く。06年一時、中村不折の指導を受ける。07年第1回文展に初入選。同年病のため、文展を見ることなく帰省、以後郷里で療養生活に入る。11年7月27日宮城県で没、享年31歳。中村不折が墓碑銘を書いた。(佐)洋画家

綿貫不二夫 (わたぬき・ふじお/1945年～)

現代版画センターは、現在ときの忘れもののディレクター綿貫不二夫が1974年創立。現代版画センターは会員制による共同版元として1974年～1985年までの11年間に約80作家、700点のエディションを発表し、全国各地で展覧会、頒布会、オークション、講演会等を開催した。小コレクター活動の中核を担った。毎日新聞社に在籍していた綿貫不二夫が新聞社の事業として1973年秋ころから企画立案し、社内外の多くの協力者を得て1974年5月久保貞次郎を顧問に、尾崎正教を事務局長に迎え創立。当初は法人格を持たない任意団体としてスタートし、経理的には毎日新聞の子会社の一部署として運営。その後、毎

日新聞社が経営危機に陥り、1976 年綿貫が退社、社が注ぎ込んだ資金を全額買い取る形で独立し、法人化(株式会社)した。資本金 400 万円は綿貫と毎日新聞の幹部(綿貫の上司)が個人として出資。集団版元による版画エディションの創造を目指したのが「現代版画センター」。1985年倒産。2018年埼玉県立美術館で現代版画センターの軌跡展が開催。多くの人々が手にすることのできる「版画」というメディアの特性を生かし、その普及とコレクターの育成を目ざして誕生した「現代版画センター」(1974-85)。数多くの美術家や批評家が寄稿した「現代版画センターニュース」や、主催の展覧会カタログを中心とする出版事業を活発に行い、美術界に大きな影響を与えたことが注目された。**元現代版画センター代表、ときの忘れもののディレクター**

綿引明浩 (わたびき・あきひろ/1960 年～)

水戸市生れ。1984年東京藝術大学美術学部首席卒業 買上賞、86年同大学大学院修了。84年西武美術館版画大賞展 優秀賞。2002～3年文化庁芸術家海外派遣 スペイン。＜作品所蔵＞東京藝術大学資料館、原美術館、東京国立近代美術館、茨城近代美術館、水戸博物館、カナダ アルバータ州立大学。**洋画家、版画家、ガラス絵、アニメ**

渡部 満 (わたべ・みつる/1953～2012年)

青森県生れ。1985年日伯現代美術展で安田火災美術財団奨励賞。86年日仏現代美術展出品(同'87'90'91)。88年銀座大賞展画廊奨励賞・日本国際美術展出品(同'90)。89年現代日本美術展出品(同'91)。91年 個展(東京セントラル絵画館)。92年ヴェガの会(渋谷西武)・日本画廊協会展出品。95年小磯良平大賞展大賞。96年両洋の眼「現代の絵画」展出品(同'97)。個展(梅田近代美術館・東京大丸美術館廊)。無所属。2012年没、59歳。**洋画家**

和田義彦 (わだ・よしひこ/1940～2016 年)

三重県生れ。1963年東京芸術大学美術部油画科卒。65年同校大学院研究科修了、研究副手。66年国展で野島賞、70年国画会会員。71～76年イタリア政府給費留学生、模写を行う。85～2002年名古屋芸術大学美術学部教授。02年安田火災東郷青児美術館大賞。東北福祉大学特別任用教授。2005年芸術選奨文部科学大臣賞。06年伊画家アルベルト・スギの作品と類似疑惑により芸術選奨文部大臣賞、青児美術館賞取り消し。国画会退会。2016年没、76歳。**洋画家**

和多利志津子 (わたり・しづこ/1932～2012 年)

富山県生れ。服飾デザインの仕事をを経て、自宅を改装して1972～年ギャラリーワタリ(現、渋谷区神宮

前)を開く。～88年まで、国内外のアーティストの個展を開催。ドナルド・ジャッド、ナム・ジュン・パイク、ソル・ルウィット、ロバート・ラウシェンバーク、アンディ・ウォーホル、ヨーゼフ・ボイス、同展はナム・ジュン・パイクとの二人展)、ジョナサン・ボロフスキー70 年代から 80 年代の欧米の先端的なアーティストを日本に招聘しながら積極的に、また先駆的に紹介した。ビデオ・アートの先駆者であったナム・ジュン・パイク(1932-2006)とは、パイクの生涯にわたり個人的にも深く交友。90年同画廊の敷地にワタリウム美術館が開館、現代美術ばかりでなく、建築家、詩人、写真家等の多彩な人物をとりあげて展覧会を開催した。画廊経営から私設美術館の運営にわたる和多利の一貫した姿勢は、アーティスト等注目した人物その人に直接会って交渉し、話し合いを通じて理解を深めることから始めている点に特色がある。岡倉天心(「岡倉天心展 日本文化と世界戦略」、2005 年 2 月-6 月)、南方熊楠(「クマグスの森 南方熊楠の見た夢」、会期:2007 年 10 月-08 年 2 月)、ブルーノ・タウト(「ブルーノ・タウト展 アルプス建築から桂離宮へ」、会期:2007 年 2 月-5 月)等がある。特に岡倉天心については、研究者ばかりではなく、他分野の専門家を招いて独自に研究会を 10 年間にわたり主宰して準備にあたった。2012年没、80歳。**ギャラリーワタリ、ワタリウム美術館長**

藁谷 実 (わらや・みのる/1956 年～)

東京生れ。1981年 東京藝術大学美術学部卒。83 年同大学美術研究科絵画(日本画)修了。88年青垣日本画展で優秀賞。96、97、06、07、12、13年院展奨励賞。11、15年日本美術院賞(大観賞)。16年日本美術院同人。広島市立大学芸術学部教授。**日本画家、美教**